

又眼を當てがつて、そしてこのあきれた醉漢等が煙に包まれ、相變らず我嗚り立てゝは飲み上げてるのを見出してやつぱり腹を立てた。居酒屋アソシエーションの明りは、一直線に歩道の中腹に反映してゐた、其處へは雨が小さな數々のしぶきの身振ひを置いてゐるのだつた。彼女は飛び退いた、彼女は其處で泥をこねた、入口の戸は銅のバンドでぎいつと云つて開かれたかと思ふと再び閉ぢられた。とう／＼、彼女は愚かにも名をつて出た、彼女は戸を押して眞つ直ぐにクウボオの卓子へと進んで行つた。何んのかと云つたとて、さうではないか？ 彼女が尋ねて來たのは自分の夫なのだ。そして彼女は其處へ行く事だつて公然だ、なぜならば彼は、その晩は、彼女を曲馬場へ連れて行く約束をしてゐたのだ。一番悪いと云へば！ 彼女は石鹼のやうにして、歩道で溶けてしまふのを願つてゐなかつた事なのだ。

——おや！ お前だつたのか、婆さん！ 嘲罵で喉をくびられさうにしてゐる亞鉛工は叫んだ。ああ！ いゝ茶番だ、云つて見りやよ！……え？ 全くぢやねえか、いゝ茶番だ！

みんな笑ひ出した、メ・ポット、ピピラ・グリヤード、ボア・サン・ソアのベク・サレーが。さうだ、彼等に取つては茶番のやうなものだつた。そして彼等はなぜかは説明しなかつた。ヂェルエエズは少しまごついて、突つ立つたまゝでゐた。クウボオは彼女には頗るおとなしさうに見えてゐたので、彼女は向う見ずに立つた、

——お前さんねえ、私達ア彼處へ行くんだよ。馬乗りに行く筈なんだよ。急いで行つたらまだ少

しや見る時間があらうよ。

——己ア起き上がれねえんだ、張り付かつちやつたんだ、おゝ！ 冗談ごつちやねえ、相變らず無駄口を叩いてるクウボオは又云つた。試めして見る、さうしたら分らア。己の腕を引つ張つてくれ、力有りつたけにだ、實際全くよ！ もつときつくよ、おい、捻ぢ切れるツ！……どうでえ、コロンブ爺さんのあの野郎が己を彼奴の腰掛へ螺旋ねぢづけにしちやいやがつた。

ヂェルエエズはこの遊戯に引つかゝつた。で、彼等が彼の腕を放なしてしまふと、仲間の者共は引つばたかれた驢馬のやうに大聲を揚げたり肩を擦り付け合つたりして、上を下へと揉み合つて面白がつた。亞鉛工は笑つて／＼、腸までも見える位に口を裂いて笑つた。

——やくざ阿魔！ 彼はとう／＼云つた。まア掛けたらいゝだらう。外へ出て泥をこねくるよりかその方が増しだよ……全く！ さうよ、己ア怖れなかつたんだ、己ア用があつたんだ。お前が顔を長くしてたつて、どうにもならねえのさ……さア手前達ア退いてる、外の奴等アみんな。

——おかみさんが己の膝を抱きてえつてんなら、その方がよつぽどおつだらうぜ、メ・ポットは嫌や味つたらしく云つた。

ヂェルエエズは、目立たないようにと、一つの椅子を取つてそして卓子から三步許りの處へ腰をかけた。彼女は男共の飲んでるのを見た。それはコップの中で、金のやうに輝いてるカッス・ギユウル

(「ブルグ」だつた。卓子の上には小さな水溜りが流れてゐた、そしてポア・サン・ツアアのベク・サレーは、喋舌り立てゝゐながら、彼の指を濡らして、大文字で、ウウラリイと女の名前を書いてゐた。彼女はピ・ラ・グリヤードがひどくいら／＼してゐて、百封度の釘よりも瘦せてゐるのを見てとつた。メ・ポットは花の咲いたやうな鼻をしてゐた、本當にブルゴオギユの青ダリヤのやうだつた。彼等は四人共非常に汚なかつた、彼等の硬張つた、そして尿色の鬚の穢さは部屋の唾壺の中へ突つ込んだ筈のやうで、仕事着の襤褸はさらけ出し、死人のやうな爪をした黒い前足を差し出してゐた。だが、實際は、彼等の連中の間にあつてはまだ見られた、なぜと云つて若し彼等が六時からちびり／＼やつてゐたとしても、彼等は兎に角正氣でゐた、丁度まだ彼等の體の蚤共を悦ばせてゐる位ゐる程度だつた。ヂェルズエズは客の他の二人がスタンドの前でぐびり／＼やつてゐるのを見た、彼等は小さなコップを腮の下にかひ、そして彼等のシャツを、敷石を洗ひでもするやうに濡らしてゐる位ゐる泥酔してゐた。大きな圖體をしたコロンブ爺さんは、彼の建物の護身用を勤めてゐる、その巨大な腕を伸ばして、靜かに獻杯を注いでゐた。非常に暑かつた、パイプの煙は瓦斯の眩暈せんばかりの輝きの中に立ち登り、其處で塵のやうに渦を巻いて、皆の者を徐々に濃くなつて行く雲霧で溺らせた。そして、この雲の中から、物の碎けたやうな聲、コップのちやんと云ふ音、爆鳴にも似た冒瀆の言やら拳固の響きと云つたやうな、耳をも破れんばかりのそしてこんがらかつた大喧囂が湧いて來てゐた。でヂェルズエズは變挺

な顔付をしてゐた、かうした有様は女の身に取つて、何んの興味もないものだつたから。わけて慣れてゐなかつたらさうだつた。彼女は眼は焼けたゞれ、頭はもう部屋全體が吐き出してゐるアルコールの臭氣で重苦しくなつてしまつて、息詰つてゐた。それから、急に、彼女は自分の背後に更に心が／＼不安を感じた。彼女は振り返つた、と其處には蒸溜器があつた、酔漢製造機だ、それが地獄の厨房のやうな底氣味の悪い震動を立てゝゐた。晩には、銅の部分が更に陰鬱になつて、赤熱した大きな星のやうなその丸い處だけが明るく光つてゐた。そして機械の影法師は、奥の壁の上に、厭ふべき様々の形相を描いてゐた、それは尻尾のある人間共や、人間共を吞噬しようとして彼等の顎骨を削いてゐる怪物共だ。

— おい／＼、マリイ・ボン・ベク (のけりい)、一杯やらかさねえかい！ クウポオは叫んだ。なアおい、しらふぢや興がねえ！……お前何を飲むかね？

— 何んにも、本當に、女洗濯屋は答へた。私や食事をしないんだよ、私や。

— 全くなア！ ぢやア猶更だ。一時は凌げるよ、何か一杯やりや。

然し、彼女はうかぬ顔をしてゐたので、メ・ポットは又お世辭を使つた。

— おかみさんは甘いのが好きに違えねえ、彼は呟いた。

— 私や酔つ拂はない男が好きだよ、彼女は怒つて云ひ返した。さうだ、私や自分の給料を持ち

歸るやうな、約束をした時にやそれを守るやうな人が好きだ。

——あゝ！ それがお氣に障つてるのかね！ 亞鉛工は相變らず茶化しながら云つた。お前は分
け前が欲しいと云ふ。ちや、大きなねんね奴、なぜ手前はおこつてやらうつてのを受けねえんだ？
……さア持て、こりや全く飲み得だぞ。

彼女は屹となつて、額に黒い畝のやうな皺を寄せて、彼を見つめた。そして彼女はゆるい聲で答
へた。

——おやまア！ お前さんの言ふのは尤もだよ、そりやいゝ思ひ付きだ。かうやつて、私達ア一
緒におあしを飲んでしまはうつてんだもの。

ビビラ・グリヤードは起ち上つて彼女の爲めに茴香酒を一杯取りに行つた。彼女は自分の椅子を進
めて、卓子にくつ付いた。彼女は自分の茴香酒をすゝつてゐると、忽ち回想に陥つた、彼女は昔、
クウボオが自分を追つかけて廻してゐた時分の事、入口に近く坐つて、彼と一緒に食つた梅の實のこ
とを想ひ出した。その時分には、彼女はブランデーに漬けた果物の汁は残した。そして、今は、此
處で彼女は再び酒を飲まうといふのだ。おゝ！ 彼女は自分を知つてゐた、彼女は自ら進んでは二
アル(二アル)だつて使ひはしなかつた。が彼女を酒の中へ筋斗り打たせる爲めには腰の邊を爪弾じき
するだけの手數だつたかも知れない。で彼女には茴香酒が可成りにいゝものらしかつた、多分は餘

りに甘美に、少しむせ返りさうだつた。そして彼女は、肥つちよのウウラリイとの彼の關係を語つ
てゐるボア・サン・ソアアのベク・サレーの話に聞き入りながら、彼女のコップをすゝつてゐた、その
女と云ふは街で魚を賣つてゐた、ひどくずるい女で、歩道に添うて、彼女の車を押して歩きながら、
酒場にゐる彼を屹度嗅ぎ付けてしまつてゐた。仲間の奴等は彼に告げてやつたり彼を隠したりした
が無駄だつた、彼女はよく彼をつまみ出した、それどころか彼女は、その前日には、仕事場を缺勤
しないよう彼に思ひ知らせる爲めに、顔へ鰈を投げ付けさへした。それはまア、可笑しいといつた
らなかつた。ビビラ・グリヤードとメ・ポットは脇腹をめぐられる程笑つて、デュルゼエズの肩を叩い
た。彼女もとう／＼、くすぐられでもするやうにそして心ならずも、笑ひ出した。で彼等は彼女に
肥つちよのウウラリイに倣つて、彼女のアイロンを持つて來て、居酒屋の亞鉛の上でクウボオの兩
耳へアイロンをかけてやれと勧めた。

——うめえぞ！ ありがてえ仕合せだ、クウボオは彼の妻の明けた茴香酒のコップを引つくり
返して叫んだ。おめえ、素ばらしくいけるな！ どうだい、相棒、かゝあの手際を見てくれえ
や。

——おかみさんお代りは？ ボア・サン・ソアアのベク・サレーは訊いた。

いや、彼女はもう澤山だつた。彼女はけれどもためらつてゐた。茴香酒は彼女の心臓を熱くした。

彼女はそれよりか空腹をいやす爲めに何か食べ物を取りたかつたであらう。で彼女は自分の後ろの、酔漢製造機へ横眼を遣つてゐた。この奇妙な鍋は、肥えたんぼの鍋屋のかみさんの腹のやうにまる／＼して、延びたり縮んだりするその鼻でもつて、希望と恐怖とこんがらかつたやうな、一種の戦慄を彼女の肩に吹き送つてゐた。さうだ、大きな銑鐵塊の臟腑、その内臓の火氣を一滴々々放つてゐる何かかう魔女の臟腑とでも云ひたさうだ。全く毒の泉だ、窖の中へ葬らるべき機械だ、何んて恥知らずな、そして厭ふべきものだ！ 然しそれにも拘らず、彼女はその中へ鼻を突つ込み、悪臭を嗅ぎ、下等飲料を味ひたさうだつた、たとひ彼女の焼けたぐらした舌を蜜柑のやうに一度に皮を剥かれてしまはなければならぬ分でも。

——ちやお前さん達の其處で飲んでるのは何んだね？ 彼女は彼等のコップの美しい金色に眼を光らして、男連にそつと訊いた。

——これか、うちの婆さん、クオボオは答へた。これやコロンブ爺さんのカンフルさ……剛情を張るなよ、なア？ 一つやらかして見ろ。

そして彼等が彼女に半トリオルを一杯持つて来てやつて、彼女の顎骨が、最初の一口でひきつてしまつた時に、亜鉛工は腿の上を叩きながら、再び云つた。

——え！ 喉笛がひり付くだらう！……一杯ぐつと飲み。一杯献上するたんびに醫者のポケット

からは六フランの金貨が退散召さるわ。

二杯目には、ヂェルエズはもう自分を苦しめてゐた飢ゑは感じなかつた。今や彼女はクウボオと仲直りが出来た、彼女はもう違約を責めようとしてゐなかつた。彼等は又の時に曲馬場へは行けもしよう。馬の上で駈けつて見せる手褻使ひなんかそんな面白可笑しいものではない。コロンブ爺さんの處では雨は降つてはゐなかつた、そして若し使つた金が腹の中で溶けてしまふにした所が少くとも胴體に着けてはゐるのだつた、透き徹つたそして輝く、美しい金のやうな液體を飲むのだつた。あゝ！ 彼女は世界中に喇叭飲みをさせたい位だつた！ 人生は彼女にこれ程な愉快さを提供しては呉れなかつたのだ。それに、錢をまき散らしてしまふのにかうして半口のるのは、彼女にとつてはせめてもの心遣りでもあつた。彼女がかう安氣になつてしまつたからには、ではどうして居残らないつて法があるのだらう？ 大砲を打ちかけたからとて、彼女はお御輿を据ゑてしまつた今では、もう動きたくもなかつた。彼女は丁度いゝ暑さに煮えくり返り、彼女の胴着は背中へへばり付いてしまひ、彼女の手足を麻痺させる安逸に漬かり込んでゐた。彼女はひとりつきりで浮かれてゐた、兩脇は卓子に突き、眼はどろんこになつて、二人の常得意を見て頗る興がつてゐた、一人は肥つちよで一人は一才法師の彼等は、酔ひが廻つて來ると隣の卓子で、二片のパンのやうに夢中になつてべた／＼キッスし合つてゐた。さうだ、彼女は酒場のすべてのものに興味を持つた、満月の

やうなコロンブ爺さんを、本當に豚の膀胱のやうな奴だと喚いたり唾を吐いたりして、彼等の安物のパイプで煙草をふかし立てゝゐるお客達を、窓硝子や酒の罎を照し出してゐる瓦斯の大きな火焰を、悪臭ももう彼女を苦しめなかつた。あべこべだつた、彼女は鼻の中がこそばゆかつた、彼女はいい臭ひだとさへ思ふやうになつてゐた。彼女の眼瞼は少し閉ぢられてゐた、けれど彼女は非常に短く呼吸してゐた、息切れはせず、自分の襲はれ出したゆるい睡む氣の享樂を味ひ乍ら。それから、三杯目の彼女の小さいコップを乾すと、彼女は彼を手の上へ落してしまつた、彼女にはもうクウポオと仲間の者達しか見えなかつた。そして彼女の兩頬は彼等の喘ぎで熱し、その毛の數を勘定でもしてゐるやうに、彼等の汚い鬚を眺め入りながら、殆どすれ／＼に、鼻と鼻を突き合せたまゝでゐた。彼等はこの時には、非常に酔つ拂つてゐた。メ・ポットはパイプを齒でくはへ、睡む氣を催した牛のやうな押し黙つた重々しい様子をして、涎を垂らしてゐた。ビビラ・グリアードは或る話をしてゐた、それは彼が罎を一と息に空らしにしてしまふ仕方だつた、罎へぐい飲みをキッスをしてるかと思ふと、瞬く間に底が見えた。けれども、ボア・サン・シアフのベク・サレーは、カウンターのの上からラツウルニケー(指針を廻して止まつた所の香煙を傳へるとする器)を持つて來てクウポオとおどりつこをやつた。

——二百だ！……手前は運がいゝ、いつやつてもでつかい數を出しやがる。ウルニケーの翼が軋んで、コップの下に置かれてある、赤い大女の、運命の神の繪が、ぐる／＼廻り出すと、葡萄酒はの

汚染のやうに、真ん中でもう丸い一點になつてしまつてゐた。

——三百五十だ！……ぢやア手前中なかを動かしやがつたな、素敵なずる助奴！ あゝ！ 糞ツ！
己アもうやらねえ！

でヂェルエエズはツウルニケーを面白がつてゐた。彼女はひどく喉が乾いてゐた、そしてメ・ポットを《私の倅》と呼んでゐた。彼女の後ろでは、醉漢製造機が、その地下の流れの眩きと共に、相變らず働いてゐた。そして彼女はそれに對して陰氣な怒りに襲はれて、動物でももあるやうに大きな蒸溜器へ飛びかゝつて足で蹴飛ばしてどてつ腹へ風穴を明けてやりたいやうな氣がした。そしてそれが止まりもしなければ、盡きるのも知らないのに絶望してゐた。一切が頭の中でもつれ合ひ出した、彼女は機械が再び動くのを見てゐた、彼女はその銅の前足で自分がとつ捕まつてるやうな氣がしてゐた、さうして、その流れは今度は彼女の體を横切つていくやうな氣がした。

それから、大廣間が踊り出した、そして瓦斯燈が流星のやうに尾を引いて旋廻した。ヂェルエエズはもうすつかり酔つてしまつてゐた。彼女はボア・サン・ソアフのベク・サレーとあのコロンブ爺さんの石頭との、激しい爭論を聞いてゐた。飲みもしねえ勘定を付けやがる亭主の泥棒野郎！ と云つたからつて此處は泥棒國ぢやねえんだ。然し、忽ちにして、押し合ひ、唸り聲、卓子のひつくり返る大騒動が始まつた。遠慮會釋なく、手をひろげて、みんなを外へ追ひ出してゐるのはコロンブ爺

さんだつた。戸の前で、彼等は彼を罵り、彼等は彼を無頼漢と呼んだ。雨は相變らず降つてゐた、氷るやうな風も吹き出してゐた。ヂェルゼエズはクウボオを見失ひ、再び見出し、そして又見失つてしまつた。彼等は歸らうと思つた、彼等は自分の道を知らうとして店屋々々の軒を手さぐりして行つた。この不意の暗夜は彼女を少からず恐怖させた。ポアソニエー街の角で、彼女は溝の中へ坐り込んでしまつた、彼女は洗濯場にゐるやうな心持だつた。流れ水はすっかり彼女に眼をまはさせて非常に氣色を悪くさせた。とうとう、彼女は家に歸り着いた、彼女は門番夫婦の戸の前を固くなつて通り抜けた、其處にはロリュウ夫婦にポアソン夫婦が椅子にかけてゐたのを彼女ははつきりと見て取つた、彼等はこのいゝ態をした彼女の姿を見て愛相が盡きたとでも云つた掣め顔をしたのであつた。彼女はどうして自分が六つの階段を登つたのか知らなかつた。上つてしまつて、廊下へ出ると、彼女の足音を聞いてゐたラリーイが、愛撫するやうな恰好で兩腕をひろげて、駈け付け、にこ／＼しながら云つた、

——ヂェルゼエズのおかみさん、お父つあんはまだ歸らないんだよ、さア來て私の子供達の寝てるのを見ておくれ……おゝー！ そりやおとなしいんだよ！

だが、女洗濯屋のどんよりした顔を見ると、彼女は飛びすさつて震へ出した。彼女はそのブランデイの息、その蒼白い眼、そのひきつた口を知つてゐた。その時、ヂェルゼエズはよろめきながら、

一と言も云はずに前を通つた、その間子供は、彼女の戸口の闕の上に突つ立つて、その黒い、押し黙つた、そして眞面目腐つた眼付きで彼女を見送つた。

十一

ナナはだん／＼大きくなつて、益々賣女になつて行つた。十五の歳で、彼女は仔牛程も脊が伸び、肉は眞つ白で、脂ぎつてゐて、毳と云つてもいゝ位ぬにぼちや／＼してゐた。さうだ、その通りだつた、十五歳、齒並はすつかり揃つてコルセットはしてゐなかつた。本當に娘々した顔だつた、ミルクに漬つたやうな皮膚は、桃のやうにすべ／＼して、鼻は可笑した恰好をして、口は紅く、眼はカンケー燈のやうに光つて、男共はそれで彼等のパイプに火を點けたい位ゐだつた。彼女のブロードの束髪は、生き／＼した燕麥のやうな色合ひを見せ、蟀谷こめかみの上に金粉を散らしたやうにかゝつて、雀斑そばかすは其處へ日の冠を置きでもしたやうだつた。あゝ！ 美しいお人形だつた、ロリュウ夫婦が云つてゐたやうに。まだ鼻をかねでやらなければならぬやうな年なのに、その肥つた肩にはすつかり丸味が出来て、大人のやうな成熟した臭ひをさせてゐた。

今では、もうナナは紙のポールを彼女の胴衣に詰め込みはしなかつた。腰付が彼女には出来て来て、眞新しい白い縞子のやうな腰が。そしてそれは、少しも彼女を困らせはしなかつた、彼女は兩

腕に一杯でも欲しかつたことだらう、彼女はうんま／＼のお菓子を夢みてゐた、若さはそれ程までに飽食で無分別だつた。彼女をわけて挑發的にしてゐたのは、彼女の白い齒の間から舌の先を一寸出すと云ふ習慣であつた。勿論、方々の鏡で自分の顔を眺めてみると、彼女はこのやうにしてゐるのが一番美しいと思つた。で一日中、彼女は舌を突き出してゐたのである。

——まアお前の嘔吐き舌を隠くしてお置き！ 彼女の母親はかう叫んだ。

そしてクウポオもよくそれには干渉しなければならぬやうな事があつた、拳固を叩き立てながら、悪體口で怒鳴り立て、

——手前は赤え襪をしまつて置かねえつてののか！

ナナは非常にコケッとな風になつた。彼女は足はいつも洗はなかつた、けれど半靴はサン・クレパンの牢獄で苦しんでゐる殉教者程の、ひどく窮屈なのを穿いてゐた。そして若しか人が彼女の紫色になつてゐるのを見て、訊くと、彼女は自分のおしゃれを白状しない爲めに、腹が痛いのだと答へた。家にパンがないやうな時など、彼女は身を飾ることが困難であつた。さうした時には、彼女は様々の奇蹟を行つた、彼女は工場からリボンを持つて歸る、化粧道具は整へる、汚ない着物へは綴ぎはぎをして着てゐた。夏は彼女の勝ち誇る季節だつた。六フランの金巾の着物一枚で、彼女は彼女の日曜全體を過ごした、彼女はグウト・ドル街を彼女のブロードの美しさをこれ見よがしに歩いた。さう

だ、場末の並樹街から要砦に至る迄、クリギヤンクウルの中央道からシヤベルの大通りに至る迄、人はみな彼女を知つてゐた。彼等は彼女を《小さな牝鶏》と呼んだ、それは彼女が本當にひよつ子のやうな柔かい肉と生き／＼した様子をしてゐたから。

上衣はわけて彼女には完全にうつつた。それは桃色の豌豆の形を置いた、極めてあつさりした、何んの飾りもない、白の衣裳だつた。スカートは、少し短く、足を見せてゐた。袖は大きく開いて垂れさがつて、彼女の腕を眩の處まで出してゐた。胴衣の頸は、階段の暗い角での、父親のクウポオの平手打ちを避ける爲めに、ピンでハート形に開いておいて、彼女の頸の雪のやうに白い處と喉の琥珀のやうな蔭の處を見せてゐた。そしてそれより外には何んにもない、ブロードの髪の毛の廻りに結びつけてある桃色のリボンの外は何んにもないのだ、そしてそのリボンの兩端は彼女のぼんのくぼの上に翻つてゐた。彼女はさうした中に花束のやうな水々しさを持つてゐた。彼女は若さの芳香を發散させてゐた、成女になりかゝつたものゝ裸の香ひを。

この時代の彼女にとつて日曜々々は、群集との出會ひの日だつた、通りすがりのそして彼女を横目に見て行く處のあらゆる男達との。彼女は彼等を一週間で待つてゐた、諸の小さな希望でこそばゆくされ、息詰まらせてゐた、晴衣を着た郊外街の雑沓の中を、太陽を浴びて散歩しながら、大氣を吸ひたいと云ふ渴望に捉へられて。朝早くから、彼女は着物を着出した、彼女は幾時間も箆笥の

上にかゝつてゐる鏡の前にシャツのまゝであつた。で、貸家中の者が窓から彼女を見る事が出来るので、彼女の母親は腹を立て、彼女に何時まで米利堅防風のやうな恰好をしてうろついてゐるつもりかと訊くのであつた。だが、彼女はをさまり返つて、砂糖水で額の上の後れ毛をはり付け、半靴の釦を縫ひつけたり着物の綻びを繕つたりしてゐた、足は裸で、シャツは肩までも亘らせ、亂れ髪をしまゝで。あゝ、彼奴ア鴟梟だ、この鹽梅ぢや！ 父親のクウボオは茶化しては彼女を罵つた。本當にマドレエヌ・ラ・デゾレー(失禮のた)だ！ 彼女は獸のやうな女になるかも知れねえ、二スウで見せ物にだつてなるかも知れねえ。彼は彼女に叫んだ、(手前の牛肉を隠して置きやがれ、せめて己がパンを食つてゐる間だけでも！)ところが彼女は彼女のブロードの髪の毛の溢れた下で眞つ白に肌理こまかに、實に美しかつた、そしてその皮膚が紅くなつてしまふ程激怒し、彼女の父親には返答もしないで、荒つぽく激しく、齒できつと絲を嚙み切り、怒りの戦慄は美しい娘として彼女の裸體を揺つてゐるのであつた。

それから、食事が済むが早い、彼女は飛び出して行つて、中庭へ降りた。日曜の暖い平和は、貸家を眠りこけさせてゐた。階下では工場々々が鎖されてゐた。部屋々々はその口を開いた窓々で欠伸をし、要砦邊まで行つて食欲を充たしてゐる最中の、家族の者等を待ちながら、既に晩の用意がされてゐる方々の食卓を見せてゐた。四階の、一人のかみさんは、一日彼女の部屋を洗ふのに費して

ゐた。彼女のベッドをころがしたり、家具をがた／＼させたり、數時間もの間同じ唄を、甘いそして泣くやうな調子で歌つてゐるのであつた。で、商賣はみんな休んでゐる中で、空つぽなそしてよく響く中庭の眞ん中で、ナナヤ、ポオリイヌだとか外の大きい女の兒等の間に羽根つきが始まるのだつた。彼女等は五六人で、一ところにかたまつて、この家の女王達になりすまし、旦那方の色目にあづかるのであつた。一人の男が中庭を横切ると、凱歌のやうな笑聲がおこつて、彼女等の洗濯の出來たスカートの衣擦れの音が風のやうに通る過ぎるのだつた。彼女の上の方には、休日の空氣は、燃えるやうな重くるしい、陽炎を立て、遊惰で氣つたるくされでもしたやうに、そして散歩の塵で白くされてゐた。

だが、羽根つきの遊びは逃げ出す爲めの手だてに過ぎなかつた。忽ちにして、貸家は大きな沈黙に返つた。彼女等は街へすり抜けて場末の並樹街へ出てしまつた。彼女等六人は派手な着物を着、帽子を冠らない髪の廻りにリボンを結び付けて、腕を組み合せながら、車道一杯に、通つて行くのであつた。生き／＼した眼で、氣取つた眼瞼の隅から流し眼を使つて、彼女等は何んでも見た、彼女等は笑ふ時には首をそっくり返して、腮のあたりの肥つた肉付を見せた。陽氣にとつと大聲に笑つて、尙僕が通つたり、老婆が街の角で彼女の犬を待つてゐたりなんかすると、彼女等の列は崩れて、或る者は後に残り、前に行つた者が後れた者を手荒に引つ張つて行くと云つた風だつた。そして彼

女等は尻を振り立て、塊り合ひ、人目を牽くようにして、そのはち切れさうな體付で自分達の胴衣を衣擦れの音をさせようとでもするやうに、のして歩いてゐた。街路は彼女等のものだつた。彼女等は店々に沿うて彼女等のスカートをはね上げながら、のさばり歩いた。そして靴下留の紐を結び直さうとしては、腿の處までもまくし上げるのだつた。並樹街の細長い樹々の間の、ゆつくり歩いてゐるそして蒼白い顔をした人波の中を、彼女等の亂れた一隊はかうして、パリエール・ロッシュユールからパリエール・サン・ヅニイまでも、人々を押し除け、群集を互ひ違ひに分けて、振り返つて見たり、きやつ／＼笑ひながら何か喋舌つたりして、走つて行くのだつた。そして彼女等のひらく／＼する裳裾は、彼女等の後ろに、彼女等の若さの無恥を残して行つた。彼女等は眩しい光線の下で、無作法な風をして、だがぼんのくぼを濡らして湯浴みから出て來た處女のやうな好ましい、そしてやさしい姿をして、自由な空氣を吸つて歩いてゐた。

ナナは桃色の着物を日に映えさせながら、一隊の牛耳を執つてゐた。彼女はポオリイヌに腕を與へてゐた、白地へ黄ろい花形を置いた相手の着物は、小さな焰を點綴したやうに、やはり輝いてゐた。で彼女等は二人共此の中で大きく、一番大人らしくそして恥知らずだつたので、一隊を指揮し、人々の凝視や挨拶を受けて得意になつた。他の小娘共は、右に左にあとにくつついて、人目を牽かうとして精一杯體を膨らまして歩いてゐた。ナナとポオリイヌの方は、心の中で、コケットな非常

に複雑な謀計を抱いてゐた。若し彼女等が息切れがする程に走つたとしたなら、それは自分達の白い靴下を見せ、そして自分達の束髪に付けたリボンをはためかせる爲めだつたであらう。それから、彼女等が息が盡きたやうな風をして、喉を反らせたり顫動させたりして、立ち止まつた時には、それによつて屹度彼女等の知り合ひの、街の何處かの男の子が、其處にゐた事を知り得るのだつた。で彼女等は、さうした時にはぐつたり疲れたやうに歩いて、さゝやいたり二人の間で笑ひ合つたりして、伏目勝ちに見張るのだつた。彼女等は車道の雑沓の中で、かうした偶然の^で出會ひをした時にはわけて氣を遣つた。胴衣を着て丸帽子を戴いた、日曜姿の大きな男の子等は、彼女等を一寸溝の縁で引き留めて、彼女等に冗談を云ひかけたり、一寸抓ねつてやらうとしたりした。二十歳位ゐる職工共になると、胸も露はに灰色の職工着を着て、腕を組み合せて彼女等にゆつくり話しかけ、彼女等の鼻の頭へ彼等の短パイプの煙を吹つかけたりするのであつた。さうした事の結果は何でもなかつた、かうした悪童等は彼女等と一緒に歩道へ進んで行つた。然し、數ある男の中から、彼女等は既に選擇を了つてゐた。ポオリイヌは、いつも十七になる指物師の、ゴオドロンのかみさんの一人の息子と出逢つた、彼は彼女に嘗て林檎を買つてやつたりなどした。ナナは並樹路の一方から、他方に立つた洗濯屋のかみさんの息子の、ギクトル・フォオコニエーの姿をちら／＼見ながら、薄暗い隅へ行つては彼と接吻し合ふのだつた。そしてそれもそれ以上には進まなかつた。彼女等は知らずに馬

鹿な真似をするとしては餘りに悪徳を持つてゐた。たゞ、噂の方が喧しかつた。

それから、日が暮れると、この女共の一番の悦びと云ふのは野師の前に立つことであつた。手品師や、大力の男が出て来て、擦り切れた絨緞を並樹路の地上に擴げ始めた。すると、物見高い人が集まつて、人垣が造られる、一方手品師は、その真ん中で、色の褪せた肉襦袢を着て腕の力を試めして見せた。ナナとポオリイヌはひどい人込みの中に、幾時間も突つ立つてゐたのだ。彼女等の洗濯したての綺麗な着物は、オーヴァコート共や汚い職工服共の間でくしゃくしゃにされた。彼女等の裸の腕、裸の首、帽子を冠らない髪の毛は、酒と汗の臭氣の中で、毒するやうな喘ぎの下にほてつて行つた。そして彼女等は厭やがりもせず、嬉々として笑つてゐた、より紅くなつてそして彼女等の自然の藁床の上にもゐるやうにして。彼女等の廻りでは、酔つ拂ひの寝言や、いけぞんさいな口で、粗野な言葉が放たれてゐた。それが彼等社會の口吻なのだ、彼女等はそんな口なら、みんな知つてゐた、そしてみだらな言葉も平氣で、その濡子のやうな皮膚のデリケートな蒼白さを保つて、微笑して振り返つて見るのだつた。

彼女等を弱らせてゐただ一事は彼女等の父親と出逢ふ事だつた、わけて彼等が酔拂つてゐるやうな時に。彼女等は用心して警告し合つた。

——まア、ナナ、忽ちポオリイヌは叫ぶのだつた。彼處にクウポオ親父があるよ。

——全くだよ！ 酔つ拂つちやゐないよ、いえ、ほんとだよ！ ナナはうんざりして云つた。私や、づらかるよ、ね！ 私や彼奴に、私の蚤共を振り落して貰ひたくなんかないんだ……おや！ 頭を擧げたよ！ 糞ッ、くたばつてしましまやいゝのに、のんだくれ！

他の場合に、クウポオが眞つ直ぐに彼女の方へやつて來たやうな時には、彼女は蹲まつてしまつて、咳くのだつた。

——私を隠しておくれよさア、お前さん達みんな……彼奴ア私を捜してるんだよ、彼奴に駈け出した處をつまゝれでもしようもんなら、彼奴は屹度私をゴム毬みたいに蹴上げるにきまつてるんだよ。

それから、酔つ拂つた父親が彼女等を追ひ越してしまつた時などには、彼女は再び身を起した、そしてみんなで失笑して彼の跡をつけて行くのだつた。彼が彼女を見付ける！ 彼が彼女を見付けなさい！ それは本當に隠れん坊だつた。が或る日の事、ボッシュがやつて來てポオリイヌの兩耳を引つ張つて行き、そしてクウポオはナナを後ろから蹴飛ばしながら連れ歸つた。

日がかげつてしまふと、彼女等は散歩の最後のひと廻りをし、灰白くなつた晚霞の中を腰骨の痛くなつて群集を分けながら歸つて行つた。空中の塵は濃くなり、重々しい空を白つぽくしてゐた。グウト・ドル街は、かみさん連が戸口に立つてゐて、どつと囃す聲で、馬車の通らない街のなまぬる

い沈黙を破るのは、田舎の片隅へ行きでもしたやうだつた。彼女等は中庭で暫くとどまつて、羽子板を再び取り上げ、其處を動かさなかつたらしく思はれるやうにと努めるのだつた。で彼女等は彼女等の家へと再び登つて行き、辻褃の合つた話をしてゐた、が、彼等の親達がスープを辛くし過ぎたり、煮えが足りなかつたりして、忙しさの爲に彼女等に頬打を喰らはせてなぞ居られないと見て取ると、その手も餘り度々は用ゐなかつた。

今では、ナナは女工だつた、彼女はケエル街のタイトルルールの處で四十スウを稼いでゐた、彼女は其處で見習奉公をしてゐたのだつた。クウボオ夫婦は、十年來その工場で女工監督をしてゐるルラのかみさんの下にナナを勤めさせて置くことを望んでゐた。毎朝、母親が掛時計を眺め入つてゐる間に、彼女はおとなしうにして、非常に狭く且つ短いその黒い古着物で両肩をしめ付けられて、ひとりきりで出掛けて行つた。と、ルラのかみさんは彼女の到着の時間を注意する役目を帯びてゐた、そしてそれをヂェルエズに報告するのであつた。グウト・ドル街からケエル街へ行くまでに、彼女には二十分を與へられてあつた、それで十分だつた、なぜつてかうした運葉女共は鹿のやうな脚を持つてゐた。彼女は大抵正確に着いた、眞つ赤になつて、息切れをしてゐるのを見れば、道草を食つてから、ペリエエルを十分間でこぼるやうに駆けて來たに違ひなかつた。が、時たま、彼女は七分、八分と遅刻した。で、夕方迄、彼女は哀願するやうな眼をしたり、また彼女の心を動か

し、そして彼女に喋舌らせまいと努力して、伯母に向つておべんちやらかな風を示すのであつた。若い者の心を解してゐるルラのかみさんは、クウボオ夫婦に嘘を云つてゐた、然しナナに向つてはしつきりなしの饒舌で説教をし、彼女の責任の事や巴里の歩道を駈けづり廻る若い娘達の危険に就いて云つて聞かせた。あゝ！ 實際全く！ 彼女自身の二の舞ひを演ずるのだ！ 彼女は絶えず猥らな事のみ考へてゐる輝く眼で自分の姪を覆ひ、この可哀さうな小猫のあどけなさを守り育てゝ行く事を考へてすつかり上氣してゐた。

——いゝかい、伯母は彼女に繰り返して云つた。何んでも私に云はなきやいけないよ。私やお前の爲めには本當に親切なんだよ、お前に不幸が起りでもしやうもんなら、私やセエヌ河へ身を投げて死んでしまふかも知れないよ……分つたかい、私の小猫や、若しか男がお前に言葉をかけたりなんかしたら、みんな、私にいひつけるんだよ、みんな、一と言も忘れないでだよ……え？ まだ何んにも云はれた事はないのかい、お前それが私に誓へるかい？

ナナはさうした時には唇を尖らせて奇妙奇手烈な笑ひ方で笑つた。いえ、いえ、まだ男から話しかけはしなかつた。彼女は餘りに早く歩いてゐた。だから、彼等は彼女に何が云へるであらう？ 自分は彼等と連れ合ふやうな何者をも持つてなかつた。多分！ で彼女は自分の遅刻の事をまだ難つ子らしい風をして辯明した。自分は繪を見ようとして立ち止つてゐたのだとか、さうでなければい

ろんな話を知つてるボオリイヌと連れ立つてゐたもんだからと。で、若し彼女の云ふ事を信じないなら、彼女の跡をつけて見たつていゝ。彼女は決して左側の歩道を放れさへしなかつたのだ。そして彼女は一生懸命すり抜けるやうにしてやつて来た、彼女は馬車のやうに、外の娘つ子達をみんな追ひ越して遣つて来たのだ。或る日ルラのかみさんは、實を云へば、ブテイ・カロオ街で、他の三人の同じ造花女工等と一緒に、一人の男が窓の處で鬚を剃つてゐたので、鼻を空に向けて、笑つてる彼女を見付けて吃驚りさせてやつた。然し彼女は腹を立て、自分は丁度角のパン屋へ一スウのパンを買ひに入らうとしてゐたのだと誓言した。

——おゝ！ 私が監督してるよ、心配おしでないよ、脊の高い後家はクウボオ夫婦に云つた。私や私の事と同じやうにあの子に就いちやお前さん達に責任を負うてゐる。若しか穢ない野郎なんかとあの子を抓ねらうとでもしたら、私や早速飛び込んでつてやるよ。

テイトルギルの仕事場は、真ん中をすうつと占めてゐる脚立の上に置かれた大きな仕事臺のある、中二階になつた大部屋だつた。その尿のやうな灰色をした紙が擦り切れて漆喰を見せてゐる、飾りも何もない壁に沿うて、古いポール紙、包み、塵が厚くたまつたまゝ其處に忘られてある廢物の型などがこんがらがつてる陳列棚がずつと据ゑ付けられてあつた。天井には、瓦斯管が塵で胡粉を塗つたやうになつたまゝでゐた。二つの窓は、女工等が、仕事臺を放れずに、前の歩道を列をなして

通つて行く人々を見られる位に、大きく開け放たれてあつた。

ルラのかみさんは、模範を示す爲め、一番先きに遣つて来た。次いで、入り口の戸は十五分間許りもばた／＼やつてゐた。造花女工の小頭共は、汗をかいて、髪の毛を散らして、一人々々入つて来た。七月の或る朝、ナナは最後に入つて来た、それも此頃では始終ある事だつた。

——全くさ！ 彼女は云つた。私が馬車を持つやうになつたらこんなみじめはしらずに済むだらうに！

で、彼女は私の制帽と呼んでゐる、そして繕ひ直すのも厭やになつた古い型の、彼女の帽子を脱ぎもせず、窓に近寄つて、右に左に屈まつては、街路を見てゐた。

——お前は何を見てるんだいまあ？ ルラのかみさんは彼女に、疑ひ深さうに訊いた。お前の親父がお前について来たとでも云ふのかい？

——いえ、勿論、ナナは平気で答へた。私や何んにも見ちやゐないよ……ひどく暑いから見てるのさ。本當に、こんなに走らせられた日にや誰だつて病氣になつちまふよ。

午前は息詰まる程暑かつた。女工等は鎧戸を下ろして、その間から街の人の動くのを窺つてゐた。そして彼女等は卓子の兩側に並んで、とう／＼仕事にかゝつた、その卓子の高い端にはルラのかみさんだけが着席した。彼女等は八人だつた、銘々が自分の前に自分の糊壺、ピンセット、道具や鏡

臺と云つたやうなものを持つてゐた。仕事臺の上には針金、巻糸、精製綿、青い紙や栗色の紙、絹や縹子や天鵞絨で裁つた葉や花瓣などが亂雑に載つてゐた。その中で、大きな玻璃瓶の口の處へ、一人の女工がニスウの小さな花束を差し込んで置いたのが、前日からその子の胸の邊で萎みかゝつてゐた。

——あゝ！ お前さん達知らないんだね、綺麗な褐色のレオニイが、紅い花瓣に恰好を付けてゐた彼女の鍔臺の上にのしかゝつて云つた。本當にさ！ あの可哀さうなカロリイヌはいつも自分を夕方待つてたあの男の子との仲がうまいかないらしいとさ。
青い紙を細い帯形に裁つて最中のナナは叫び出した、

——全くよ！ あの子を毎日せびつてゐるつて男さ！

仕事場は微かな陽氣に捕はれてしまつた、でルラのかみさんは嚴格さを示さなければならなかつた。彼女は撃め顔をして、呟いた、

——お前は立派な子だよ、ね、お前は結構な言葉を知つてゐる！ 私やそれをお前の親父にお土産にしてやるよ、さうしたら、屹度喜ばれるだらうさ。

ナナは兩頬を膨らましてしまつた、丁度ふき出したくて堪らないのをこらへてどもゐるやうに。全くさ！ 彼女の父親！ 彼はさうした事なら幾らもまだ云つてゐた。けれどレオニイは、突然、

ごく低く、そしてすばしこく耳語いた、

——おい！ 氣をおつけ！ おかみさんだよ！

本當に、萎びたのつぼ女の、テイトルギルのかみさんは入つて來た。彼女は大抵は階下の店にゐた。女工等は彼女を馬鹿に恐れてゐた、なぜつて彼女は決して冗談を云はなかつた。彼女は仕事臺の廻りを徐かに一巡りした。今やみんなはぼんのくぼを見せながら仕事臺の上に前屈みになつて、黙つてそしてせつせと仕事をしてゐた。彼女は一人の女工を木靴と罵つて、彼女に野菊を遣り直させた。それから、彼女は入つて來た時のやうな、ぎこちない態度で、出て行つてしまつた。

——うう！ うう！ みんなの唸り聲の間で、ナナは繰り返してゐた。

——みなさん、ほんとに、みなさん！ 嚴格な態度を取らうとしてルラのかみさんは云つた。お前さん達は私にどうでも處置を取らせようつていふのかね……

だがみんなは彼女の云ふ事なんか傾聴してゐなかつた、殆ど恐れてさへもゐなかつた。彼女はこの女の子等の間にあつて餘りに寛大に、くすぐられるやうな様子をしてゐた、そして彼女等の方は眼に一杯冗談を溜め、其處から彼女等の情人等の事を互に引き出さうとして、仕事臺の端があくと、骨牌占ひをさへするのであつた。彼女はその硬張つた皮膚をして、惚れたはれたの問題になると、その憲兵みたいな胴體は中年女の踊るやうな喜びで震へてゐた。彼女はたゞむき出しの言葉を聞く

と機嫌を損じた。が、よしむき出しの言葉なんか使はなくとも、何んだつて云へるのだつた。

實際！ ナナは仕事場で立派な教育を修了した！ おゝー！ 彼女はさうした性能を持つてゐた、勿論。だが既に貧乏と悪徳とに疲れてゐる娘達の一團との交遊、それが彼女を完成してゐたのだ。其處では或る者が他の者を同化させて行つた、彼女等はお互に腐敗し合ふのであつた。丁度林檎の籃の中に、數個の腐つた林檎が雜つてゐるやうなものだつた。勿論、彼女は他人の前へ出れば自制してゐた、餘りに恥知らずな性格、餘りに厭はしい言葉遣ひを見せる事などは避けてゐた。一言にして云へば、人柄なお嬢さんらしく見せかけてゐた。たゞ、耳からは、蔭へ廻れば、諸の醜汚な事實がどん／＼傳はつた。彼女等は二人一緒になると、不潔な事を云ひ出して、直ぐにお腹の皮を撚らずにはゐられなかつた。それに、彼女等は夕方は連れ立つて歸つた。と打ち明け話も自然交はされた、わく／＼するやうな話は、臍を突き合ふ人波の中で眼を輝かせて、二人のいたづら娘を歩道で立ち止まらせるのだ。そしてなほ、ナナ位の程度にとどまつてる娘共にとつては、仕事場の悪い空氣と云ふものがあつた、それはうろつき女の女工どもが、ふしだらに巻いた彼女等の束髪の中や、怪しく皺くちやになつた彼女等のスカートの中へ入れて持つて來る踊り場の殘香や、はてはみだらな夜々の臭氣などであつた。淫樂の翌日のけつたるい物倦さ、どろんとした眼、この眼の縁の黒いのをルラのかみさんは戀の拳固だと云つてゐた、腰を折つた歩き付き、噎れてしまつた聲、と云つたやうな

ものがばつとしたそして壊れ易い造花の間で、仕事臺の上におくびのやうな吐息を吹き送つてゐた。ナナは嗅ぎ鼻を立て、自分の側に既に狼を見てゐる娘の臭ひを感じると、酔つたやうになつた。長い間彼女は脊の高いリザの側に坐らせられてゐたが、その子はお腹が大きくなつてると云はれてゐた。で彼女は今にもその子が膨らみ切つて忽ちにはち切れるのを待つてゝもゐるやうに、彼女の隣の娘を眼を輝かしては見てゐた。新しい事を覚える、それが難しさうだつた。この小娘はみんな知つてゐた、グウト・ドル街の歩道で何んでも覺えた。仕事場では、たゞ、彼女は仕方を見てゐた、で彼女は今度は自分の番だと云ふ欲望と實行とへ次第々々に押し進められて行つた。

——息が詰まつちまふよ、彼女は鐵戸を下げようとして窓に近寄りながら呟いた。

だが彼女は屈まつて、又更に右左を見廻した。同時に、前の歩道で立ち止まつた、一人の男の樣子を窺つてゐたレオニイが叫び出した。

——彼處で何をしてるんだい、あの爺さん？ あゝして十五分間も此方へ目を付けてるよ。

——何處かの牡猫だ、ルラのかみさんは云つた。ナナ、お前は來て坐らないのかい！ 私やお前に窓のところに立つてちやいけないつて云つといたんだよ。

ナナは自分が巻いてゐた葦の莖を再び取り上げた、が仕事場中の者がその男に心を奪はれてしまつた。それはオーパーコートを着た、五十恰好の、立派な紳士だつた。彼は几帳面に刈つた、胡麻

鹽鬚の手入れをした、頗る眞面目な威嚴のある、蒼白い顔をしてゐた。一時間も、彼は藥草屋の店先に立ち止つて、眼を擧げては仕事場の鎧戸の方を窺つてゐた。造花女工等は小さな笑ひ聲を揚げてゐたが、それは街の騒音の中に消えて行つた。で彼女等は頗る忙しさに仕事の上に屈まりながら、紳士の姿を見失ふまいとして、横眼を使つてゐた。

——おや！ レオニイは注意した。鼻眼鏡を出したよ。おゝ！ ハイカラだわね……オギステイヌを待つてるんだよ、屹度。

然し醜い脊高のブロンドのオギステイヌは、お爺さんは嫌ひさと答へた。で、ルラのかみさんは、頭を振つて、その氣取つた微笑をして、呑み込み顔で呟いた。

——お前さん、そりや違ふよ、ねえ。お爺さんの方がやさしいんだよ。

この時、肥つた小さな、レオニイの隣の子は、彼女の耳の處で何か云つた。とレオニイは、急に氣狂じみた笑ひの發作に捕へられて、體を捻りながら、自分の椅子の上にそつくり返り、紳士の方へ視線を投げて、更に高く笑つた。彼女は吃りながら云つた。

——さうだよ、おゝ！ さうだよ！ ……あゝ！ あのソフィー、何んていやらしい子だらう！

——何んて云つたんだい？ 何んて云つたんだい？ 仕事場中のものが好奇心をそゝられて訊いた。

レオニイは答へずに、彼女の眼の涙を拭いた。彼女は少し静まると、再び鏡を取り上げて、云ひ放つた。

——二度と云へない事なんだよ。

みなは云へと迫つた、彼女は又腹一杯に可笑しくなつてしまつて、頭を振つてことわつた。その時彼女の左隣のオギステイヌが、ほんの低い聲で自分に云へと彼女に哀願した。でレオニイはとろ／＼、口を耳に當て、みんな話してやつた。今度はオギステイヌが體を捻り出して、ひつくり返つた。次いで、彼女自身が次ぎへ傳へ、かくて、叫びごゑとそして息の音が止まりさうな笑ひ聲の間に、耳から耳へと傳へられた。みんながソフィーの不身持を知つてしまつた時に、彼女等は互に顔を見合せ、少し赤くなつて、けれどまごついて、一緒になつて囁し立てた。たゞ、ルラのかみさんだけが知らなかつた。彼女は非常に怒つてしまつた。

——お前さん達のしてる事はほんとに行儀が悪いつてもんだよ、皆さん、彼女は云つた。人前では決して低い聲で話をし合ふもんぢやない……何んて無作法だらう、え？ あゝ！ 見上げたもんだ！

彼女はけれども、それを知りたいと云ふ狂的な慾望があつたにも拘らず、ソフィーの不身持の話を自分に繰り返せとは敢て求めなかつた。けれど、暫くは、鼻頭を下げ、威儀を繕つてから、彼女は

女工等の會話を自ら味ひ樂んだ。彼女等の一人が或る言葉を放つたかも知れない、一番無邪氣な言葉なのだ、例へば自分の仕事に關した事で。と直ぐに外の娘等がそれを悪意に解釋する。彼女等は言葉の意味をもじつて、それに不潔な意義を與へ、次ぎのやうな單純な文句に案外な比喻を加味する、(私の鉢は裂けたよ、)でなければ、(私の小さな壺の中を捜したのは誰だい?)そして彼女等はそれをみんな向うで長く待つてゐる紳士になすつてしまふ、どつち道比喩の持つてゆき處は紳士なのだ。あゝ！彼は耳が痛いに違ひない！彼女等は、それほど悪意に解さうとしてゐる以上、馬鹿な事を云つてしまつたのだ。だがそれだからと云つて彼女等が、亢奮させられ、氣狂じみたやうな眼をして、この戯れが非常に面白くなつて、益々調子付いて來る妨げにはならなかつたのだ。でルラのかみさんは怒る材料がなかつた、誰もむき出しの言葉は何んにも云はなかつた。所が次ぎのやうに云つたので、彼女自身が今度は彼女等みんなをころげ廻らせてしまつた、

——リザさん、私の火が消えてしまつた、お前さんのを私に寄越しとくれ。

——あゝ！ルラのおかみさんの火が消えちやつたんだよ！ 仕事場中が叫んだ。

彼女は説明を始めようとした。

——お前さん達が私位の歳になると、みなさん……

然し誰も彼女の云ふ事を聽いてはゐなかつた、彼女等はルラのかみさんの火を付け直して貰ひに、

紳士を呼ばうと云ひ合つてゐた。

この笑ひさゞめく中で、ナナのはしやぎ方は實際見ものだつた！二重の解釋を持つた言葉などは一と言も彼女からは出なかつた。彼女はそつくり返つて、いゝ氣になつてしまつて、腰をしやくりながら、粗野な言葉を放つた。彼女は魚が水中にゐるが如く悪徳に浸つてゐた。そして椅子の上で笑ひこけながら、彼女は自分の莖の莖をやす／＼と巻いてゐた。おゝ！びつくりするほど上手であつた、シガレットを巻くだけの時間もかゝりはしない。細い帯形をした青い紙を取り上げる手つきつたらなかつた、そしてくるりつ！紙はよられて、眞鍮の針金に巻かれた。それから花を糊付けにする爲めに、上の方へゴムをひと滴らしする、それが濟むと、貴夫人等の胸に飾つてもいゝやうな、生き／＼したそしてデリケートな緑の小枝が出來上つた。その巧みさがすべてこの指の中にあつた、しなやかで柔かい、骨なしのやうな、賣女の細いその指の中に。彼女が稼業に就いて習得し得たところはそれだけだつた。彼女が上手にそれを拵へられるやうになつてからは、仕事場中の莖がみんな彼女に委ねられてあつたのだ。

兎角して、前の歩道の紳士は去つてしまつた。仕事場中が靜まり返り、暑苦しい中で働いてゐた。十二時が鳴つた時、晝食の時間が來たのでみんなざわめき出した。窓の方へせはしなく駈け付けたナナは、希望の者には、自分が走り使ひに行つて來てやらうと彼女等に向つて叫んだ。でレ

オニイは彼女に小蝦を二スウ、オキギステイヌはフライにした馬鈴薯の穀子の目を、リザは大根を一束、ソフィーは腸詰を注文した。で、彼女が降りて行くと、その日、彼女が家へばかり行きたがつてゐたのを可笑しく思つてゐたルラのかみさんは、彼女の長いコンパスに追つついて彼女に云つた。

——まうお待ちよ、私もお前と一緒に行くから、私も何か欲しいんだよ。

所が行つて見ると、彼女は往來に、紳士が蠟燭のやうに突つ立つてゐて、ナナと何か目配ばせし合つてゐる最中なのを認めた！ 彼女は眞つ赤になつてしまつた。彼女の伯母は彼女の腕を取つて揺り、歩道を歩き出させた、と相手の男はそれについて來た。あゝ！ 牡猫はナナの爲めに來たのだ！ 本當に！ 十五歳と半歳で、彼女のスカートにかうして男達を曳いて歩くとは、結構な身持ちだつた！ でルラのかみさんは、激しく、彼女に質した。おゝ！ 神かけて！ ナナは知らなかつた。彼は五日このかた彼女をつけ廻はしただけなのだ、彼女が戶外へその鼻の先でも出しさへすれば、屹度彼に出會ふのだと。彼女は彼を商賣人だと思つた、さうだ、骨卸の製造人なのだ。ルラのかみさんはさう云はれて首を傾げた。彼女は振り返つて、眼の端から紳士を偷み見した。

——金持らしく見えるよ、彼女は呟いた。ね、私の小猫、みんな私に云つておしまひ。ちや、お前何んにももう恐はがる事はないよ。

話しながら、彼女等は豚肉屋へ、八百屋へ、焼肉屋へと、店から店を走り廻つた。で買物は、脂切つた紙に包まれて、彼女等の兩手一杯になつた。が彼女等にはこゝ／＼してしまつて、體をゆすりながら、彼女等の後ろに軽い笑聲と輝かしい横眼とを投げた。ルラのかみさんまでがしなを作つて、自分達に矢張り隨いて來る卸製造人の事を思つて、若い娘のやうにこなしてゐた。

——あの人は大變えらさうだ、彼女は往來へ出ると云ひ放つた。若しあの人が眞面目な考へさへ持つてたなら……

それから、彼女等が階段を登り出すと、彼女は急に想ひ出した様子だつた。

——時に、あの娘共が耳こすりをし合つてた事をさア私に云つておしまひ。お前知つてるのかいソフィーの不身持つて？

でナナは躊躇しなかつた。たゞ、彼女はルラのかみさんの首に捕まつて、彼女を二た階段降りさせた、なぜつて、實際、それは同じ階段にゐて、高聲に話せる事ではなかつた。そして彼女は蚊の鳴くやうに囁いた。と、伯母の満足は非常だつた、彼女は頭を振つて、眼を丸くし、唇を歪めた。要するに、彼女は知つたのだ、でもう彼女の心はかき亂されはしなかつた。

造花女工等は仕事臺を汚さない爲め、自分達の膝の上で食事をした。彼女等は忙しなくかつ込んでゐた、食事する時間さへも惜しかつた、晝食の時間も通りすがる人々を眺めたり、隅々へ行つて

内密話をしたかつたのだ。その日には、みんな午前中の紳士が何處へ姿を隠してしまつたかといふ事を一生懸命知らうとした。ルラのかみさんにナナは唇を結んで、眼で合圖し合つた。そして既に一時十分になつた、女工等は急いで彼女等のピンセットを再び取り上げる様子もなかつた。その時レオニイが、ペンキ工等が呼び合ふ時によくやるブルルウツと唇を震はせて、おかみさんが遣つて來た合圖をした。と忽ち、みんな彼女等の椅子に就いて、仕事の中へ鼻を突つ込んでしまつた。テイトルギルのかみさんは入つて來て、嚴重に巡視した。

この日からと云ふもの、ルラのかみさんは彼女の姪の初めてのラヴ・アフェアを自ら味ひ楽しんでゐた。彼女はもうナナを手放さなかつた、朝に晩に彼女に附添ひ、進んで自分の責任にしてゐた。それは少しはナナを厭やがらせた。だがどつち道、寶物でももあるやうにさうして衛られてると云ふ事は、彼女を誇らしくさせた。かくて彼女等は卸製造人を自分達の後ろに隨へて、二人ぎりで街でしてゐた會話は、彼女を熱しさせ、そして彼女にいつそ飛躍を試みたいと云ふ慾望を與へた。おゝ！ 彼女の伯母はさうした感情を呑み込んでゐた。同様に卸製造人、既に相當の年輩をしてゐてそしてあのやうに人柄なこの紳士も、彼女の心を動かした、なぜと云つて、成熟し切つた男の心に起つた情感と云ふものは、いつもより奥深い根を張つてゐるものだ。たゞ、彼女は監督した。さうだ、彼は彼女の體をいつその事に飛び越してもしなかつた事には、子供の處へは行かれなかつた。或

る夕、彼女は紳士に近寄つて、そして彈丸のやうに固くなつて、彼に彼のしてゐる事はよろしくないと云つた。彼は答へずに、彼女に丁寧に禮をした、親達の酷遇に慣れた、歳取つたいたづらつ子のやうにして。彼女は實際腹を立てるわけに行かなかつた、彼は餘りに親切らしい態度をしてゐた。そしてそれから色戀沙汰に就いての有益な忠告、男の不潔さに就いての比喩、戀に陥つた事を後悔してゐる女のあらゆる種類の話と云ふやうなものを出した、ナナはその蒼白い顔に罪を宿した眼をして、ひとり惱ましげにしてゐた。

けれど、或る日の事、フォオプウル・ポアソニエエル街で、卸製造人は敢て伯母と姪との間に割り込んで、口にすべからざる事を囁いた。で、ルラのかみさんは、怖れをなして、もう自分きりではとても安心してゐられないと繰り返しながら、彼女の兄弟にすつかりぶちまけてしまつた。それで又一と騒動持上つた。クウボオ夫婦の處では、上を下への喧嘩がおこつた。先づ第一に、亞鉛工はナナに滅多打ちを食らはした。何を彼女は習つて來たつてんだ？ この三つ口阿魔は年寄なんかと乳くつてやがる！ 全くよ！ 表で跳ねくり返つてゐる處を見付けられて見やがれ、どんな目に遭ふか覚えてけつかれ、手前の首根つ子を少しばかり手荒に捻ぢ切つちまふから！ 見た事も聞いた事もねえ！ 漢つ垂らし阿魔の癖に家の者の面へ泥を塗りくさるなんて！ そして彼は糞ツ！ 彼女を眞つ直ぐに歩かせて見せる、これからは己が見張りをしてやると云ひながら、彼女を揺すつた。彼

女が歸つて来るや否や、彼は行つて見るのだつた。彼は彼女をまともに見つめ、彼女が眼の上へ鼠を持ち歸りはしないか、音もなく其處へ入り込んでるやうな小さなキスの跡を、と驗べて見た。彼は彼女を嗅いで見、彼女を廻らせて見た。或る晩、彼女は又懲戒を受けた、なぜつて彼は彼女の首根つ子に黒い汚染を見付け出したからだつた。彼女はそれはキスの痕ではないと敢て云つた！ さうだ、彼女はそれを紫斑だと稱した、レオニイが冗談に彼女にしたほんの何んでもない紫斑なのだ。彼はそんな紫斑なら彼女にいくらでも拵らへてやつた事だらう、そして彼女の脚を挫いてしまはなければならぬとしたら、彼は彼女のいたづらを防ぎ止める事が出来たかも知れない。彼が上機嫌であるやうな外の時には、彼は彼女をひやかして、彼女を罵つた。本當によ！ 男の爲めにやいゝ慰みものさ、躰みたいに平らべつたくて、それでゐて胸にや拳固を突つ込んでいゝ位の大きなの鹽容器をのつけてゐやがらア！ 自分が犯しもしない汚行の爲めに叩かれ、彼女の父親の厭ふべき呪咀を浴びて、散々にこき下ろされたナナは、狩り立てられた動物のやうな、陰險な、そして憤怒した服従を示してゐた。

——まア構はないでお置きよ！ チェルエエズはより理性的に繰り返した。お前さんはしまひにはあの子に本當にして見たいつて慾望を與へてしまふよ、いやがるのを無理にそんな事ばかり云つて聞かせてると。

あゝ！ さうだ、實際、さうした慾望が彼女には起り出して來たのだつた！ 云はゞさうした言葉が彼女をして體中をむづ痒ゆがらせた、父親のクウポオが云つたやうに、つまんで見たい、やつて見たいと思つて。彼は彼女にさうした考へを餘りに刺戟した、素直な娘だつて焚き付けられてしまふ位に。同様に、いつもの調子で怒鳴つて、彼は彼女に、好奇心を惹くやうな、彼女がまだ知らなかつた事柄をも覺えさせるのだつた。で、だんく、彼女は馬鹿な眞似をするやうになつた。或る朝、彼は彼女が、顔へ何かぬたくらうとして、紙の中を搔き廻はすところを見て取つた。それが米の粉だつた、彼女は横紙破りの趣味から、それを繻子のやうに美しい彼女の皮膚に壁塗りにしようとしたのであつた。彼は彼女から紙を取り上げてくちやく／＼にし、それで顔を引つ搔き廻はし、彼女を粉屋の餓鬼と罵つた。又一度は、彼女は彼女の制帽、あれ程に恥ぢてゐたあの黒い古帽子を仕立て替へる爲めにといろ／＼な赤いリボンを持ち歸つた。で、彼は彼女に、何處からそのリボンは出て來たんだと怒鳴つた。え？ 萬引きでもして來たのだ！ でなければ縁日へ行つて買つて來たでも云ふのか？ 淫賣女か泥棒女、多分はもう兩方なのだ。數回繰り返して、彼はかうして彼女の手の中のデリケートな品物を改めて見た、それは紅瑪瑙石の指環、小さなレースの附いた一對の袖、娘達が胸の間へかける、(觸つてごらん)と稱ばれる、ハート形をした金鍍金の小金盒の一つだつた。クウポオはみんな粉微塵にしてしまはうとした。が彼女は憤激して自分の大切な品物を

衛つた。それは彼女のものなのだ、それはかみさん連が彼女に呉れたのだ、さうでないものは自分が仕事場で交換したものだ。實際は、ハート形の如きは、彼女がアブウキイル街で拾つたのだ。彼女の父親が彼女のハート形を一撃の下に踏み碎いてしまつた時、彼女は眞つ蒼になつて引き返さうとして、彼に飛びつかせた。二年このかた、彼女は心の激動は、彼女をして何物かを彼から引つたゝた、そして今や平らべつたくされてしまつたのだ！ いや、彼女はこのハート形を持つて見たいと夢みて、それともう／＼おしまひにならなければならなかつたのだ！

けれども、クウポオがナナを少しも假借せず指導しようと思つてゐた仕方には廉直と云ふよりはより多くの意地悪さが雜つてゐた。屢々、彼の方が悪かつた、で彼の諸の不法さは子供を激怒させてゐた。彼女はそれが爲めには仕事場を缺勤し出した。次いで、亞鉛工が彼女を打ちのめして制裁した時には、彼女は彼を嘲つて、もうタイトルルールの處へは行かないからと口答へをした、なぜつて自分をオキステイヌの側へ坐らせるから。で、クウポオは彼女を自分でケエル街へ連れてつて、懲罰に、彼女をオキステイヌの側へいつもへばりつかせておいてくれるようにとおかみさんに頼んで來た。毎朝、半月の間は、彼は御苦勞にもナナを仕事場の入口迄連れて行く爲めに、ベリエル・ボアソニエエルを降つて行つた。そして彼は彼女が入つたかどうかを確める爲めに、五分間鋪道に

居残つてゐるのだつた。だが、或る朝の事、彼が途中で一人の仲間とサン・ヅニイ街の酒場へ入り込んでゐると、彼女が、十分許りたつて、街の下の方へと、ぬかるみの中を尻を振り立てながら急ぎ足に逃げて行く姿を認めた。半月來、彼女は彼にすかを食べせてゐたのだ、彼女はタイトルルールの處へ入る代りに三階へ登つてしまひ、そして彼の行つてしまふのを待ちながら、階段の處に坐り込んでゐたのだつた。クウポオがルラのかみさんをきめ付けようとする、彼女は眞つ蒼になつて自分が説教される必要があるものと彼に叫んだ。彼女は彼女の姪に自分が男に對して云ふべき事は一切云つて聞かせたのだ、若しナナが賣女共の眞似をしたがつたからと云つて、それは彼女の過ちぢやなかつた。今や、彼女はあの子からは手を引いてしまつた、彼女はもう何事にも掛り合ひにならない事を誓つた、彼女は自分の知つてゐる事は知つてゐた、家庭内のいろ／＼な騒動、さうだ、ナナを墮落させたと云つて敢て彼女を罵るやうな奴等は、あの子の眼の前で大つびらにやつて彼女に見せてゐる穢らしい快樂を行つて見て來るが／＼。その上、クウポオはナナが外の一人の女工におびき出される話をおかみさんから聞かされた、あのレオニイの小さな駱駝、彼女は淫樂に耽る爲めに造花は擲けてしまつてゐた。勿論子供は、たゞ街々でボン／＼を食つたり、ミルクホールをのぞき廻るだけで、まだやう／＼オレンヂの花冠を頭へのつけて結婚する位の處だらう。しかし、冗談ごとぢやない！ 若し彼女を少しも疵物にされず、貞淑で無垢で、要するに互に尊敬しあふ事の出來

る娘さん達のやうに完全な體で一人の男に呉れてやらうと云ふのならば、一刻だつて猶豫してゐられる段ぢやないと。

六三〇

グウト・ドル街の貸家では、みんなナナの爺さんの事を、社會に知られてゐる紳士でももあるやうに話した。おゝ！ 彼は非常に禮儀正しく、少し臆病にさへしてゐる、だが素直な犬のやうな恰好で、十歩ばかり置いて彼女のあとを随つてゐる處は、恐ろしく熱心で我慢強いもんだ。たび／＼又、彼は中庭迄も入つて來た。ゴオドロンのかみさんは或る夕方三階の階段の處で彼に出逢つた、と彼は鼻頭を垂れ、顔をほてらして怖氣づいて、欄干に沿うて逃げてつてしまつた。それからロリュウ夫婦は、若しも彼等の姪がなほも彼女のうしろに男なんか曳きすつて來るやうだつたら、引つ越してしまふと云つて、おどかした。もしもそんな事を認諾しておいたら堪らなくなつてしまふ、階段はさうした奴等で一杯になり、一と足毎に嗅ぎ廻つたり待ち伏せしてゐたりするやうな奴等に逢はずには、もう降りても行かれなくなつてしまふのだと。本當に、貸家のこの一隅には、氣狂の動物がゐるやうな思ひがすると。ボッシュ夫婦はこの可哀さうな紳士、小つぽけなうろつき女にうつゝを抜かしてると云ふ、そのやうに尊敬に値する一人の男の運命に同情を寄せてゐた。何んのかんの云つたつて！ 實業家なのだ、彼等はプウルブル・ド・ラ・ギレットの彼の卸製造工場を見てゐた、彼が若し貞淑な娘にはまつて行つてゐたのだつたら、身分のある夫人にだつてする事が出來たらうにと。門

番夫婦がした空鑿立てのお蔭で、近所中の者が、ロリュウ夫婦すらが、彼がナナの後にくつ付いて、几帳面に刈り込んだ胡麻鬚の手入れをして、蒼白いその顔の中に唇を垂らしてやつて來ると、この歳取つた男に對して最上の敬意を示すのであつた。

初めの月の間は、ナナは彼女の爺さんが馬鹿に面白かつた。始終彼女の廻りに付き纏つてゐる彼の様子つたら、見ものだつた。本當に世話焼き爺さんのやうだつた、人混みの中で、後ろから彼女のスカートに觸つて見る、それでそんな事をしてゐるつて風は一寸もしない。で彼の脚はと云へば！

炭屋の薪さつぼうだつた、本物のマッチの棒だ！ 石ころ頭にはもう苔が生えてゐなかつた、四本の髪の毛は首の處に平らべつたく縮れてゐた。彼女はいつも、彼をかんとすべのやうにしてしまふ床屋のところを彼に訊いて見たくて仕様がな位だつた。あゝ！ 何んて舊弊爺だらう！ 間違ひのない道化役者だ！

で、絶えずさうした彼を見てゐるうちに、彼は彼女にもうそれ程面白可笑しいものではなくなつて來た。彼女は彼にひそかに怖れを懷き出した、彼女は若しも彼がすり寄つて來たなら、叫び聲を放つたかも知れなかつた。よく彼女が寶石商の前に立ち止まると、背中で彼が何かも／＼云つてゐるのが忽ち聞えて來た。そして彼の云つてゐる處は本當だつた。彼女は頸へかける天鵝絨の付いた十字架が欲しかつたかも知れない、或は又珊瑚珠の小さな耳環が、それは血の滴りかと思はれるく

らゐ、實に小さい耳環が。それに、寶石類を持つて見たいとも思はずに、彼女は襪襦布片を曳きすつてゐることは實際出来なかつた。彼女はケエル街の仕事場の屑の中に漬つてゐる事には飽き／＼した。彼女は自分の制帽には猶更愛相が盡きてゐた。その舊式の帽子の上へティトルールの處でちよろまかした造花を付けると貧乏人の尻へ鈴を結び付けでもしたやうに、ちぐはぐで見られた圖ではなかつた。で、泥の中をとぼ／＼歩きながら、馬車に泥水をはねかけられ、陳列棚のきら／＼しさに眼がくらんで、彼女は飢餓に胃の腑をひねり上げられるやうな様々な美望を燃やしてゐた。いい着物を着て見たい、方々のレストオランで食事がしたい、觀せものを見に歩きたい、美しい家具のある自分の部屋が持つて見たいと。彼女は慾望で眞つ蒼になつて立ちどまつてしまつた。巴里の舗道からは自分の腿の肉に沿うて熱が這ひ入つて行つてゐるやうな氣がした、その雑沓の中にあつて、自分が壓倒されてゐる所の諸の享樂に嘯りつきたいと云ふ兇猛な食慾だ。そして、それも決して不足はしなかつた、丁度さうした時には、彼女の爺さんが、彼女の耳にいろ／＼な申出を流し込むのであつた。あゝ！ 彼女が若しも彼に恐れをなしてゐなかつた事なら、彼女の拒絶のうちに彼女を硬張らせる内心の叛逆がなかつたならば、どんなにか彼女は彼と手を執り合つたであらう、あらゆる彼女の放埒にも拘らず、男の持つてゐる未だ知らざるものが彼女を怒らせ、そしていやがらせてゐた。

だが、冬が來た時には、クウボオ夫婦の生活は不可能になつた。毎晩、ナナは折檻された。父親が、彼女を打つに疲れた時には、母親がどう振舞つたらいゝかを、彼女によく教へる爲めに、打擲した。そしてそれがよくみんなの立ち廻りになつた。一方がなぐり出すと、他方が彼女を庇ふ、で三人ながらとう／＼、碎かれた皿の中で、石疊の上をころげ廻る。かうしてゐて、碌すつぽ仕事もせず、寒さに凍えてゐた。若しか彼女が何か綺麗なもの、リボンの結んだのとか、カフス釦のやうなものを自分で買つたりなにかすると、親達はそれを彼女から横奪して、飲んでしまふのだつた。彼女は襪襦敷布の中へもぐり込む前に、殴打を見舞はれる外は、自分のものとは何んにもなかつた、そこで彼女は一切の寢具として延べた彼女の黒い小さな短裳の下で慄へてゐるのであつた。いや、こんなあきれ返つた生活がつゞく譯がなかつた、彼女はこんな處に生命を托してゐようとは少しも思つてゐなかつた。彼女の父親は、長い前から、もう父とは考へられなかつた、彼女の父親が酔つ拂つたやうに一人の父が酔つ拂つたならば、それは父ではないのだ、誰しもその羈絆を脱しようとするやうなそれは一疋の穢はしい動物だと思つた。そして、今では、彼女の母親の方が悪化して行つた。彼女は飲んだ、彼女も亦。彼女は喜んで、コロンプ爺さんの處へ彼女の夫を捜しにと入つて行つた、自分におごらせる爲めにだ。で彼女は非常に居心地よさうに卓子につき、初めての時のやうに嫌厭の様子は示さずに、コップは端からぐい飲みをし、幾時間も眩を突いて、頭から

眼を飛び出させたやうな恰好をして出て来た。ナナが、アソンモアルの前を通つて、彼女の母親が奥の方で、酒杯の中へ鼻を突つ込み、男達の我鳴り立てゝゐる眞ん中で酔ひつぶれてゐる姿を見た時には、彼女は怒氣に襲はれて蒼くなつてしまつた、なぜつて別の美味へと口を突つ込んでゐた若さは、酒の味はまだ分らなかつた。さうした宵々には、彼女はいゝ畫面を見せ付けられてゐた、酔つ拂ひの父親、酔つ拂ひの母親、あきれ返つた宿だつた、其處にはパンはなくて人間は酒を食らひ酔つてるのだ。畢竟、一人の聖女と雖も、その中にはとゞまれない事だらう。更に悪いのは！

若し彼女がかうした或る日に逃亡したとしても、彼女の親共は「罪は余にあり」を云つて自分達が彼女を追ひ出したんだと済まし込んでゐるかも知れない事だつた。

或る土曜日に、ナナは歸つて来て見ると、彼女の父親と母親は淺ましい有様でゐた。クウポオは、ベッドに横倒しになつて、鼻をかいてゐた。ヂェルゼエズの方は、椅子に蹲まつて、空に見開いたぼんやりした、そして不安な眼をして頭を廻してゐた。彼女はシチウの残り物の食事を温めるのも忘れてしまつてゐた。彼女が心を切らない蠟燭は、この小屋の恥づかしいみじめさを照してゐた。

——お前かい、青蟲？　ヂェルゼエズは吃つて云つた。ほんとに！　お前の父つあんはお前を拾ひに行かうとしてたんだよ！

ナナは答へなかつた、冷たい燧爐を、皿のない食卓を、この酔ひどれ夫婦が、彼等の飲み過ぎに行かうとしてたんだよ！

由來する混沌たる意識の蒼白い恐怖を横へてゐる陰暗な部屋を蒼白になつて見入つてゐた。彼女は敢て自分の帽子を脱がうともせず、部屋を一巡りした。次いで、齒を喰ひしばつて、彼女は再び戸を開けて、出て行つた。

——お前又降りるのかい？　彼女の母親は、振り返つて見る力もなく、訊いた。

——えゝ、私や忘れ物をしたの。又登つて来るから……お寝み。

そして彼女は歸らなかつた。その翌日、クウポオ夫婦は、酔ひが醒めて、互にナナの逃亡を罵り合ひながら、なぐり合ひをはじめた。あゝ！　あの子は餘つ程遠くへ行つてる、まだ走つてるものとしたら！　子供に雀の話をして聞かせるやうに、親達は彼女の跡へ鹽を一つまみ撒いたらいいだらう、さうしたら彼等は彼女を多分は再び網わなにかけ得られたかもしれない。それは更にヂェルゼエズに取つて大なる打撃でもあつた。なぜなれば彼女は、自分がだらしなくなつてゐたに拘らず、彼女の子供の自墮落は、今や一人になつて、もう敬虔な念を懐かせられる子供もなく、落ちて行かれるところまで身を持ち崩し、益々彼女をどん底へと沈ませて行くものであることをしみる／＼感じさせた。さうだ、この無情の駱陀阿魔は彼女から、その穢れた短裳の中へ入れて彼女の廉恥の最後の一片を攫つて行つてしまつたのだ。で彼女は怒つて、拳固を堅めて、自分の賣女娘に對して厭ふ可き言葉を放ちつゞけて、三日間飲みつゞけた。クウポオの方は、場末の並樹街を一通りうろついて

通りすがる私娼をみんな鼻の下から見てナナを見出さうとした後、バティスト(流儀)のやうに平安に彼のパイプへと再び火を點けた。たゞ、彼は食卓に就いた時、ちよい／＼起ち上つては、ナイフを握つて、腕を空中に延ばし、顔へ泥を塗られたと云つて叫んだ。そして彼は自分のスープを飲み終らうとして再び坐り込んだ。

貸家では、毎月數人の娘共が開け放たれた籠から出て行くカナリヤのやうに逃げ出して行つた、でクウボオ夫婦の處の出來事は何人をも驚かさなかつた。然しロリュウ夫婦は勝ち誇つてゐた。ああ！子供がクウボオ等に胡椒を吞ませるだらうつて事は豫言してゐたのだつた！それが相當だ、造花女工はみんな悪くなつてしまふんだと。ボッシュ夫婦もポアンン夫婦も等しく冷笑し、自分達はさも道に叶つたことのみをしてゐるやうに、口から出まかせのお談義を吐き散らしてゐた。たゞ、ランティエーは私かにナナを庇つた。神かけて！勿論、彼はその清教徒的な態度で言明した。かうして乗り出して行く娘はたしかに法律には觸れる。それから彼は双眼の角に火を見せて、かう附け足した。糞を喰らへ！あの餓鬼はあの年齢であんなみじめな眞似をするには餘り美しすぎるんだ。

——お前さん達知らないのかね？或る日ロリュウのかみさんは、みんなでコーヒーをのんでゐるボッシュ夫婦の門番部屋で叫んだ。全くさ！私達を照してゐるお天道様のやうに本當の事だよ、自分の娘を賣つたのはバンバンだ……さうさ、あの女が賣つたんだよ、私や證據を持つてゐる……あの

朝晩梯子段でみんなが行き逢つてゐた爺さん、あの男がもう前金を拂つたんだ。魂消た話さ。さうして、昨日しかも！彼奴達がアンピギエと一緒になつてるところを見た者があるんだよ、いたづら阿魔と彼奴の牡猫がさ……私や名譽にかけて云ふ！彼奴達や一緒なんだよ、ね、いゝかね！

彼等はそれを論議しながら、コーヒーを終つた。畢竟、そりやありさうな事だつた。もつとひどい事だつて起り得るのだ。で、近所では、尤も人柄な人達ですら、しまひにはヂェルエエズは自分の娘を賣つたと繰り返すやうになつた。

ヂェルエエズは、今では世間の口なんか相手にせず、破れ靴を曳きすつて歩いてゐた。往來で、彼女を泥棒女と呼んでゐる者があつたとしても、彼女は振り返りもしなかつたであらう。一箇月來、彼女はもうフォオコニエーのかみさんの處では働いてゐなかつた、かみさんは喧嘩を避ける爲めに、彼女の雇を解かなければならなかつたのだつた。僅か數週間に、彼女は八軒の女洗濯屋に雇はれた。彼女は各仕事場で二三日は仕事をした、次いで逐ひ出された、それ程彼女は不注意に、不清潔に、自分の稼業も忘れてしまふ迄に理性を失つて、仕事をぞんざいにしてゐた。とう／＼、無能を自覺して、彼女はアイロンの方は捨て、しまひ、ヌウヅ街の洗濯場で、その日稼ぎの洗濯をするやうになつた。泥水の中をこねくり、洗濯物の垢を叩き、荒つばい、そしてやさしい稼業へと再び落ちて行き、それが更に進んで行き、遂には彼女を彼女の淪落の阪へと逆落カクオトしにして行つたので

あつた。云はゞ、洗濯場は彼女を美しくしてはゐなかつた。彼女がその中から、濡れて、彼女の海老色になつた肉を見せながら出て来る處は、本當に泥塗れになつた猫だつた。かくて、彼女はその空つぽな米櫃の前での轉手古舞ひにも拘らず、相變らず肥りつゞけ、そして彼女の片足は、人を突き飛ばさずには、何人の側ももう通れなくなつてしまつたくらゐに、ひどく歪んでしまひ、それ程に彼女は跛を曳いてた。

自然、この點で色香が失せてしまつたものなら、女としての一切の誇りは去つてしまつたのだ。ヂェルエズはその昔の自負心も、そのコケ、トリイも、その美しい感情の欲望も、禮儀も作法も、足下に踏みしだいてしまつた。彼女を靴で至る處、前からも後ろからも蹴飛ばしたところ、彼女はまだそれを感ぜなかつたかも知れない、彼女は餘りに無氣力に、そして餘りに懦弱になつてしまつてゐた。で、ランティエーは彼女を完全に捨てゝしまつた。彼は彼女を形式にももう抓めりさへしなかつた。が彼女の方は、徐々に引きずられて行き、そしてお互に飽き果てゝゐるうちに解けてしまつた或る長い關係のこの終末を氣付きもしなかつたらしかつた。それも彼女に取つては、賦役を減らされただけの事だつた。かくてランティエーとギルチニイの間柄も、全然彼女の平靜を破らないやうになつてゐた。彼女は昔は非常に腹を立てたさうした馬鹿げた事柄に對しては一切、極度に冷淡になつてしまつた。彼女は彼等の爲めに、若し彼等がして欲しかつたと云ふなら、蠟燭を持つて

てやりもしたことだらう。何人も今では無視出来なくなつてゐたのは、帽子屋と女香料食品屋が大あつ／＼でゐることであつた。それと云ふのが彼等に取つては餘りに好都合な條件が備つてゐたからだ、あのポアソンの病ひ馬は二日ぶつ通しに夜の勤務だつた、その爲め彼は人通りのなくなつた舗道々々に震へてゐるのだつた、その間自分の女房と隣の男は、家で、濇い足を交へてゐられたのだ。おゝ！ 彼等は急ぐ事はなかつた、彼等は店の前から、暗い、そして人のゐない街路へと徐かに消えて行く、彼の靴音を聞いてゐた、それも彼等の鼻先をクウ、エル、チウルの外へなんか敢て出しても見ずにだつた。巡查つてもものは自分の義務より外は知らなくつてもいゝのだ、さうぢやないか？ で彼等はこの嚴肅なる男が他人の財産を衛つてゐる間中、靜かに彼の財産を彼の爲めに晝になる迄も毀損してゐるのだつた。グウト・ドル街では近所中の者がこの恰好な茶番狂言をいゝ笑ひ草にしてゐた。彼等は官憲が欺瞞されてゐるのを面白可笑しく囃してゐた。それどころか、ランティエーはこの一隅を征服してしまつてゐたのだつた。近所中のかみさんはみんな參つてゐた。彼は女洗濯屋を食ひつぶした。今や、彼は女香料食品屋を嚙り出してゐるのだ。そして若しも彼が女小間物屋へ、女紙屋へ、女洋服屋へとつゞけさまに住み込んで行つたとした處で、彼はそれをみんな呑み込んでしまふに足るだけの十分大きな顎骨を持つてゐる男なのだつた。

いや、曾てこのやうにして砂糖の中をころげ廻つた男は何人も見られなかつた。ランティエーが

半ルチニイに勧めて糖菓の商ひをさせたとは旨くしてやつたもんだつた。彼は生々ぬきのプロヴ、ンス洲の男であつたので甘いものを賞美せずにはゐられなかつたのだ。云つて見れば彼はボン／＼ポール、糖杏やチョコレートと云つたやうなもので生きてゐた。彼が(砂糖漬けの巴旦杏)と呼んでゐた糖杏が、わけて彼に唇へ小さな泡を溜めさせた位、彼の嗜好に快美を與へてゐた。一年來、彼はもうボン／＼類ではかり生きてゐた。彼は抽斗を端から開けては、半ルチニイが彼に店番をしてくれるようにと懇願してゐるのを幸ひ、ひとりきりで詰め込んでゐた。よく話をしながら、五六人の前で、彼はスタンドの玻璃碟の蓋を取つて、手を突つ込み、何かを掴み出すのだつた。と玻璃碟は開け放たれたまゝ空らになつてしまつた。誰もそれにはもう注意を拂はなくなつてゐた、一種の氣狂だ、彼はさう云つた。それから、彼は永久の風邪を案出した、喉がいら／＼して仕様がな、それを直すのだと彼は稱してゐた。彼は相變らず働かなかつた、更に／＼重大ないろ／＼の事業を計畫してゐた。時に彼は素敵な發明に工風を凝らした、帽子傘、それは帽子で、夕立が降り出すと、頭の上で雨傘に變つてしまふんだつた。そして彼はポアソンに利益の半分を與へる約束をし、彼から實驗の爲めにと、二十フランの金を借りさへするのだつた。待つてゐる間に、店は彼の舌の上で溶けて行つた。あらゆる商品は其處を通過した、チョコレートの葉巻から、キャラメルのパイプに至る迄も。彼は甘いもので腹が裂けさうになつて、そして、機嫌がよくなると、隅へ行つて、主婦

の上へ最後の口なめづりを振舞つてやつた、彼女は彼が砂糖だらけで、兩唇が砂糖焼巴旦杏のやうになつてしまつてゐるのを見出した。抱擁するには絶好の男だ！ 當然、彼はすつかり蜜のやうになつてゐた。ポッシュ夫婦は、彼はそれを本當にシロップのやうにする爲めには、彼のコーヒーの中へ自分の指を浸しただけで十分だと云つてゐた。

ランティエーは、この不斷の甘いデザートで心がやさしくなつて、ヂェルエズに對しては父のやうに振舞つた。彼は彼女にいろ／＼意見をし、彼女がもう労働を喜ばないのを怒鳴つた。何んて悪魔だ！ 彼女位の年齢になつたら、自分の廻りを振り返つて見る事を知らなきやならない！ さう云つて彼は常に貪り食うてゐる彼女を罵つた。然し、彼等が殆どそれに値しない時ですらさうした人々には手を假してやらなければならぬ如く、彼は彼女にちよい／＼した仕事を見付けてやらうと努めた。では半ルチニイにヂェルエズを呼んで毎週一度店と部屋々々を掃除させる事に決めさせた。それなら彼女も知つてゐた、加里を使ふ事なら。で、その都度、彼女は三十スウを稼いだ。ヂェルエズは土曜日の朝には、桶とブラッシを持つて、稼ぎに來、そして卑しい仕事をする爲めに元の古巢へ來るのを苦痛としてゐる様子もなく遣つて來るのだつた、彼女がプロンドの美しいかみさんとして支配してゐたこの宿で、雑役女の仕事をする爲めにだ。それは最後の屈從であり、彼女の誇りの終焉であつた。

或る土曜日の事、彼女はひどい日に逢つた。三日も雨が降つたので、お客達の足は店へ街中の泥濘を運び込みでもしたやうだつた。ギルヂニイはカウンターの處に坐つて、やさしいカラーやレースのある袖を付けて、髪も綺麗に、おかみさん振りを發揮してゐた。彼女の側には、赤い塗漆布の掛かつた狭い腰掛にかけて、ランティエーが、この店の本當の主人公でもあるやうに、収まつて感張つてゐた。そして彼はいつものやうに、砂糖をかじる爲めにと、薄荷の入つたボン／＼の玻璃碟の中へぞんざいに手を延ばしてゐた。

——もし／＼、クウボオのおかみさん！ 洗濯婦の仕事を見てゐたギルヂニイは、唇を尖らして叫んだ。お前さんは泥を残しとくよ、それ、その隅へ。まアもちつとよく擦すつておくれでないか！

ヂェルゼエズは従つた。彼女は隅へ戻つて行つて、又洗ひ出した。汚い水の中で、彼女は地べたへ膝を突いて、寒さのために紫色になつて、剛張つた腕をし、肩を突つ張つて、體を二重に折り曲げてゐた。濡れそぼつた彼女の古い短裳は腿の處へへばり付いてゐた。彼女は髪を振り亂し、袖付短衣の穴々からは彼女の體の肥り肉を見せながら。何かもう綺麗でないものゝ塊りでももあるやうに床の上へ蹲まり込み、だれた肉のはち切れさうなのが、荒つばい動作のたび毎に、動いたり、ころがつたり、又飛び上つたりしてゐた。そして彼女は、顔はぐつしより濕めつて、大粒な滴りがぼたぼた落ちる位、ひどい汗をかいてゐた。

——人間は手足を汚せばよごす程、餘計光を放つもんだ、ロ一杯ボン／＼を詰め込んでゐるランティエーは、嚴かに云つた。

ギルヂニイは、王妃のやうな態度でそり返り、兩眼を半開にして、相變らずヂェルゼエズの洗つてゐるのを監視し、時々注意をした。

——まアもう少し右の方を。今度は、板張りを氣を付けて頂戴よ……ねえ、私やほんとに氣に入らなかつたんだよ、この前の土曜には、汚點が残つてたんだもの。

そして帽子屋に女香料食品屋は、二人して、玉座にでも着いてゐるやうに、益々増長してゐた。一方ヂェルゼエズは黒い泥の中で、彼等の足許に平伏してゐるのだつた。ギルヂニイはそれを享樂してゐるに違ひなかつた、彼女の猫のやうな眼は、瞬間黄ろい火花を散らして輝き、そして彼女は薄笑ひをしてランティエーの顔を見た。彼女が常に意識を去らなかつた、あの洗濯場で、昔髻を叩かれた復讐を今果したと云ふものだ！

兎角して、ヂェルゼエズが掃除を終つた時、奥の部屋から軽い鋸の音が聞えて來た。開け放たれた戸口からは、この日非番だつたポアソンの横顔が、中庭の薄暗い日を受けて浮き出して見えた、彼は其處で休暇を利用して、好きな小箱の製造にうき身をやつしてゐるのだつた。彼は卓子の前に坐り込んで、非常に丹念に、葉卷の箱の桃花心木に亞刺比亞模様を刻んでゐた。

——ねえ、バダンキューー！ 心安立てから、この綽名を彼に又付け出したランティエーは叫んだ。己は君の箱をしまつとくよ、或るお嬢さんに贈り物にするんだから。

ギルヂニイは彼を抓めつた、が帽子屋は色男振つて微笑を續けながら、カウンターの下で、彼女の膝の邊をくすぐりながら彼女に報いてゐた。そして彼は夫が、遅ましげな彼女な顔の中で逆立つて、そのアンペリアル髯と赤い八字髭を見せながら、頭を上げた時には、如何にも自然に彼の手を引つ込めてしまつた。

——丁度、巡査は云つた。己は君の註文通りの仕事をしてたんだ、オオギュスト。こりや友情の記念品なんだ。

——あゝ！ 其奴ア素敵だ、ちや己は君の小さな機械を取つとかうよ！ ランティエーは笑ひながら又云つた。ねえ、ちや、リボンで頸へかけとく事にしようよ。

と、急に、この思ひ付きで相手の注意を喚び起したかのやうに、

——さうだつた！ 彼は叫び出した。己はナナに逢つたよ、昨日の晩。

忽ち、この消息はヂェルゴエズを店一杯になつてゐる汚ない水溜りの中へ坐り込ませてしまふ程彼女を感動させた。彼女はブラッシを手にして、汗を流して、息を切らしたまゝであつた。

——あゝ！ 彼女はさう呟いただけだつた。

——さうだ、己がマルテイル街を降つて來ると、己の前を、爺さんの腕にもたれかゝつて行く女の子が眼に入つたんだ、さうして己は獨り言を云つた。見たことのある面だな……で、己は足を早めて、あのあきれたナナの阿魔と鼻と鼻を突き合せてしまつた……處で、心配したがるものはないもんなさ、あの子は大變幸福さうである、毛織物の綺麗な着物を引つ掛け、頸には金の十字架をぶらさげて、まるで喜劇役者見たやうなりをしてた！

——あゝ！ デェルゴエズは更に、曖昧な聲で繰り返した。

ボン／＼を片付けてしまつてゐたランティエーは、外の玻璃礫の大麥の糖菓を取つた。

——擦れつからしだよ、あの子は！ 彼はつゞけた。まアどうだいあの子は、しやア／＼して、己に隨いて來るやうに合圖をしたんだ。それから、あの子は自分の爺さんを、何處かのカフェーへ置いて來た……おゝ！ あきれた野郎だ、よぼ／＼爺だよ、爺さんは……さうしてあの子は歸つて來て或る門のところで己と一緒になつた。本當に蛇だ！ 綺麗な、さうしてしなを作つて、さうして人を小猫のやうに丸め込んでしまふ！ さうだよ、あの子は己を接吻して、みんなの消息を聞かうとした……だが、どつちにしても、あの子と逢つたのは本當に満足だつた。

——あゝ！ デェルゴエズは三度云つた。

彼女は縮まり込んで、次の言葉を待つてゐた。自分の娘はでは自分に言傳てはしなかつたのか？

沈黙に歸つた中で、みんなは再びポアソンの鋸の音を聞いてゐた。ランティエーは、陽氣になつて、唇を鳴らしながら、急いで彼の大麥の糖菓をしやぶつてゐた。

——ほんとに！ 私だつたら、私があの子を見たんだつたら、私や街の外ほかの側を通り過ぎるよ、帽子屋を又きつく抓めつたギルヂニイは再び云つた。さうさ、そんな女の子の一人に大勢の中で挨拶されたりなんかしたら、私や顔を赧くしてしまふだらうよ……そりやお前さんが其處にあるから云ふつて譯ぢやないんだよ、クウポオのおかみさん、けどお前さんの娘は餘つ程不貞腐れなもんだ。ポアソンは毎日それよりかました子だつて捕まへて歩いてるんだよ。

ヂェルエズは何んにも云はなかつた、眼はちつと空を見つめて、身じろぎもしなかつた。彼女はとう／＼、自分の心の中に懐いてゐた考へにうなづきでもするやうに、徐ろに頭を振つてゐた、と帽子屋は、おいしさうな顔付をして、呟いた、

——さうした不貞腐れは、得てみんなが手を出しては腹こはしをしたがるものさ。そりや雛つ子見たやうに柔かい……

が、女香料食品屋は、彼が途中で止めて彼女をやさしく和なだめなければならなかつた位、恐ろしい形相をして彼を見つめてゐた。彼は巡查の方を窺つて、彼が彼の小さな箱の上へ鼻をくつつ付けてゐるのを見て取つて、急いでギルヂニイの口の中へ大麥の糖菓を詰め込んだ。と、女香料食品屋はに

こ／＼笑ひ出した。そして、彼女は自分の怒りを洗濯婦へと向けた。

——お前さん少し精をお出しよ、え？ それぢや一寸も仕事が進みやしない、境石みたいにちつとしてたんぢや……さア、又お動き、私や晩迄水の中にうぢくちしてゐたかないよ。

そして彼女は意地悪るさうに、より低い聲で附け足した、

——娘が自墮落な真似をしてるからつて私の咎とがでももある事かい！

勿論、ヂェルエズは聞き付けなかつた。彼女は再び、脊骨を曲げ、蛙のやうに這ひつくばつて足を曳きずりながら、床を擦すり出した。ブラッシの木の處を掴んだ両手をかじかませて、彼女は自分の前の方へと濁つた潮うしほを押して行つた、とその飛ばちりは彼女に泥をはね付けて、彼女の髪の中迄も濡らしてしまつた。汚れを溝へ掃き込んでしまへば、あとはもう濯ぐだけだつた。

兎角して、一寸の沈黙の後、退屈してしまつてゐたランティエーは聲を揚げた。

——おい、パダンギ、彼は叫んだ。己はリヴォリイ街で、昨日君の親方に逢つたよ。彼奴ア恐ろしく萎びてやがつた、體の中にや六箇月の壽命しきや持つてないね……あゝ！ 糞！ 生きてる間に何んでもしとけ！

彼は皇帝の事を三つたのだ。巡查は眼を上げずに、不愛相な調子で答へた、

——若し君が政府にゐたなら、君もそれ程肥えちやゐなかつたらうよ。

——おー！ 大將、若し己が政府にゐたなら、帽子屋は急に沈重な態度を裝つて又云つた。物事が今少し旨く行くだらうよ、そりや君に誓つてもいゝ……だから、彼等の外政と來たら、全く！ 此頃ちや、なつちやゐない。己なら、君に話してゐるこの己なら、若し己が、其奴に己の理想を吹つ込む爲めに、一人新聞記者を知つてゐさへしたなら……

彼は興奮してゐた、そして彼は彼の大麥の糖菓を嚙つてしまふと、一つの抽斗を開けて、その中から菱形の小菓子をとり出して頬張りながら身振りを交へて話し出した。

——そりや至極簡單さ……何よりも先づ、己は波蘭を再建する、さうしてスカンヂナヴィア大帝國を建設して、北方の巨人に備へるんだ……次いで、己は獨逸諸小王國全體の共和國を造る……英吉利に至つては、ありや殆んど恐るゝに足らん。若し彼が動けば、己は印度へ十萬の兵を送る……そして己は土耳其皇帝はメッカへ、法王はゼルサレムへ、追つ拂つてしまふ……え？ そしたら歐羅巴は直ぐに綺麗になつちまふだらう。おい！ バダンギ、一寸見給へ……

彼は菱形の小菓子を五つ六つ掴む爲めに一寸口を喋んだ。

——どんなもんだ！ そんな事アかうしてくん嚙んでしまふよりか譯のない事つたよ。そして彼は、開いた口の中へ、一つ／＼菓子を放り込んだ。

——皇帝は別な案を持つてる、二分間たつぷり考へた末、巡查は云つた。

——置いてくれ！ 帽子屋は激しく折返し云つた。彼の案なんか、分りきつてる！ 歐羅巴は己達を輕蔑してゐる……毎日々々、テユイルリイの召使共は酔ひしれた君達の親方を卓子の下の、上流社會の肥桶女こんたこの間から掴まみ出してる。

然しポアソンは起ち上つてしまつた。彼は前へ進んで胸に手を置いて、云つた、

——君は己の感情を傷けた、オオギュスト。人身攻撃をせずに議論し給へ。

ギルヂニイはその時、彼等に喧嘩をしないようにと頼んで、仲裁した。彼女は歐羅巴なんかどうでもよかつた。その外のもは一切を分擔してゐる二人の男共が、どうして政治上の事で絶えずかうも喧嘩をし合ふんだ？ 彼等は暫くは譯の分らぬ事を愚圖々々云つてゐた。それから、巡查は、自分が怨みを懷いてゐない事を示す爲め、丁度仕上げてゐた彼の小箱の蓋を持つて來た。その上には、象眼にした「オオギュストへ、友情の記念に」の文字が讀まれた。ランティエーは、いゝ氣持になつて反り返り、ギルヂニイの上に重なつてしまふかと思はれる程に體を伸ばした。と亭主は古壁のやうな色をした顔に、何んにも云はないまごついたやうな眼をして、この有様を眺めてゐた。然し彼の髭の赤い毛は、帽子屋以外の人がそれを見て不安を感じさせずには置かないやうな可笑しな風に、折々ひとりでに戦いでゐた。

ランティエーといふ動物はかみさん連に氣に入られようとするかうした厚かましさがあつた。即ち

ポアソンが背中を向けると、ポアソンのかみさんの左の眼に接吻してやらうと云ふ道化た考へが突如として彼に湧いた。大抵は彼はするい、用心深さを示してゐた。だが、政治に就いて論争し合つた時には、彼はかみさんに自分の云ふ處を尤もとうなづかせる爲めでゝもあるやうに、あらゆる危険を冒した。巡查の後ろで恥知らずにもこつそりとやらかす、かうした意地むさな撫愛は、彼に佛蘭西をしてやくざな一家とならしめた、帝政に對する復讐をさせたのだ。たゞ、今、彼はヂェルエズのある前である事だけは忘れてゐた。彼女は店を洗つて拭いてしまつてから、三十スウ呉れるのを待ちながら、カウンターの側に突つ立つてゐた。ギルチニーの眼の上を接吻する彼を見ても彼女は落着き拂つてゐた、丁度彼女が容喙する必要のない自然な事でもあるやうにして。ギルチニーの方は少しまごついた様子だつた。彼女はヂェルエズの前の、カウンターのうへへ三十スウを投げ出し、ヂェルエズは依然待つてゐるやうな様子をして、未だ洗濯で震へながら、下水の中から引きずり出された猫のやうに不態に、そして濡れそぼつて動かないでゐた。

——ぢや、あの子はお前さんに何んにも云はなかつたのかい？　彼女はとう／＼硝子屋に訊いた。

——そりや誰の事だ？　彼は叫んだ。あゝ！　さうか、ナナ！……なにいや、何んにも外の事は。あの餓鬼の口つたら！　可愛い、毒の壺見たやうだ！

で、ヂェルエズは彼女の三十スウを手にして出て行つた。彼女の踵を踏み減らした破れ靴は唧筒のやうに水を吐いてゐた、本當に音楽入の靴だ、歩道へその大きな底革の濡れた型を残しながら曲を奏して行つた。

近所では、彼女のやうな飲んだくれな女共が今では、彼女は自分の娘の身の代を自分の慰みに飲んでしまつたに違ひないと語り合つてゐた。彼女自身はスタンドの上で焼酎の彼女のコップを飲み干す時には、芝居がゝつた恰好で、いつそこれが自分をお目出度くしちまつてくれゝばいと願ひながら酒に没頭してしまふのであつた。そして、彼女は牝驢馬のやうに丸くなつて歸つて來るといつも、それが心配だと吃りながら言つてゐた。が善良な人達は肩をすぼめてゐた。皆はさう云ふ彼女を知つてゐた、居酒屋の苦い酔ひは心配の代價なのだ。要するに、それは酒の心痛とでも稱すべきものであらう。勿論、初めのうちこそ、彼女はナナの逃亡があきらめられなかつた。彼女のうちに残つてゐた廉恥は、滅茶苦茶にかき亂されてゐた。それに、一般に、母たる者は、その隣間迄も、自分の娘が初めての男にお前の愛稱で呼ばせてるとは思つて見たくないものだ。だが彼女は長い間かうした廉恥を守る爲めには、頭は狂ひ、心はへしやげて、既に餘りにだらしがなくなつてゐた。彼女の心のうちには、さうした心持が入つて來るかと思へば、又脱け出して行つてしまふのだつた。彼女は一週間は自分の賣女娘の事は考へずに安氣に暮した。と、急に、やさしい情合か、怒りの心持

が、時々には空き腹の時に、時々には腹一杯の場合に、彼女をしめ付けてしまった。そして多分は其處で抱擁して、時々のはすみで、多分は散々に蹴飛ばして、何處か小さな場所からナナを掴まみ出して来たくて堪らないやうな狂暴な意欲に捕へられた。彼女は遂にはもう恥しいなんて事のはつきりした考へは持たなくなつてしまつてゐた。たゞ、ナナは彼女のものだつた、さうぢやないか？ 全く！ 人は或る所有物を持つてゐる時には、それが蒸發してしまつても構はないでゐようとはしないものなのだ。

で、かうした考へが彼女に起り出すと、ヂェルエエズは街々を憲兵のやうな眼付をして歩いた。あゝ！ 若しか彼女が彼女の穢れた娘の姿を見付け出したんなら、どんなにしてか彼女を家へ連れ歸つたことであらう！ この年には、この邊はどつた返しの騒ぎだつた。プウルブル・マヂヤンタとプウルブル・オルナノは貫通され、もとのバリエエル・ポアソニエエルは撤廢されて市外の並樹街へと穴を明けられた。それが爲め附近は面目を一新してしまつた。ポアソニエー街の片側全部は取り拂はれた。今では、グウト・ドル街から、太陽を直射した空氣の流通のいゝ、ひろくとした明るさが見られた。この方面の眺望を遮つてゐた崩れかゝりの破ら屋の代りに、プウルブル・オルナノの上には、本當に記念建造物とも云ふべき、教會のやうに浮彫りになつた、七階建の家がくつきり見えてゐた、そしてその刺繍の窓掛のかゝつた、明るい窓々は富の象徴でももあるやうだつた。その家と

云ふは、眞つ白で、街の眞つ正面に位し、ずらりと輝き渡つて街を照してゐた。で、毎日、それでランティエーとポアソンは議論を闘はした。帽子屋は巴里の崩解を叫んで口を乾かさなかつた。彼は皇帝が至る處に宮殿を置いて、労働者を邊鄙な地へ逐ひ遣つてしまふのを呪咀した。と巡查は、ぞつとするやうな怒りに捕へられて蒼くなつて、あべこべに皇帝は先づ第一に労働者の事を考へてゐるのだ、若し必要とあれば、彼は彼等にたゞ單に労働を與へると云ふ目的だけで、巴里を綺麗に刈り取つてしまひもするだらうと答へた。ヂェルエエズも亦、自分が住み慣れた場末の暗い一隅を滅茶々にしてまつた、かうした裝飾を腹立たしく思つた。彼女の怒りは、明かに、近所が彼女自身が潰滅に向つた時から立派になり出したと云ふ事から來てゐた。自分がどん底の生活にゐる時には、人は頭の上へ光線を一杯に受けるのを好まないものなのだ。かくて、ナナを捜す日は、彼女は建築材料を跨いだり、建造中の舗道々々を行き惱んだり、棚に突き當つたりするのを憤慨してゐた。プウルブル・オルナノの美しい煉瓦建なんかになると彼女は我慢がし切れなかつた。そんな建物等は、ナナと同じ事、鼻持ちのならぬお轉婆に見えた。

けれども、彼女は數回娘の消息をきいた。悪い知らせを一生懸命したがつてゐるお喋舌りの口といふものは何時だつてあるものだ。さうだ、彼等は彼女に、ナナは世故を経ない娘の淺ましさに彼女の爺さんを置き去りにしてしまつたのだと語つて聞かせた。彼女はこの爺さんの處にゐれば、取

り入る術さへ知つてゐたなら、甘やかされ、大事にされ、自由でさへあつて、非常に幸福だつたんだ。然し若い者つてもものは馬鹿なもので、彼女は何處かの不良少年と一緒に逃げたにきまつてる、精確な事は知らないけれど。確からしい事を云ふ者は、或る日の午後、バステイルの廣場で、彼女は彼女の爺さんに一寸した買物をするに云つて三スウ貰つた、で爺さんはそのまゝ何時迄も彼女を待つてゐたと云ふのであつた、上流社會になると、かうした出鱈目を英吉利女の前での小便と呼んでゐる。外の者等はシャベル街の、グラン・サロン・ド・ラ・フォーイで、その後シャユウ(舞臺)をやつてゐる彼女を見たと言言した。そしてそれはデュルエズが近所の踊り場を歩いて見ようかと思つてゐた時だつた。彼女はもう舞踊場があれば門を入つて見ずには通り過ぎなかつた。クウポオは彼女と連れ立つた。初めは、彼等は單に大騒ぎをしてゐる連中の顔を見ながら、ホールを廻つて見た。それから、或る晩には、金があつたので、彼等は一休みしてナナが出るかどうか待つ爲めにある料理店でホット・ワインを飲んだ。が、一箇月の末には、彼等はナナを忘れてしまつてゐた、彼等はダンスを見るのが好きになつて、自分達の樂みの爲めに踊り場歩きをしてゐた。數時間の間、言葉も交はさないで、彼等は卓子に肘を突いたまゝ、板張りの震動する中で、呆然としてしまつてゐた、息詰まるやうな、そして室内の赤い明りの中で、その蒼い眼でバリエエルの私窩子共の仕草を凝視してゐるのが勿論心の中では面白かつたのだ。

丁度、十一月の或る夕、彼等は體を温める爲めにグラン・サロン・ド・ラ・フォーイへ入つた。戶外では、寒い風が道行く人の顔を切るやうだつた。が、場内は恐ろしい人波だつた、卓子はみんな塞がつてる、中央も一杯、階上も満員、本當に肉を盛り上げたやうだつた。さうだ、カアン風の臟物料理を好きな者共はどつさり樂むがいゝ。彼等は一つの卓子も見付からずに二た廻りした時に、突つ立つたまゝ、何處かの組が出て行つて席を明けのを待つ事にきめた。クウポオは汚れた職工着を着、頭の天邊が平らべつたくなつた、底のない羅紗の古カスケット帽を冠つて、爪先立ちになつて體を右左に動かしてゐた。と、彼が通路を塞いでゐたので、若い瘦せた小男が肘で彼を突いた後、自分の羅紗外套の袖で手を拭いてゐるのを彼は見て取つた。

——もし、彼は怒つて、彼の脂たぐの溜つた口からパイプを引き抜きながら云つた。お前さん申譯ねえ位云つてもよかりさうなもんぢやねえか？……それともこれが氣に喰はねえのか、職工服を着てるのがよ！

若い男は振り返つて、亞鉛工をぢろく見廻した。クウポオはつゞけた、

——少しは物を知れ、瘦せつぼちのやくざ野郎、職工服が一等立派な着物ぢやねえか、さうよ！
 勞働の着物よ！……己が手前を拭いてやらア、己が、手前望みなら、ぼか／＼つと……手前みてえな腰抜け野郎が勞働者を侮辱するなんて見た事も聞いた事もねえ！

ヂェルゼエズは空しく彼を和めようと努力してゐた。彼は自分の弊衣の中で威張り出して、職工着の上を叩き立てながら、我鳴つた。

——こん中にや、男一疋の胸があるんだぞ！

その時、若い男は眩きながら、群集の中へ姿を消した。

——なんて口穢ねえ無頼漢だ！

クウポオは彼に追ひ付かうとした。羅紗外套に悪體を吐かれたまゝにしておく譯にや行かなかつた！ 野郎覚えてやがれ！ 一サントイムも出さねえで女を引っかけようつて出来合ひの身の皮よ。若しも見付け出して見やがれ、膝の下へ這ひつくばらせて職工服にお辭儀をさせてやるんだ。然し人いきれは餘りにひどかつた、進む事さへ出来なかつた。仕方なしにヂェルゼエズと彼はダンスの廻りをのろ／＼廻つて歩いて見た。物好き共の三重の列は互に壓しつぶされさうにして、一人の男が倒れて見せたり。又は相手の女が脚を上げ切つたりするたびに、顔をほてらしてゐた。で、彼等は二人共脊が低かつたので、束髪や帽子が跳ねてるのを、どんな様子かと思つては爪先立ちになつて見た。劈くやうな、眞鍮の樂器のオーケストラは、クワドリイルを激しく奏してゐた、そしてその嵐のやうな音はホールを震撼してゐた。その間踊り子共は、足を踏み鳴らしながら、瓦斯の焰を重くしてゐる程な塵を揚げてゐた。暑さは堪らなかつた。

——御覽よまア！ 忽ちヂェルゼエズは云つた。

——何んだつておい！

——あの天鷲絨のカロケー帽だよ、あそこの。

彼等は伸び上つた。それは左側の、黒天鷲絨の古帽子だつた、そしてそれにはぼろ／＼になつた二本の羽が付いて揺れた。が彼等は、あらゆる悪魔のシヤユウを踊り、跳ね返つたり、旋廻したり、沈んだり飛び出したりしてゐる、この帽子ばかりがつゞいて眼に付いた。彼等はそれをうよく／＼動かしてゐる見物の頭の中で見失つてしまつたり、外の頭の上の方へ行つて又見出したりしてゐた、それは彼等の廻りで、この帽子が踊つてゐる外は何んにも見えず、その下の方ではどんな事をしてゐるかも知らないが、人々は面白がつて、わい／＼囃し立てゝゐた。

——全くどうしたてんだ？ クウポオは訊いた。

——お前、あの頭が分らないのかい？ チェルゼエズは、喉を絞め付けられるやうにして囁いた。私や頭の鉢が破れさうだ、あの子なんだよ！

亞鉛工は、一と押し押しして、群集を分けた。さうだ、あれはナナだ？ それに結構な身装をしてやがる！ 彼女は背中には、怪しげな酒場の卓子を拭いてすつかり汚としてしまつたやうな、絹の古衣裳しか着けてゐなかつた、そしてその鉤裂きの出来た裾襷は隨所に檻褌を引きすつた。かうし

て、地肌には肩へショールすらもかけないで、大きく裂けた釦穴から裸の胴を見せてもゐた。あのやぐざ阿魔は大事にしてくれた一人の爺さんを持つてゐたのに、そして彼女を打つにきまつてゐたの知れないごろつきの後を追ふとて、こんな態さまになる迄墮落するとはまア何んたる事だ！ にも拘らず、彼女は老犬のやうに髪の毛を亂し、そしてその下卑た帽子の下では赤い脣をして、馬鹿と元氣で挑發的な態度をしてゐた。

——待て、おれが行つて彼奴を踊らせてやるから！ クウポオは再び云つた。

ナナは別に警戒もしてゐなかつた。彼女が體を捻ねくり廻はしてゐる處は、見ものだつた！ そして忽ち左の後ろに、と忽ち右の後ろに、體を二重に折つてしなを作り、彼女の相方の顔の邊迄足を蹴上げたりする有様は、自分で自分の體を裂いてしまふかと思はせた！ みんな輪になつて、彼等は彼女を喝采してゐるのだつた。で、喝采を浴びながら、彼女はスカートを掴まんで、膝迄まくし上げ、シャユウの處作で揺れに揺れ、獨樂のやうにぐる／＼廻り、大跨に踏ん張つて平らべつたく、床板の上へくつ付いて見せたりした、次いで簡素な一寸したダンスを又やつて、腰や首を吃驚りする程巧妙に廻した。これを見てゐたなら誰しも彼女を隅つこへ抱いて行つて食ひ付いてやる程可愛がらないではゐられなかつた。

けれども、クウポオは、バストウレル(一團の)の最中に出て行つたので、場面を亂して、方々から

叱責を受けた。

——お前さん達に云ふが、ありやおれの娘なんだ！ 彼は叫んだ。通らせてくれツ！

ナナは、帽子の羽で床を掃くやうにして、尻を差し出し、そしてそれをよりやさしく見せる爲めに小さく揺りながら、明かに、退場しつゝある處だつた。彼女は丁度旨い場所を、したゝか靴蹴にされ、起き上つて、彼女の父親と母親の姿を見て、眞つ蒼になつてしまつた。何んと云ふ間の悪るさだ、ほんとに！

——引きずり出せ！ 踊り子共は唸つた。

然しクウポオは彼の娘の相方の中に彼の羅紗外套の瘦せた若い男を再び見出したので、人々の云ひ罵る言葉なんか屁とも思つてゐなかつた。

——さうだ、おれ達に悪態を吐きやがつたのは彼奴だ。へん！ 手前忘れやがつたてえんか……あゝ！ 此處で手前を掴まましたア思はなかつた、さつきおれに失敬な眞似をしやがつた青二才野郎！ デルズエズは、齒を食ひしげつて、彼を押し進めて、云つた、

——お黙り！……いさこさを云ふがものはないんだよ。

そして、自分から進んで行つて、彼女はナナに念入りな頬打を二つ喰らはせた。初めのは羽の帽子の側へ、二度目のは白い頬の上へ赤く、リボンのやうに跡をとどめた。ナナは、自失して、泣きも

せず、手向ひもしないで、それを受けた。オーケストラはつゞけられてゐた、群集は怒り出して激しく繰り返した。

——引きずり出せ！ 引きずり出せ！

——さア、逃げて見ろ！ デルモエズは又云つた。前へ出ろ！ 云はねえ事か、今度逃げ出して見やがれ、牢屋へ叩つ込んでやるから！

瘦せた若い男は用心深く姿を消してしまつた。その時、ナナは、ばつの悪るさに自失してしまつて、非常にぎこちなく前へ進み出た。彼女が顔をしかめた時には、後ろから張り飛ばされて彼女は門口へと歩かされてゐた。そして彼等はいかうして三人一緒に、嘲笑と冷評の間を行つた、その間にオーケストラは、砲弾を打出すとき大喇叭の雷のやうな音と共に、パストウレルを奏し終つた。

生活の営みは再び始まつた。ナナは、十二時間彼女のもとの物置で眠つた後、一週間は願る殊勝に振舞つた。彼女は地味な小さな着物を自分で繕ひ、ボンネットを冠つて、その紐を束髪の下へ結び付けて置いた。又美しい情熱に驅られて、彼女は自分の家で働きたいと言明した。自分の家になつて、相當の稼ぎは得られる、それに仕事場へ通つてゐるやうに穢はしい話は耳にしない。で彼女は仕事を捜して来て、菫の莖を巻く爲めに、初めのうちは五時に起きて、彼女の道具を前に控

へて卓子に坐り込んだ。然し二三十打引き渡してやると彼女は仕事を前にして腕を組んでしまつた。手は痙攣したやうになつて、莖を廻す習練を失つてしまひ、そして、六箇月も自由な空気を吸つて、氣儘に暮してゐた自分が、かうして閉ぢ込められてゐるのが、息苦しくなつてしまつた。で、糊壺は干乾らびてしまひ、花瓣や青い紙には、脂の汚染が出るやうになつたので、雇主は三度も自分から遣つて来て騒ぎ立て、自分の毀損された材料を要求した。ナナはそのまゝ、ずる／＼に暮してゐた、自分の父親からは始終張りのめされ、母親とは朝に晩に掴み合ひをしてゐた。そして喧嘩の時には二人の女は互に口にす可からざるやうな事を面罵し合ふのであつた。こんな状態が永續しやう譯がなかつた。十二日目に、彼女は普段着を背中にし、そして彼女の帽子を耳迄冠つて、即ちそれが一切である荷物を背負つて逃げ出してしまつた。ナナが歸つて來、そして悔悟したのを聞いて唇を尖らしてゐたロリュウ夫婦は、それを聞くと轉手古舞ひして喜んで、死んでしまふかと思はれる程の大笑ひをした。第二回目の光景、第二號駈落の段、馬車で聖ラザアルへ走る娘共！ いや、全く餘りに喜劇だ。ナナは駈落にかけちや名人だ！ 實際全く！ 若しかクウポオ夫婦があの子を今度は出さないようにしようといふのなら、彼奴達もうあの子を籠の中へ叩つ込んで置くより外に仕様があらぬえ！

クウポオ夫婦は、人前では、大きに厄介拂ひをしたやうな顔をしてゐたが、心の中では、彼等は

怒り狂つてゐた。然しその憤怒も常に一時的のものでしかないのだ。やがて、彼等は瞬きをする程の間もなく、ナナは近所にうろついてゐると云ふ事を耳にした。彼等の顔に泥を塗る爲めにそんな事をしてるんだと彼女を罵つたヂェルエズは、あらゆる讒謗を口にした。自墮落阿魔と道で逢ふかも知れない、さうしたら拳骨位で済ます事つちやない。さうだ、さうなつたら百年目だ、彼女はナナを蹴つてくゞ蹴つくり返して、舗道の上で身の皮を剥きこくつて、あの駱駝阿魔が自分の腹から生れた事なんか考へないでその上を歩いて通つてやらうと。ナナは近くの舞踊場の中を熱狂させてゐた。彼女はグラン・サロンド・ラ・フォリイではレエヌ・ブランシユ(姐^姉)として洽く知られた。彼女がエリゼー・モンマルトルへ入るや、パストウレルの踊りで、喚ぎ廻る蝦を演ずる彼女を見ようと、人々は卓子の上までも高く盛り上がった。シヤトオルウヂユでは、彼等は二度迄彼女を場外へ擔ぎ出したので、彼女は誰か知り合ひの者が来てくれないかと、門口をうろつくばかりだつた。並樹街のブウル・ノアルと、ポアソニエー街のグラン・テユルクは、彼女が垢の着かない着物を着てる時に行くには相當なホールだつた。然し、近所の一切の踊り場のうちで彼女は、濡めつぽい中庭の中にあるバル・ド・レルミタアヂユに、カドランの盲小路にあるバル・ロベエルがやつぱり一番好きだつた、二つながら半打のカンテラで照らされた、臭いやうな小さいホールだつたが、居心地がよくて、其處ではみんなが満足で、何もかも自由で、相方の男達も彼等の女連も奥の方へ行つては、接吻

し合ひ、誰憚るところもなかつた。そしてナナは跳ねるも倒れるも自由自在に、本當に魔法杖のやうに踊り抜いて、時には踊り上手な婦人のやうな装ひをし、時には掃き溜を掃除する婢女はしためのやうななりをしてゐた。あゝ！ 彼女は美しい生活をしてゐたもんだ！

クウボオ夫婦は度々彼等の娘を清潔でない場所であつたと見たやうに思つた。彼等は背中を向けてしまつて、彼女だとはつきりさせない爲めに、外の方向へと踵を返すのだつた。彼等はもう、そのやうな掃き溜女を自分達のところへ連れ歸る爲めに、舞踊場の中から群衆の嘲罵を買ふやうな眞似をしようと云ふ心はなくなつてゐた。が、或る晩、十時頃、彼等が寝ようとしてると、とん／＼戸を叩くものがあつた。それはナナだつた、彼女は平氣で、寝せて貰ひに來たのであつた。そしてどんな態で、あゝ神様！ 帽子も冠らず、ぼろ／＼な着物で、半靴は踵を踏みへらし、乞食のやうななりをしてゐた。彼女は勿論拳骨を見舞はれた。それから、彼女は固くなつたパン片にむしや振り付いた、そして眠つてしまつた、疲れ切つた腰をして、最後の一口の食物を食べながら、で、暫くはかうした生活がつゞいた。が、ナナは少し派手氣が出て來ると、或る朝消えてなくなつてしまつた。見えもしないや知りもしない！ 鳥は行つてしまつた。そして幾週間、幾箇月かは流れ去つた、彼女は失はれたるが如くであつた、そして何處から來たとも決して云はずに、忽然として再び彼女が姿を見せた時には、或る時にはピンセットでなければつまめないやうな汚い態をして、體

の頭の方から足の先迄も引つ搔かれた跡をしてゐ、又外の時には立派ななりをして、だがもう突つ立つてもゐられない位に、體はだれ、魂はうつろになつて遊び草臥れて歸つて来るのだつた。親達はそれにも慣らされなければならなかつた。毆打も物の役には立たなかつた。彼等は彼女を踏み付けた、がそれは彼女が一週間泊りに来る、旅籠屋のやうに彼等の處をしてゐる妨げとはならなかつた。彼女は自分のベッドを張りのめされる代價で支拂ふ事を知つてゐた、彼女はその方が自分に取つて得が行くと思つてゝもゐるやうに、そのつもりで懲戒を受けに遣つて来た。それに、彼等の方は打つ事に疲れ果てゝしまつた。で、クウポオ夫婦はとう／＼ナナの好きにまかせることになつてしまつた。彼女は歸つて来た、歸つて来なかつた、彼女は戸を開け放して置きさへしなかつたら、それでよかつた。あゝア！習慣は人間の廉恥心をも消耗し盡すものだ。

たゞ一つヂェルエズが肝癩玉を破裂させる事があつた。それは彼女の娘が裾飾りのある曳きずるやうな衣裳を着たり、羽に包まつた帽子を被つて姿を見せる時だつた。いや、さうした贅澤は、彼女は我慢がし切れなかつた。いくらでもナナは逸樂は貪るがいゝ、彼女が好きなら。だが、彼女が彼女の母親の處へ来る時には、彼女は少くとも女工が着るべき着物を着て来たらよからう。裾飾りのある衣裳は貸家に革命のやうな騒ぎを起させた。ロリュウ夫婦は冷笑した。ランティエーは、すっかり快活になつて、彼女のいゝ香りを嗅ぐ爲めに、その廻りを廻つて歩いてゐた。ボッシュ夫婦はポオ

リイヌに、さうしたびか／＼したなりをしたこの賣女と遊ぶことを禁じてしまつた。又ヂェルエズはナナの壓しつぶされたやうな睡眠にも同じく腹を立てゝゐた、逃げ出してやつて来たやうな後では、彼女は晝迄も眠つてゐた、胸をはだけて、頭にはピンをまだ一杯差してゐながら束髪を崩してしまひ、眞白な顔をして、實に短い息をしながら、彼女はまるで死んでゝもゐるやうだつた。母親は娘を、起きないと腹の上へ一柄杓水を打ちまけるぞと脅かしながら、午前中に五六度は揺り起すのだつた。半裸體の、惡徳で肥り切つてゐる、この大意け者の美しい娘は、目を醒ます能力さへなくなつて、その爲め肉が膨らんで来るかと思はれる位かうして眠りを貪つて母親を激怒させてゐた。ナナは半眼を開き、又それを閉ぢて、益々體をさらけ出してゐた。

或る日、彼女にその生活をむき出しに叱責したヂェルエズは、彼女にこんなに迄體が綿のやうになつて歸つて来るからには、赤いズボン共に身を任せたのかと訊いて、遂には濡れ手で相手の體を揺すりながら彼女を責めた。とナナは怒り出して、敷布の中でころがりながら叫んだ。

——そんな事ア澤山だ、さうぢやないか？ おつかさん！ 男の話なんか廢さうよ、その方がましだ。お前さんだつてさん／＼勝手な眞似をしたんぢやないか、私や私の好きな事をするんだよ。

——何んだつて？ 何んだつて？ 母親は吃つて云つた。

——さうさ、私やお前さんの事は決して兎や角云はなかつた、なぜつて私に關係がないんだもの。

けどお前さんは氣にもしてなかつたらうが、私やお父つあんが躰をかいてる間に、お前さんがシャツに靴下でうろついているのをよく見たもんさ……それも今ぢやもうお前さんは面白くもなからうが、外の者にや面白いのさ。私を打つちやつといておくれよ、お手本を見せなきやよかつたのに！

ヂェルズエズは眞つ蒼になつてしまつて、手をぶる／＼震はせ、自分が何をしてゐるかも知らずにぐる／＼廻つてゐた、その間ナナは、うつ伏しに平らべつたくなつて、兩腕で確り彼女の枕を抱へ込み、無感覺になつて鉛のやうな眠りにと再び落ち込んで行つた。

クウポオは、もうなぐり飛ばさうなんて考へすらもなくなつて、唸つてゐた。彼は全然、頭の働きを失つてしまつてゐた。そして、實際、彼を道徳性を失つた父として取扱ふがものすらなかつた、何故なれば酒は彼から善惡の全意識を奪ひ去つたから。

今では、それがお定期になつてゐた。彼は六箇月も酔を醒まさなかつた、次いで彼は寢込んでしまつてセイント・アンヌへ入院した。彼に取つては別荘のやうなものだつた。ロリュウ夫婦はトル・ポアイヨオ(一種の火)公爵様が彼の所有地へお成りになると冷笑してゐた。數週間後には、彼は恢復して醫員からは再び釘をさゝれて、養育院を出て來た、と又飲み出し、再び倒れて、更に又療治が必要になる日迄は、體を壊してゐた。三年に、彼はかうして七度びセイント・アンヌへ入つた。近所では彼を彼の分房が彼の爲めには取つてあるのだと語り合つてゐた。然し尾籠な話だがこの酒氣狂は、再

發に再發を重ねて、その輪が片端からはねて行つてゐるこの病ひ樽の最後の破裂、その終滅が豫見される位に、その都度々々益々駄目になつて行つた。

かくて、彼は見榮みさかも何も忘れ果てゝゐた。その恰好つたらいゝお化だつた！ 酒毒は彼に荒く働き出した。彼のアルコール漬になつた體は、藥屋にある、玻璃瓶の中の胎兒のやうに、萎びて來てゐた。彼が窓の前に立つと、日光は彼の肋骨を透して來るやうだつた、それ程に彼は瘦せてしまつた。頬は凹み、眼は濡れて、寺の本堂に上げる蠟燭程涙を流して、彼はたゞやつれたその顔の眞ん中に、花の咲いたやうな松露鼻だけは、美しいそして赤い、石竹色をさせてゐた。たつた四十歳を過こしたばかりの彼を知つてゐる人達は、彼が踏ふみまつて、よち／＼して、まるで爺さんになつてしまつて通つて行くのを見ると、小さい戰慄を覺えるのだつた。そして彼の手の震へは加はり、わけてその右の手は或る時などには、コップを口へ持つてゆくのに兩手を使はなければならぬ位に、ひどい震へ方だつた。おゝ！ 何んと云ふ恐ろしい震へやうだ！ それはすべての痲痺の中にあつて、彼を怒らせたたゞ一事だつた！ 彼が兇猛な呪咀を自分の手に浴びせかけて唸つてゐるのがよく聞えた。でない時には、蛙のやうに飛び上るのを見つめながら、何んにも云はないで、もう腹も立てないで、こんな眞似をさせ得る内部の何かの機械を搜してゝもゐるやうな風をして、踊つてゐる自分の兩手を前に幾時間も沈思してゐる彼の姿が見られた。で、或る晩などは、ヂェルズエズが行つて見ると、

彼はかうして、大きな涙の粒を酔ひどれのそのくすぶつた兩頬に流してゐた。

六六八

ナナが彼女の夜の残りを自分の親達のところで、する／＼に過ごしてゐたこの夏は、クウポオの體はわけて悪るかつた。彼の聲はすっかり變つてしまつた、まるで酒が彼の喉へ新しい樂器を備へ付けでもしたかのやうだつた。彼は片耳が聾になつた。次いで、數日のうちに、眼が見えなくなつた。躓くまいと思へば、彼は梯子段を降りるのに、欄干へ捕まらなければならなかつた。彼の健康に至つては、誰かゞ云つたやうに休んでゐた。彼は恐ろしい頭痛と、眼へ火花を散らすやうな眩暈に悩んでゐた。忽ちにして、ひどい痛みが彼の腕や脚を襲ひ出した。と彼は眞つ蒼になつて、坐り込んでしまはなければならなかつた、そして幾時間も茫然として椅子に倚つてゐた。かくて、さうした危期の後には、彼は一日中不隨の片腕をしてゐた。數回、彼は寢込んだ。彼は體を丸くして、病んでゐる獸のやうなひどい、そして連續的の喘ぎをしながら、敷布の下へもぐり込んでしまつた。かうして、セエント・アンヌに於けると同じ狂暴な光景が再び始まつた。不信で、不安で、高熱に悩まされて、彼は狂愚な激怒の中に身を藻掻き、彼の職工服を裂き、その癢擧した顎骨で家具を片端からかじるのであつた。でなければ彼は馬鹿にやさしくなつてしまつて、女の子のやうな泣き言を云つては、誰からも愛されないとすゝり泣いたり嘆いたりしてゐた。或る晩、デュルエズとナナが一緒に歸つて來て見ると、彼はもう自分のベッドの中にゐなかつた。自分の場所へは、彼は長枕

を寢かして置いた。そして、彼女等がベッドと壁の間に隠れてゐる彼を見付け出した時には、彼は齒を食ひしげつて、男共が自分を殺しに遣つて來るのだと語つて聞かせた。二人の女は彼を再び寢かして子供をあやすやうに安心させてやらなければならなかつた。

クウポオは一つしきや藥を知らなかつた、安ブランディを半壺叩つ込んでやる、すると胃の腑の中は棒でなぐられたやうに彼をすつくと起ち上らせてくれた。毎朝、彼はかうして痙痛をいやしてゐた。記憶と云ふものは長い以前から逃げてしまつて、彼の頭は空っぽだつた。そして彼は自分の足で立てるのを見ると、病氣を嘲笑した。彼は決して病氣をしてはゐなかつた。さうだ、彼は丈夫なもんだよとからかはれる程度で、達者だつたのだ。それに、それ以外の事などは、彼にはまるでこんがらがつてしまつてゐた。ナナが、六週間うろつき廻つてから、歸つて來ると、彼は彼女が近所迄買物にでも行つて歸つて來たものと信じてゐる様子だつた。よく、何處かの紳士の腕に捕まりながら、彼女は彼に出逢ふと、彼が彼女を覚えてゐないので、からかつてやつたりした。遂には彼はもう何んにも分らなかつた、彼女は椅子の見當らない時には、彼の上へ腰をかけてやつてもいゝ位だつた。

ナナが又しても、八百屋へ行つて熱した梨があるかどうか見て來ると云つて遁走したのは、初霜の頃だつた。彼女は冬を感じてゐた、火のない煖爐の前で齒をがち／＼させてゐる譯には行かなかつた。クウポオ夫婦はたゞ彼女を鷲馬と罵つてゐた、彼等は梨を待つてゐたのだつた。勿論彼女は

歸るには歸るだらう、何時かの冬には、彼女はニスウの煙草を買ひに降りて行つたまゝ三週間もかかつた。が幾月経つても、ナナは再びもう姿を見せなかつた。今度こそは、彼女は恐ろしく大飛びをしたに違ひなかつた。六月は來た、彼女は暑さと共に益々歸つては來なかつた。屹度、これつきりなのだ、彼女は何處かで白いパンを見付け出したのだ。クウボオ夫婦は、極貧の或る日、子供の鐵のベッドを賣つて、六フランを一文も剩さずサン・ツアンで飲んでしまつた。このベッドは彼等に取つて邪魔ものであつた。

七月になつて、或る朝、ギルヂニイは通りすがりのヂェルゼエズを呼び止めて皿洗ひを手傳つてくれと頼んだ、と云ふのはその前日ランティエーが御馳走する爲めに二人の友達を引つ張つて來たのだつた。で、ヂェルゼエズが、帽子屋の食ひ散らした馬鹿に汚された皿を洗つてゐると、店で相變らず胃の腑の奉公をしてゐた帽子屋は、忽ち叫び出した、

——お前さん知らないのか、おつかさん！ おれはいつかナナに逢つたよ。

ギルヂニイはカウレタールに坐つて、空らになつた玻璃碟や抽斗を見て懸念さうな様子をして、激しく頭を振つた。彼女は餘り管々しい事は云ふまいと、自ら抑制してゐた、なぜつてさうすれば畢竟悪い感じを懷かせてしまふ事になるから。ランティエーはナナに可成りちよい／＼逢つてゐた。おゝ！ 彼女は彼を保證する譯には行かなかつたらう、彼は湯文字が頭の中へちら付き出すと、碌な

事は仕出かさなない男だつた。この頃ギルヂニイと非常に親密になつて且つ彼女の信任を受けたルラのかみさんが丁度入つて來て、下卑た澁面を作つて、訊いた、

——どう云ふ意味で、お前さんはあの子に逢つたのさ？

——おゝ！ いゝ意味に於てだ、帽子屋は非常に媚びられて、笑つて彼の口髭を縮らしながら答へた。あの子は馬車に乗つてゐた。おれの方ぢや鋪道の泥をこねてゐたのさ……實際だよ、おれはお前さんに誓ふ！ 辯解する餘地がないぢやないか、あの子の側へ行つて愛稱で呼びかける親類の息子共は滅法幸福つてもんだ！

彼の眼は輝き、彼は店の奥で突つ立つて、皿を拭いてゐる最中のヂェルゼエズの方へ振り返つた。

——さうだ。あの子は馬車に乗つてたよ、さうして大いした身なりをしてた……おれにや一寸あの子だつて事が分らなかつた、花のやうな生き／＼した顔に白い乳つ齒をして、まるで上流社會の貴婦人見たやうだつた。あの子の方から己に自分の手袋と一緒に微笑を買いだのさ……あの子は何處かの子爵を物にしたんだ、おれはさう思ふ。おゝ！ 素敵なものよ！ あの子はおれ達なんかみんな眼中に置かなくつてもいゝんだ、あの餓鬼やすつと／＼幸福なんだ……小猫の戀、いや、お前達あのやうな小猫は想像も及ぶまいよ！

ヂェルゼエズは依然彼女の皿を拭いてゐた、既に長い前から綺麗にそしてつや／＼してゐたけれ

ど。ギルヂニイはその翌日どうして拂つていゝか分らないのである二つの勘定書の事が不安で、思ひに沈んでゐた。一方、砂糖を吸つて滋養分を取つて、肥つて脂切つてゐるランティエーは、既に四分の三は食ひ盡してゐる、そして其處には廢滅の臭ひが吹き荒んでる香料食料品の店を、小さなおいしい品物で飾り立てようと云ふ熱心に溢れてゐた。さうだ、彼はボアソン夫婦の商品を綺麗に片づけようとしても、かり／＼囁る砂糖焼巴旦杏や、ちゆう／＼する大麥の砂糖漬位のものしかもうなかつた。忽ち、彼は正面の歩道に、釘をかけ、劍をかちや／＼させて通る、勤務中の巡査の姿を見て取つた。そしてそれが益々彼を調子づかせた。彼は無理にギルヂニイに彼女の亭主を眺めさせた。

——全くよ！ 彼は呟いた。今朝はいゝ頭をしてる、バダンギュは！……見て御覽！ 鯨鋒張つてゐる事つたら、彼奴ア屹度不意に行つてふん縛つてやらうと思つて、何處かへ硝子の眼玉を貼り付けて來たに違えねえぜ。

ヂェルズエズは再び自分の處へ登つて行つた時、彼女はクウボオがベッドの縁に坐り込んで、いつものやうに危機に瀕して愚昧に返つてゐるのを見出した。彼はその死んだやうな眼で石疊を見入つてゐた。で、彼女は肢體は折れるやうになり、兩手は彼女の汚い短裳に沿うてだらりと垂れ、どつと一つの椅子の上へ坐り込んでしまつた。そして、物の十五分は、彼女は彼と面と向つて、何んにも云はないでゐた。

——私や聞いて來た事があるんだよ、彼女はとう／＼囁いた。お前さんの娘を見たんだつて……さうだ、お前さんの娘は素敵なものだ、さうしてお前さんなんかもう要らないんだ。あの子は滅法幸福なんだつてさ、まア！……あゝ！ 神様！ 私やあの子のやうな地位になれるんならどんな苦勞でもする。

クウボオは相變らず石疊を見つめてゐた。次いで、彼は怒つた顔を上げて、愚者のやうな笑ひ聲をして、吃つて云つた。

——おい／＼、私の牝鹿、おれやお前を根付けにして置きやしねえ……手前はまだそれ程悪くねえ、面せえ洗やア。手前も、世間で云ふやうに、幾ら古くなつた鍋だつて鍋蓋にや事を缺かさねえつてもものだ……糞ツ！ だからほうれん草にやバタを付けて置けつて事よ。

十二

それはよくは分らないが一月十二日か十三日の、期限後の土曜日の事に違ひなかつた、ヂェルズエズはもう正確には覺えてもゐなかつた。彼女は記憶力も何も失つてしまつてゐた、腹の中へ温いものを何んにも入れなくなつてから程久しいものだつた。あゝ！ 何んで地獄のやうな週間だ！ すつかり掻き集めて、火曜日の四斤のパン二片は木曜日迄持ちこたへ、次いでその前日かさかさにな

つたパンの硬皮を一つ見付け出し、そして三十六時間來と云ふものは、本當に米櫃の前での轉手古舞ひだつた！ 彼女の知つてゐる事と云へば、云はゞ、彼女が自分の背中に感じてゐるものだつた、それは酷寒の時候だ、黒い寒さだ、今にも降り出さうとして雲が吠え面をかいてる、鍋の煤だらけの底のやうに汚れた空であつた。冬になつて、そして臟腑が饑しいと、帶をしめ付けるものだ、けれどそんな事をしたからつて腹の足しにはなりやしない。

多分、晩に、クウボオは錢を持つて來るかもしれない。彼は働いたと云つてゐた。全くありさうな事だ、さうぢやないか？ でヂェルゼエズは、けれども幾たびとなく瞞されてはゐるが、しまひにはこの金を當てにし出した。彼女は、あらゆる失策の後、近所ではもう拭巾一つ洗ふものが見出せなかつた。で彼女にその勝手仕事をやらせてゐた或る年寄りの夫人すらが、表から怒鳴り込んで來て、自分の處の酒類を飲んでしまつたと云つて彼女を罵つた。何處でも彼女を傭はうとはしなかつた、彼女は火の車だつた。それが却つて心の中では彼女を落着かせてゐた、彼女は十本の指を動かす位なら死んでしまふ事をえらぶ位迄に頑愚になつてしまつてゐた。兎に角、若しクウボオが彼の勘定を持ち歸れば、何か温いものが食べられるのであつた。で、待つてゐるうちに、十二時がまだ鳴らなかつたので、彼女は藁蒲團の上に横になつてゐた、横になると、飢ゑや寒さが少くなるのだつたから。

ヂェルゼエズはそれを藁蒲團と呼んでゐた。だが實際は、それは隅の方に藁を積み重ねたものに過ぎなかつた。追々に、寢道具は、近所の古道具屋に並べ立てられるやうになつてしまつた。最初困つた時には、彼女は毛蒲團を解いた、そして其處から羊毛を幾掴みか取り出して、前掛に入れて一斤十スウでペロオム街へ行つて賣つて來てゐた。次いで、毛蒲團が空らになると、或る朝、コーヒー代を拂ふ爲めに布片を三スウに代へてしまつた。つゞいて枕を、それから長枕を。残つたのは木のベッドだつた、それは彼女の腕の下に抱へ込む譯には行かなかつた、それに若しも家主の擔保品をこそく持ち出さうとするのを彼等が見てもしようもんなら、貸家中の者を嘯集するかも知れない。ポッシュ夫婦が控へてゐた。さうは云ふものゝ、或る晩、クウボオに手傳つて貰つて、彼女はポッシュ夫婦が御馳走にありついてゐる隙を窺つて、そしてヤオ〜とベッドを取りくづしてしまつた、側面も、背中も、底の框も何もばら〜に。この始末をした十フランで、彼等は三日御馳走を食つた。藁床では十分でなかつたと云ふのか？ かくて幕も毛蒲團の布と一所になつて何處かへ行つてしまつた。彼等は二十四時間の飢餓の後、夢中になつてパンに食傷して、寢場所も片づけてしまつた。藁屑は箒の一撃で押し出してしまひ、埃はいつもく〜してゐた、そしてそれが何んとも云へず汚なかつた。

藁を積んだ上に、ヂェルゼエズは、すつかり着物を着たまゝ、より多く温さを取る爲め、兩足は短

裳の襤褸の下へ纏めて、鐵砲の引鐵のやうに體を丸めてゐた。そして、毯のやうになつたまゝ、眼はぱつちり開いて、彼女は、さうした日には、眞面目腐つた考へで再び思ひに耽るのであつた。ああ！ いや、何んて朝だ？ 食事もせずにかうしてつゞけられるもんぢやありやしない！ 彼女はもう自分の飢ゑは感じてゐなかつた。たゞ、彼女は胃の腑の中が鉛のやうだつた、同時に彼女の頭蓋は彼女には空っぽのやうに思はれた。勿論、破ら屋の隅々には彼女の氣を引き立てるやうなものもありやしなかつた！ 今では眞の犬小屋であつた、温い外套を着せられて、街路に出てゐる獵犬すら、かゝる犬小屋を背景にしては、繪にすら描かれなかつたことであらう。彼女の蒼い眼は何もない壁を見つめてゐた。長い前から、小母ちゃんのとこ(調)へみんな運ばれてしまつてゐた。箆筒に、卓子と一脚の椅子とが残つてゐた。が箆筒の大理石と抽斗とは、木のベッドと同じ方法で消えて失くなつてしまつてゐた。火事だつてこれ以上には綺麗に片つけやしなかつたかも知れない、小さな瓦落多はみんな溶けてしまつてゐた、懐中時計、それは十二フラン出した時計だ、親類の寫眞に至る迄も、その寫眞の框を或る女商人が買つて行つたのだ。馬鹿に愛嬌のある或る女商人、彼女の店へヂェルエズは藥汁鍋、アイロン、櫛と運んで、品物に應じて五スウ、三スウ、二スウを得、そしてそれでパンを買つては歸つて來た。今となつては、こはれた古い一丁の心剪り缺しかもう残つてゐなかつた、そしてそれは女商人が彼女に一スウだつて拒絶してしまつた。おゝ！ 若し彼女が誰か

に埃や垢の汚物を賣る方法を知つてゐたなら、彼女は早速その店を開いた事だらう、その室の汚ないつたらなかつた！ 彼女は隅々には、蜘蛛の巢しか見て取る事が出来なかつた、そして蜘蛛の巢つて奴は多分はずた／＼に切り裂くにはいゝもんだつたが、然しまだ此奴を取引きしようと思ふ者はなかつた。で、頭をひねくつて、何か賣つて遣りたいもんだと云ふ希望は棄て、彼女は益々藁床の上に縮まり込んでしまつた、そして彼女の骨の髄迄も氷らせてゐる悲しげな雪空を窓から眺めてゐる方が増しだつた。

何んと云ふだらし無さだ！ 彼女のやうなこんな状態に身を置いて、そして頭の中を誤魔化したところで何んのいゝ事があるつて云ふんだ？ 若し彼女は少くともやす／＼まどろむ事が出来たんだつたら！ けれど彼女の臺所の荒涼さは彼女の頭の中を去らなかつた。家主のマレスコ氏は、その前日、彼自身遣つて來て、若しも彼等が一週間内に遅れた二期分の家賃を拂はないならば、彼は彼等を追ひ出してしまふと云つた。全く！ 彼は彼等を追ひ出したらう、彼等は又確かに舗道の上にあつてより悪い事はなかつたかも知れない。この尾長猿が彼の外套を着込んでそれからその毛皮の手袋をはめ込んで、まるで彼等が何處かへ臍繰金を隠してゐるやうに、彼等に家賃の督促に登つて來る處を思つても見よ！ 糞べら棒！ 自分の喉つ首を絞め付ける位なら、自分の可愛いゝ口に何んでも構はず詰め込んでくれるがいゝ！ 實際、彼女は彼を餘りに剛愎だと思つた、

彼女は彼をみんなの知ってる處へ叩き遣りたかつた、そしてもつと奥深い處へ！ 歸つて來たと云へば彼女に武者振りつかない事がなかつたクウポオのあの御粗末な動物も同様だ、彼女は彼を家主と同じ場所へ追ひ遣つてしまひたかつた、さうなつた時には、彼女の指定の場所と云ふは途方もなく廣いものだつたらう、なぜつて彼女は其處へみんなを追ひ遣つてしまふのだから。それ程彼女は世の中の人を人生を呪つてゐたのであつた。彼女は本當に拳固の間屋になつてしまつた。クウポオは彼が牝驢馬の扇と呼んでゐる短い太い杖を持つてゐた。そして彼はそれで女房を叩くんだ、それは見ものだつた！ 恐ろしい汗だつた、彼女は汗だく／＼になつてしまつた。もう餘りに善良ではなくなつてゐた彼女は、嘔り付いたり引つ搔いたりした。さうした時には、空つぽの部屋の中は上を下への騒ぎで、雨霰の拳固はパンの味を増させた。然し彼女は遂には外の時だつて同じだが滅多打ちを始めた。クウポオは幾月もつゞくやうなのらくらを考へ、飲んで氣狂のやうになつて歸つて來ては彼女を死ぬ程張りのめして、幾週間中だつて遊んで暮らすつもりでゐた、彼女は慣れつこになつた、彼女は彼をうるさいと思つた、それ以上何んでもなかつた、そしてかうした日には、彼女は彼を何處かへ片づけてしまひたかつたのだ。さうだ、何處か暗い處へ、彼女の亭主の豚を、暗い處へ、ロリユウ夫婦を、ポッシュ夫婦を、そしてポアソン夫婦を！ 彼女を輕蔑してゐる近所中の者をみんな何處かへやつてしまひたかつた！ 巴里全體をも葬りたいのだ。そして彼女は比類のない超越した態度で、けれどもさうしてしまつた事に幸福と復讐とを感じて、手を拍つてそれを何處か暗い處へ埋めてしまひたかつた。

不幸にして、若し人間が一切に慣れるものだとしても、なほ未だ一寸も食事をしないと云ふ習慣をとる譯には行かなかつた。ヂュルエズを當惑させたものはたゞその一事だつた。彼女は泥溝の底にはまり込んでゐようとも、そんな事は平氣だつた、そして彼女が側を通ると、人々が指弾つばはじきして見せたからつて何でもなかつた。悪い身なりももう彼女を苦めはしなかつた、然るに飢餓は依然として彼女の腸をしめ付けてゐた。おゝ！ 彼女は可愛い、皿々には左様ならを告げた、彼女は降りてつては何んでも眼についたものはみんな食ひ食つてしまふのだつた。祝ひ日には、今では、彼女は肉屋で、曝らされてゐるのに飽き／＼して皿の中で黒くなつてゐるやうな、一斤四スウの牛肉の屑を買ふのであつた。そして彼女はそれを馬鈴薯と一緒にして、小土鍋の底でぐ／＼煮た。でなければ彼女は牛の心臓を小間切れにしてソースで煮た、このシチュウでは彼女は口舐めづりをしてゐた。又外の時には、彼女は葡萄酒があると、パンをそれに漬けたが、全く鸚鵡のスープだつた。二スウの伊太利のチーズ、白芋、その汁の中で煮つめた豌豆、と云つたやうなものはなほ彼女がもう

ちよい／＼は食べられなくなつた御馳走だつた。彼女は醜陋な飲食店に於けるアルカン(十七世紀頃から大利の事)に成り下つて行つた、其處では一スウで、彼女は腐つたやうな炙肉の截屑の雜つた魚の脇骨

の山盛りが食べられた。彼女はそれよりも更に卑しくなつて行つてゐた、慈善な料理店主にお客の残したパンの硬い皮を乞うて来て、隣人の爐でそれを出来るだけ長い間ぐづぐづ茹で、置いて、麵麩ソープを拵へるのだつた。彼女は腹の減つて仕様がな朝には、掃除夫が通る前に、商人の戸口々々を犬共と一緒にうろつき廻つて、何か落ちてはゐないかと思つて丹念に調べて見るやうな筋肉と云つたやうな、富める者の御馳走に有りついてゐた。さうだ、彼女はそれで暮してゐた。こんな事は思つて見ただけでも、上品な人達は撃墜する。だが若しさうした人達だからつて三日も何んにも嚙らなかつた事なら、彼等と雖も彼等の腹に對して些かは唇を尖らすことだらう。彼等だつて四つん這ひになつてさうして外の連中と一緒に汚物を食はないと云へるもんか。あゝ！ 貧乏人共ののたれ死、飢を叫ぶ空つぼの臟腑共、赫灼として光まばゆいこの大巴里では、聞くも穢はしい事柄に充ち、そして牙を鳴らしてゐる動物共の窮乏の叫び聲が聞えてゐるのだ！ 曾てはヂェルゴエズは防ぎつた鷲鳥を鱈腹詰め込んだと云ふのか！ 今ちや、彼女はそんなものがあつたら鼻を拭いて嗅ぎ立てたらう。或る日、クウボオがそれを又賣りして飲んでしまはうと思つてパンの切符を二枚彼女から失敬すると、飢ゑて、憤激した彼女は、そればかりのパンを盗まれただけで、彼を十能で叩つ殺し兼ねない騒ぎだつた。

けれども、室外の灰白い空を眺めてゐると、彼女は辛い僅かなまどろみで寢入つて行くのであつた。彼女は雪模様とその空が彼女の上に天井を明けてゐる夢を見た、それ程迄に彼女は寒さを感じてゐた。遽かに、彼女は體の疼くやうな非常な戰慄に襲はれて、跳り上りながら目醒めて、突つ立ち上つた。おや／＼！ 彼女は死にかけてゐたと云ふのか！ 震へながら、恐ろしい形相をして、彼女はまだ晝間の光線が射してゐるのを見た。ぢや夜にはなつてゐなかつたのか知ら！ 何んて時間が長いんだらう、人間が腹の中に何んにもない時には！ 彼女の胃の腑は目を醒まし、彼女も亦目を醒まし、そして彼女を拷問にかけてゐた。椅子の上に倒れ、頭は垂れ、両手は温める爲めに腿の間に入れて、彼女はクウボオが金を持つて来てさへくれれば、食事が出来るのだともう勘定してゐた。パン一片、酒一罇、リオン料理の牛の胃袋二た皿と。マヅウヂ爺さんの掛時計は三時を打つた。まだ三時にしかならなかつたのだ。その時、彼女は泣き出してしまつた。決して彼女は七時間も待つ力はなかつたらう。彼女は彼女の體全體を調子を取つて揺り、自分の非常な苦みを揺り鎮めてゐる小娘のやうに體を前後に動かして、二重に折れ重なり、それをもう感じない爲めにと、胃の腑を押しつぶすやうにしてゐた。あゝ！ 飢ゑるよりかはお産の苦みの方が増しだ！ そして、自ら慰める事が出来ないで、怒りに襲はれ、彼女は起き上つて、彼女の飢ゑを連れて歩いてる子供のやうにして寢せつけようと思つて、地團太踏んだ。一時間半の間、彼女は空つぼの部屋の隅々に

行つてはぶつかつた。次いで、忽ち彼女は眼をちつと据ゑて、立ちどまつた。一番いけないのは、彼等が云ひたい三昧を云ふだらうと云ふ事だつた、彼女は彼等が望みとあれば彼等の足を舐めもしたらう、かくして彼女はロリュウ夫婦に十スウ借りに行つたのである。

冬には、貸家のこの階段、風の寄りたかりのこの階段では、十スウ、二十スウの貸し借りは常住の事で、この死に損ひ共は互に僅か許りの仕事をし合つてやるのだつた。たゞ、ロリュウ夫婦へ頼みに行く位ならいつそ死んだ方が増しだつた、誰も彼等が金を出す事にかけて極端にけちん坊な事を知つた。ヂェルゼエズは、行つて彼等の戸を敲くと云ふ、大變な勇氣を出した。彼女は廊下に出ると、齒醫者の處へ行つてベルを押した人の、急にほつと感ずるやうな感じを懐かせられた位、非常に恐れをなしてゐた。

——お入り！ 鎖工の疇走つた聲が叫んだ。

何んて居心地のよさだ、部屋の中は！ 鍛冶場は火焰を擧げ、その白い焰で狭い仕事場を照してゐ、そしてロリュウのかみさんは金の針金の捲いたのに焼きを入れてゐた。ロリュウの方は、彼の仕事臺の前で、汗を流してゐた、鏈環を火吹管で一生懸命接いでゐると、それ程暑かつたのだ。そしてそれはいゝ臭ひがしてゐた、キャベツのスープは煖爐の上でぐつぐつ煮えてゐ、それから立ち上る湯氣はヂェルゼエズの心を顛倒させてしまつて、彼女を氣絶させさうだつた。

——あゝ！ お前さんかい、ロリュウのかみさんは彼女に掛けろとすら云はずに、唸つた。お前さん何んしに來たんだい？

ヂェルゼエズは答へなかつた。彼女はその週間には、ロリュウ夫婦と仲が悪る過ぎると云ふではなかつた。然し十スウの無心は彼女の喉へつかへてしまつてゐた、彼女は、煖爐の近くに威張つて腰をかけて、お喋舌り最中のポシュの姿を見て取つたから。彼は世間の奴等を馬鹿にしたやうな風をしてゐた！ 彼はお尻みみたいな顔をして笑つてゐた、唇の穴はまん丸くし、そして兩頬はそれが彼の鼻を隠してゐる位に膨んでゐた。何んて云つたつて本當に尻だつた、

——お前さん何か用かね？ ロリュウは繰り返した。

——お前さん達はクウボオを見なかつたかね？ とう／＼ヂェルゼエズは口籠りながら云つた。私や此處にゐる事だと思つてゐた。

鎖工夫婦と門番とは冷笑した。いや、間違ひなく、彼等はクウボオは見なかつた。彼等はあんなクウボオなんか逢はうとて杯を用意しときやしまいし。ヂェルゼエズは一生懸命になつてそして吃りなだら又云つた、

——あの男は私に歸るつて約束してたもんだから……さうだ、私に金を持ち歸つてくれる筈なんだよ……で、どうあつても私が必要なものがあるもんだから……

大きな沈黙が支配した。ロリュウのかみさんは荒つぽく鍛冶場の火を煽ぎ出し、ロリュウは彼の指の間から垂れ下つて鎖の端へ鼻頭を下げてしまつてゐた、その間ボッシュは屏の穴を丸くして、満月のやうなその笑ひ方をつゞけてゐた、そしてその口付たら一寸試しに、指を突つ込んで見たい位だつた。

——若し私がつた十スウ持つてたら、ヂェルゴエズは低い聲で呟いた。
沈黙はつゞいた。

——お前さん達私に十スウ貸してくれられないか知ら？……おゝー 私やお前さん達に今晚は返せるだらうよ。

ロリュウのかみさんは振り返つて、ちつと彼女を見据ゑた。其處にや彼等を口車に乗せてやらうつておべんちら女がある。今日、彼女は彼等から十スウ捲き上げる、明日は二十スウをと云ひ出すかも知れない、そしてそれきりで無心を止めると云ふ筈はないのだ。いや、いや、そんな事があるのか。そりやさうしてやつたら、有頂天にもならうさ。

——けれど、お前さん、彼女は叫んだ。お前さんは私達が金を持つてないつて事は十分承知してゐるぢやないか！ さア、私のポケットの中は空つぽだ。嘘だと思ふんなら手を突つ込んで見るがいい……そりや有りさへしたら、無論、喜んで用立てゝ上げるだらうよ。

——心は何時だつてさうしたもものさ、ロリュウは唸つた。たゞ、出来ない時にや、出来ないんだ。ヂェルゴエズは、非常に謙遜で、頭を振つて彼等の云ふ所に賛成した。けれども、彼女は去らなかつた、彼女は眼の隅から壁にかゝつた金の幾束かを、かみさんが彼女の小さい腕で力一杯に伸線板にかけて引いてゐる金の針金を、亭主の節くれ立つた指の下に堆かくなつてゐる金の鏈環を偷み見してゐた。そして彼女はこの汚らしい黒づんだ金属の端があつたなら十分旨い御馳走に有り付けらだらうにと考へてゐた。その日には、仕事場はその古い鐵具や、石炭の埃、よく拭かない油垢などで空しく汚なかつた、彼女の方はそれが兩替屋の店のやうに、富で光り輝いてゐると思つて見てゐた。で又彼女は敢て繰り返した、おとなしく、

——私やお前さん達に返すよ、私やお前さん達に返すよ、屹度……十スウ、それ位ならお前さん達の迷惑にもならないだらうに。

彼女は前日から何んにも食べない事は白状しようとも思はないで、心は希望ですつかり漲つてゐた。次いで、彼女は自分の足は折れてしまひはしないかと思つた、彼女はどつと泣き出してしまふ事を恐れた、そしてなほ吃りながら云つた、

——お前さん達が親切だつたら！……お前さん達が知らう筈もないけれど……さうだよ、私やほんとに、あゝあゝ！ 私やほんとに……

その時、ロリュウ夫婦は唇を尖らして、ちらつと目配せを交はした。パンパンは乞食をしてゐるんだ、此頃では！ 全く！ 申分ない落ちぶれ方だ。彼等はそんな事は好まなかつた！ 若しも彼等が知つてゐたなら、寄せ付ける事ぢやなかつたのに、なぜつて乞食共にやいつも注意しなきやならぬのだ、さうした人間は何んとか云ひ草をこしらへて部屋の中へ入つて来ては、貴重品を誤魔化して逃げて行くもんだ。彼等の處では、盗まうと思つたら勝手に盗めた。何處へ指を遣つてもいゝ、そしてたつた指を握つただけの事で、三十フランでも四十フランでも持ち去れるのだ。既に數回、彼等は彼女が金の前に突つ立つてしまつた時に、ヂェルゼエズの顔付の怪しいのを見て取つて、心配させられたもんだ。今度は、云つて見れば、彼等は彼女を警戒してゐたのだ。で、彼女が益々近寄つて来て、足の先を木の簀の子の上に載せたので、鎖工はそれ以上は彼女の要求に答へもせず、あら／＼しく彼女に向つて叫んだ、

——もし／＼！ 少し注意して貰はう、お前さんはお前さんの靴の底革に付けて金の屑を又持つて行かうてんだ……本當に、さうして糊付けにしようと思つて、お前さんは底革の下へ固油を付けてるつて云はれたつて仕様がななんだよ。

ヂェルゼエズは、徐かに、退いた。彼女は暫くは一つの棚へ身を持たせかけてゐた、そしてロリュウのかみさんが彼女の手を驗べるのを見て、彼女は両手を大きく開ききつて、それを示し、腹も立て

ずに、何んでも受け入れる落ちぶれた女として、おづ／＼した様で云つた、

——私や何んにも取りやしない、お前さん見てみたつていゝよ。

そして彼女は出て行つた、キャベツのスープの強い臭いと仕事場の心持のいゝ熱さが、彼女を餘りに苦しめてゐたのだつた。

あゝ！ ほんの一と言だつて、ロリュウ夫婦は彼女を引き留めはしなかつた！ 出て行つて幸ひ、若しも彼等が彼女の爲めに再び戸を開きでもしたなら、正氣の沙汰ではなかつた！ 彼等は彼女の顔なんか見るのは眞つ平だつた、彼等は、その困窮が金の要るものである時には、自分達の處へ他人の困窮なんか入り込ませたくもなかつた。そして彼等は、旨いスープの事を思つて、ぬく／＼と暖まり込んで、安樂にしてゐられるのを見出して、エゴイズムの大きな享樂に浸つてゐた。ポシュは又體を伸ばして、彼の兩頬をなほも膨らませてゐたが、その笑ひが汚ならしくさへなつて來た。彼等は青い店を開いたり、客を呼んで數々の御馳走したりした、パンパンの昔の仕打に挿し首尾よく敵を打つたと思つてゐた。それが餘りに成功してしまつた、かうして旨いものが好きならどうしたらいいかつて事を見せびらかしてやつたのだ。食ひしん棒の、怠けものの、不したら女共のいゝ見せしめだ！

——なんて態だ！ 十スウねだりに來やがるとは！ ロリュウのかみさんはヂェルゼエズの背後から叫んでやつた。さうだ、お前にやらうか、私があゝの女に早速十スウ貸してやらうもんなら、一杯

引っかけに行つてしまふんだよ！

チルエエズは彼女の破れ靴を廊下に曳きずつて行つた、重げに、両肩は垂れて。彼女は自分の戸口迄来た時に、入つて行きはしなかつた、彼女の部屋は彼女を恐れさせてゐた。歩けば歩く程、彼女はより温かくなつてそして、我慢が出来たかも知れなかつた。通りすがりに、彼女は梯子段の下のブル爺さんの巢を、首を差し延べて覗いて見た。其處にも一人ゐた、爺さんが、彼だつていゝ加減腹が減つてゐたに違ひなかつた、彼は三日以來晝飯も晩飯も心で描いてゐたのだ。所が彼は内になかつた、其處には彼の穴があるばかりだつた、で彼女は、誰か何處かへ彼を招んだものと思ひ込んで、嫉妬を感じた。次いで、彼女はビヂャル等の前へ來ると、呻り聲を聞いて、入つて行つた。鍵は相變らず錠前の上にあつた。

——どうしたつてんだねまア？ 彼女は訊いた。

部屋は非常に綺麗だつた。ラリイが、朝の間はまだ、掃除をして物をきちんと片づけてゐたのだつて事がよく分つた。貧乏風は此處の内にも空しく吹き荒んで、古い器具はみんな持つてつてしまひ、貧乏の穢さ苦しみの行列ばかりが列べ立つてゐた、ラリイはあとからくくとそれをみんな掃除しては、どうにかまア體裁を作つてゐた。富裕でないにしたところで、彼女の處にあつては、それが世帯持ちのよさを感じさせてゐた。その日には、アンリエットとデュウルの、二人の子供が、片隅で平

和に切り抜いた古い繪をおもちやにしてゐた。然しチルエエズはラリイが眞つ蒼になつて、敷布を願に當てがつて、X形の彼女の狭いベッドの上に寝てゐるのを見て吃驚りさせられてしまつた。彼女が寝てるなんて、まア！ 彼女はぢや大病なんだ！

——お前さん、どうしたつてんだね？ 不安になつて、チルエエズは繰り返した。

ラリイはもう唸らなかつた。彼女は徐ろに彼女の白い眼瞼を擧げて、そして惡寒の爲めに痙攣してゐたその唇で微笑しようとした。

——私や何んともないんだよ、彼女は非常に低くかすかに云つた。おゝ！ 本當にいゝんだよ、一寸も何んともないんだよ。

それから、眼は再び閉ぢて、一生懸命になつて云つた、

——私やこの頃中疲れ過ぎたのさ、だから怠け者をきめ込んでね、私や體を休めてるんだよ御覽の通り。

然し彼女の頭はない顔は、鉛色をした斑點で大理石のやうになつて、たゞ事でない苦みの色を見せてゐたので、チルエエズは自らの苦悶をも忘れてしまつて、兩手を合せて彼女にすり寄り、跪づいてしまつた位だつた。一と月この方、彼女はこの子が、壁に捕まつて歩き、杉のやうにひどくかさ／＼する咳で體を二重に折り曲げてゐるのを見てゐた。子供はもうその咳すら出来ないやうにな

つてゐたのだ。彼女はしやつくりをした、血の細い流れは彼女の唇の隅々々を走つてゐた。

——私のせむぢやないんだよ、私や何んだか気分が優れない、彼女は落着いたらしい様子で呟いた。私や怠儀で、私や少しは片附けたんだけど……大抵奇麗だわね、え？……さうして私や窓硝子も拭かうと思つたんだ、けど足が云ふ事をきかなかつた。何んて意氣地がないんだらう！ だけど用事が済めば、寝てもいゝんだわね。

彼女は口籠つた、かう云ふ爲めに、

——まア見ておくれよ、あの子供達が鉄をおもちやにして、手を切りやしないかどうか。

そして彼女は震へながら、階段を上つて来る重い足音を聞いて、黙つてしまつた。野獸のやうにビヂャル親父は戸を押し開けた。彼はいつものやうにしたゝか飲んでゐた、そして兩眼はヴトリオル(鴉)で猛けり狂ふ兇暴な焰を燃やしてゐた。彼はラリイが寢込んでる姿を見て取ると、あざ笑ひながら彼女の腿の上を打つた、彼は大鞭をはづして、唸つた、

——あゝ！ 糞ツ、あんまりだ！ 笑はせるねえ！……牧牛共が今頃、晝日中藁床の上に臥ふてやがらア！……人を馬鹿にしやがるのか、あきれた曳きすり阿魔め！……さア、打つぞ！ 失せやがれ！

彼は既にベッドの上の方で鞭を鳴らしてゐた。けれど子供は、哀願するが如く、繰り返した。

——いえ、おとつアん、後生だから、打たないでおくれ……そんな事をしたら屹度あとで後悔するんだから……打たないでおくれ……

——手前逃げようつてのか、彼は更らに高く呶鳴つた。ぢやおれは手前の脇腹をくすぐるぞ！……手前逃げようつてのか、あきれた頓痴氣め！

その時、彼女は徐かに云つた、

——私や出来ないんだ、分つたかい？……私や死にかけてる。

ヂェルエエズはビヂャルに飛びついて彼から鞭を引つたくつてしまつた。彼は、愚に返つて、そのままX形のベッドの前に突つ立つてゐた。そこで何を歌つてやがるんだ、この鼻つ垂らし阿魔は？ そんなに若くてくたばれるもんか、病氣でもねえのに！ 砂糖でも舐ぶりてえつて云ひ草だらう！ あゝ！ 思ひ知らせしてくれるから、嘘をこきやがるんなら！

——お前、今に本當のことがお分りだらう、彼女はつゞけて云つた。私や出来るだけの間は、お前さんに苦勞をかけないようにした……聞き分けておくれ、今度は、さうして私に左様ならを云つておくれ、おとつアん。

ビヂャルはだまされるのではないかと思つて、鼻をひん曲げてゐた。けれども彼女がひどい顔付をしてる事、大人のやうな長いそして鹿爪らしい顔をしてる事だけは本當だつた。部屋の中を通つて

ある死の息は、彼の醉を醒ました。彼は長い睡む氣から引きずり出された人間のやうに、彼女の廻りをうろく見廻して、家の中がきちんと整頓してゐ、二人の子供等は片言雜りで夢中で遊び戯れてゐるのを見た。で彼は、椅子の上に倒れて、吃りながら云つた、

——己達の小さい母親、己達の小さい母親……

彼はさう云ふより外術を知らなかつた、そしてそれがラリイに取つてはもう何んとも云へずやさしく響いた、彼女は未だ曾て斯く迄に甘やかされた事はなかつたのだ。彼女は彼女の父を慰めた。彼女は彼女の子供等をすつかり育て上げない前に、かうしてこの世を去るのがわけて心苦しかつた。彼がその面倒を見るだらうか、え？ 彼女は彼にその死に垂んとする聲で彼等をよく世話すること、身のまはりなどの事につきこま／＼と注意を與へた。彼は、再び酔つ拂ひの煙に巻き込まれて、とろんとした丸い眼で、逝つてしまはうとする彼女を見つめながら頭を振つてゐた。かうして有りと有らゆる事柄が彼の心を再び動かした。けれど彼はもう何んにも分らなくなつてしまつてゐた、そして泣く爲めには網膜が酒で餘りに焼けてしまつてゐた。

——もしお聴き、沈黙の後ラリイは又云つた。私達やパン屋に四フラン七スウ借りてる。これは拂つてやらなきやいけないよ……ゴオドロンのかみさんは私達のとこのアイロンを持つて行つてるから、催促をしておくれな……今夜は、私やスリーブを拵へる事が出来なかつた、けれどパンが残

つてるから、馬鈴薯でも温めて食べるといふよ……

彼女の最後の息を引き取る迄も、この可哀さうな猫は彼女の家族全體の小さな母親として踏みとどまつてゐた。彼女の代りの勤まる者は一人だつてありやしなかつたらう、確かに！ 彼女はそのやうな年齢で眞に母としての理性を持つて死んで行つた、けれどもその肺臓はそれ程迄に廣やかな母性を包容するには餘りに柔かくそして餘りに狭かつたのだ。そして、若しこの實を失つてしまつたとしたら、それは勿論彼女の父親の兇猛な動物のせみだつたのだ。母の方は足蹴にかけて殺してしまつた後、彼は又娘をも殺戮したではないか！ 二人の善良な天女は塚穴の中にもゐやう、が彼とてもう境界石の角の犬ころのやうにくたばるより外はなかつたであらう。

ヂェルゼエズは、けれども、わつと泣き出すまいとして自ら抑制してゐた。彼女は子供達をあやしてやらうと思つて、手を差し延べた。と、敷布の端が迂り落ちたので、彼女はそれを折り返して、ベッドを直してやらうとした。その時、瀕死の女の子の哀れな小さな體は出た。あゝ！ 神様！ 何んと云ふみじめさだ、そして何んと云ふ哀れさだ！ 石くれだつて泣いてしまはう。ラリイは丸裸で、袖付短衣の端切れを襯衣のやうにして兩肩へ引つかけてゐた。さうだ、すつ裸なのだ、そして殉教の血に染まつた、憂ひを含めるが如き裸形だつた。彼女の體にはもう肉は持つてゐなかつた、骨が皮を突き破りさうだつた。その兩脇腹には、紫色をした細い條斑が腿の邊迄引いてゐて、鞭の

痕が其處には生ま／＼しく残つてゐた、鉛色をした一つの斑痕は左腕に、まるで萬力の腮が、隣寸位の太さだと云つてもいゝ程な實にやさしいこの手を搦き碎いてしまつたものゝやうに、丸く輪を拵へてゐた。右の足にはよく口を塞がない裂傷を見せてゐた、それは打ち方が悪かつたので毎朝使ひに出ると口を開いてしまふのであつた。足から頭へかけて、彼女は一面に喪服を着てゐるやうだつた。おゝ！ この幼年の殺戮、男のその重たい足はこの愛らしい子供を搦き碎いたのだ。息も絶えなんとして喘いでゐるこの弱きものが、かゝる重きに過ぐる十字架を負ふことの何といふ忌はしさよ！ 人は教會で、異教の徒に鞭打たれてゐる聖女達の像を禮拜するが、その聖女達と雖もこの少女よりは清淨でないのだ。ヂェルゼエズは、もう敷布を引つ張らうとも思はないで、全く可哀さうだと云ふ外何んとも云へない、ベッドの奥で平らべつたくなつてゐるこの子の有様に氣も顛倒して、再び蹲まり込んでしまつた。そして彼女の震へる唇は祈りの言葉を搜してゐた。

——クウポオのをばさん、子供は呟いた。後生だけど……

餘りに短いその腕で、彼女は自分の父の前を恥しくなつて、つゝましくも、敷布をたくし上げようとしてゐた。ピヂャルは、呆然として、自分がこんなにしてしまつた骸骨の上へと眼をそゞぎ、退屈してゐる獸のやうに段々ゆるくなつた動作で、相變らず頭を動かしてゐた。

そしてラリイの體を再び蔽うてやつた時、ヂェルゼエズはもう其處にとゞまれなかつた。瀕死の女

の子は段々衰へて行つて、もう語らなかつた、彼女の眼付き、忍従なそして考へ深い小娘としてその昔ながらの黒い瞳しか物を云つてなかつた、そして彼女はちつと、彼等の繪を一生懸命に切り抜いてゐる彼女の二人の子供達の上へと注いでゐた。部屋はだん／＼暗くなつて行つた、この死期の苦しみの鈍くなつてゐる間にピヂャルは彼の醉を醒ましつゝあつた。いや、いや、餘りに厭ふべき人生だ！ あゝ！ 何んていやな事だ！ あゝ！ なんていやな事だ！ そしてヂェルゼエズは出て行つた、階段を降つた、行方も知らずに。頭は茫然として、一切を片づけてしまふ爲め、乗合馬車の轍の下に進んで身を投げましたらうと思はれる程の心持で一杯になつて。

呪ふべき運命を憤りながら、一生懸命駈けて行くうちに、彼女はクウポオが働いてゐるといふ雇主の入口の前に来てゐた。彼女の二本の足は彼女を其處へ運んだのだつた、彼女の胃の腑は再びその唄を遣り出した、九十もの對句で飢餓の不平を、そしてそれは心で云つてだけより外は術を知らなかつた不平だ。かうした有様で、若しも彼女はクウポオが出て来る處を捕まへようもんなら、彼の錢を搔つ攫つて、食糧を買ひましたらう。それもほんの一寸待つてゐる間に、彼女はくん嚙んでしまつた事だらう。彼女は前日から拇指を口の中へ突つ込んですゝつてゐたのだ。

それはシャルトル街の角を曲つた、シャルボンニエエル街だつた、やくざな十字街では、四方から辻風が吹いて來てゐた。糞いま／＼しいつちやない！ 鋪道を測量したからつて、暖かくはあり

やしなかつた。毛皮の外套を着てゐたからつてやつぱりさうだ！ 空はひどい鉛色をしたまゝでゐた、そして雪は、高い處に残つてゐて、近所中に氷の帽子を戴かせてゐた。何んにも降つちやゐなかつた、けれど空中には大きな沈黙があつた、そしてそれがやがて巴里を白いそして新しい、美しい舞踏服で、すつかり装はうとしてゐるが如くであつた。ヂェルエエズは鼻を上げて、親切な神様に彼の白い衣を直ぐにはお降らせなさらぬように祈つた。彼女は足踏みして、正面の乾物屋の店を眺めてゐたが、それから踵を廻らした、餘りの飢ゑにこの上身を任せて置くは無益だつたので。十字街には眼を牽き付けるものもなかつた。疎らな通行人は、頸巻にくるまつて、急ぎ足に通り過ぎた。なぜつて、自然、人間は臀の邊を寒さに緊め付けられると、ぶら／＼歩いちやゐられないものだから。ヂェルエエズは四五人のかみさんが、亞鉛工場の門口で、彼女のやうに何物か見張りをしている姿を見た。不幸な女共は外にもあつた、勿論、この女房連は酒場へ運んでしまふのを邪魔立てしようと思つて、夫の給料を待ち伏せしてゐるのであつた。中に女憲兵みたいな顔をした瘠馬のやうな女が壁にすり付いて、彼女の夫の背中へ飛び付かうと身構へてゐた。眞つ黒な、卑しげなそしてきやしやな風をした一人の小さい女は、車道の他の側をうろついてゐた。他の一人の、愚鈍さうな女は、しく／＼泣いてゐる、彼女の二人の子供を右と左に引つ張つて遣つて來てゐた。でみんなは、ヂェルエエズと同じやうに、互に言葉は交さないで横眼を使つて見合ひながら、行つたり來りしてゐ

た。よく似た運命の人々にも會へば會ふものだ、あゝ！ さうだ、全く！ 彼女等は彼女等の番地をお互に知り合ふ爲めに、知合になる必要はなかつたのだ。彼女等はみんな悲惨株式會社なる同じ看板の下に住んでゐた。この一月の險惡な天候に、押し黙つて足踏みをしたり互に行き違つたりしてゐる彼女等を見ると、猶更寒くなつてしまつた。

けれども、この工場からは人つ子一人出て來なかつた。とう／＼、一人の職工が出て來た、次いで二人、それから三人。が彼等は、勿論、彼等の給料を忠實に持ち歸る、善良な連中だつた、彼等はこの工場の前をうろついてゐる人影を見て取つて頭を振つた。脊の高い瘠馬のやうな女は、益々入口の側へへばり付いてゐた。そして、忽ち、彼女は、注意しつゝ頭を差し伸ばして外を窺つてゐる最中の、顔の色の蒼醒めた小さな男に跳りかゝつた。おゝ！ 早速是は付いた！ 彼女は彼の體を捜して、彼から金を搔つ攫つた。捲き上げられてしまつて、それきりもう金はなかつた、一滴の酒も飲む譯には行かなかつた！ で、小さな男は、腹を立て、失望して、子供のやうな大きな涙を流して泣きながら彼の女憲兵のあとをついて行つた。數人の職工共は常に出て來てゐた、そして彼の二人の子供を連れ、頭丈さうな母親が近寄つて行くと、はしつこさうな風をした、脊の高い褐色の男がそれを見て取ると、急いで彼女の夫に知らせてやる爲めに引き返した。彼女の夫が小躍りして出て來た時には、彼は五フラン銀貨二つを忍ばせてゐた。眞新しい美しいその二つの貨幣を、一

つづ、靴の中へ入れてしまつて、彼は彼の子供の一人を腕に抱へ上げて、彼に云ひ争つてゐるそのかみさんに急拵への嘘を云つて聞かせながら去つて行つた。一足飛びに往來へ飛び出して、友達と一緒に二週間分の給料を飲み上げようと思つて急いで走つて行く呑氣な職工もあつた。又哀れつぽい顔付をして、二週間の間に三四日しか働かなかつた給料をかじかんだ握り拳の中につかんで、怠けた事を云ひ罵つたり酔つ拂ひらしい、よまひ言を云ひながら出て来るみじめな職工もあつた。然し一番氣の毒だつたのは、卑しげな、そしてきやしやな黒い小さなかみさんの嘆きだつた。彼女の夫は、綺麗な若者で、遣つて來て彼女の鼻の下で我鳴り立てた、そしてその亂暴さつたら、彼は彼女を地上へ張りのめしてしまふのかと思はれた。で彼女は店屋々に沿うてよろめきながら、彼女の體を涙だらけにして泣きながら、ひとり歸つて行つた。

とうとう、行列は止んだ。ヂェルゼエズは、街路の真ん中に突つ立つて、門の中を眺めてゐた。かうしてゐると不吉な感じがして來た。遅れた二人の職工はまた遣つて來た。だが相變らずクウボオは出ては來なかつた。で、彼女がその職工等に若しやクウボオは出ては來なかつたかと訊くと、彼等はふさげながら彼女に仲間は丁度ランティメエシュと一緒に、女つ子共おんなこどもに小便をさせに、裏門からおつ走つて行つた處だと答へた。ヂェルゼエズは分つた。又してもクウボオの嘘にかゝつたのだ、泣いても追つ付かなかつた。で、のろ／＼と、踵の減つた靴を引きすつて、彼女はシャルボニエエル街を降

りて行つた。彼女の食事は小氣味がいゝ程彼女の前を逃げて行つた、そして彼女はそれが黄ろい薄暮の中へと逃げて行くのを、小さい戰慄を以て眺めてゐた。今度こそは、これでおしまひだ。鏝一文だつてなかつた、もう何の希望もなかつた、夜と飢ゑとの外は何んにもなかつた。あゝ！死ぬにはいゝ晩だつた、このいやな夜は彼女の兩肩の上へ落ちて來てゐた！

彼女は重たい足を曳きすつてポアソニエー街を登つて行つた、その時彼女はクウボオの聲を聞いた。さうだ、彼は其處にゐた、プティ・シヰットで、メ・ポットと獻杯をし合つてゐる最中だつた。メ・ポットの道化男は、夏の終り頃、既に色香の褪せ果てた、でも美しいところが澤山残つてゐる女と結婚して、本當の妻君にしてのけた。おゝ！マルティル街の身分のある女で、パリエル街をうろつくやくざ女なんかではなかつた。そしていゝ着物を着、うまいものを食べて、ブルヂョアとして生活する、この人間としての幸福といつたら見ものだつた。彼は一寸見ちがへる位肥つてゐた。仲間の奴等は彼の女房は、彼女の知り合ひの紳士共の間で搜しさへすれば幾らでも仕事はあるんだと云つてゐた。このやうな女房と田舎の家、それは人生を裝飾する爲めに望み得られる一切だつた。で、クウボオはメ・ポットを美望の眼で見えてゐた。野郎、ふさげやがつて小指へ金の指輪迄はめてやがるぢやねえか。

ヂェルゼエズは、クウボオがプティ・シヰットから出て來ると、彼の肩へ手をかけた。

——まア、私や待つてたんだよ、私や……私や餓^ウじいんだよ。みんなお前のせゐだ。だが彼は、旨い事を云つて彼女の口へ栓をした。

——お前ひもじいつて、手前の拳固でも食つてろ！……さうして外の拳固ア明日まで取つとくがいゝさ。

彼は人前で芝居じみた事をするのを面白がるつていふ男だつた！ 全くだ！ 何んだつて！ 彼が仕事をしなかつたからつて、パン屋は要するに粉を捏ねてるんだ。彼女は彼が虚勢を張つてると思つて、出放題を云つて彼を怯^クませようとした。

——ちやお前さんは私に盗みをしろとでも云ふのかい、彼女はかすれた聲で呟いた。
メ・ポットは慰撫するやうな態度で顔を撫でてゐた。

——いや、そんな事をしていゝもんか、彼は云つた。だが女房つてものはうまくやり繰りすることを知つてれば……

クウポオは危くブラヴ^{（ヒヤ）}と叫ぶところだつた。さうだ、女房つて者は、始末をすることを知らなきやならねえんだ。だが彼の女房はいつもがた馬車だつた、やくざ者だつた。若しも彼等が藁床の上でくたばつたなら、そりや彼女のせゐだつたかも知れない。それから、彼は再びメ・ポットに對する美望に陥つてしまつた。彼は存分に温くまり込んでるぢやねえか、畜生！ 本當に家主

のやうだ。洗濯の届いたシャツを着てちいつとばかり氣取つたハイカラ靴なんか穿きやがつて！ 素敵なもんよ！ それが出来合ひものなんかぢやねえと來てゐる！ 一例を擧げて見ても少くともそのおかみさんがよく舟を操つてゐることが分る！

二人の男は場末の並樹街の方へ降つて行つた。ヂェルエエズは彼等について行つた。暫く沈黙の末彼女はクウポオの後ろから、再び云つた、

——私やひもじいんだよ、ねえ！……私やお前さんを當てにしてゐた。何かかじるものを見付けておくれよ。

彼は答へなかつた、で彼女は苦しまぎれの悲痛な調子で繰り返した、

——だつて、みんなお前のせゐぢやないか？

——だが、實際全く！ おれや少しも持つてゐねえんだから！ 彼は激しく振り返りながら、怒鳴つた。放せ、え？ でなきや己ア喰らはすぞ！

彼は既に拳固を振り上げてゐた。彼女は身を退きそして決心したやうであつた。

——行きやがれ、私やお前を放してやるよ、私にだつて結構男は見付かるんだ。

忽ち、亞鉛工は噴き出した。彼はそれを冗談にしてしまつた風をして、さうとは見せかけずに、彼女を押しして行つた。やア、そりやど大層な思ひ付きだ！ 晩、明りのついてる處へ行つたら、彼

女だつて獲物はあるだらう。若し彼女が男をつまんで來たら、彼が彼女にカピュサンのレストオラ
ンを紹介しよう、其處には完全に食事が出来る小さな私室が幾つもある。そして、彼女が薄暗い陰
氣な、場末の並樹街へと指して行くので、彼は彼女になほ叫んだ、

——ねえおい、己にデザートを持つて來ておくれ、己や、菓子と來たら好きなんだ……さうして
若しお前の旦那がたんまり着込んでたら、古外套を一つ貰つてくれ、己やそれを己の一張羅にする
んだから。

ヂェルゴエズは、この地獄のやうな饒舌に追つかけられて、急いで歩き出した。次いで、彼女は自
分が群集の中へたゞひとりで分け入つてゐるのを見出して、再び歩をゆるめた。彼女はすつかり決心
してゐた。盗みをするのとそれをするのとどちらかと云へば、彼女はそれをする事の方が増した
つた、少くとも彼女はさうすれば誰にも害悪は及ぼさなかつたから。彼女は決して自分の持物以外
のものを曝らさうとしてゐるのではなかつた。勿論、それはあんまり綺麗な事ぢやなかつた。然し綺
麗である綺麗でないなんて事は、此頃ぢや、彼女のあたまででは曖昧になつてしまつてゐた。人
間がひもじくて死にさうになつてゐる時には、哲學なんか談じられるものぢやないんだ、出された
パンなら食つてしまふ。彼女はクリギヤンクウルの大通り迄再び登つて行つた。夜は中々遣つて來
ないやうに思はれた。で、待ちながら、彼女は幾つと並樹街を歩いた、丁度夕食に歸る前の散歩を

してゐる夫人で、もあるやうにして。

この近邊は彼女が身恥しく感じた程綺麗に飾り立て、あつた、そして今は何處の家でも一杯に開
け放つてあつた。巴里の中心から登つて來てゐるブウルヴル・マヂヤンタ、遙か田舎迄行つてゐるブ
ウルヴル・オルナノは、昔のパリエエルへ穴を明けて、兩側には家がぎつしり並び、その二つの廣い
並樹路はまだ漆喰が白くて、その中腹にはその兩端が薄暗い複道見たやうに皮が剝けて、でこぼこ
して、歪んで、凹まつてゐるフォオブウル・ポアソニエエルとポアソニエー街とを存してゐた。長い前
から入市税關の壁の崩壊は、小さな篠懸サヤカヒの木キの四列を植ゑ付けた、片側の車道と通行人の爲めの眞
ん中の明き地とで、既に場末の並樹街ブウルヴルを取り擴げさせてゐた。それは群集がうよ／＼してゐたり、
建物の見境の付かない混沌たる中に溺れて行つてゐる限りない道で、遠く水平線の上に口を開けてゐ
る廣大な十字街だつた。だが、新しい高い家々の間には、ゆら／＼した澤山の取り壊した家の殘材
も突つ立つたまゝに残つてはゐた。彫刻のある正面フツナドがあるかと思へば、その間には暗い穴が明いて
ゐたり、その窓々に檻襖を並べ立て、陋屋が欠伸をしてゐたりした。益々募る巴里の贅澤さの下
に、郊外町の見すばらしさは、かくも性急に建てられた新しい市街のこの工事に穴を明けて、そし
てそれを穢がしてゐた。

小さなすゞかけの木々に沿うて、廣い歩道の雑沓の中へ紛れ込んでしまふと、ヂェルゴエズは一人

ぼつちでそして捨てられてるのだと云ふ感じを懐かすにはゐられなかつた。かうした並樹路の既めは、全く、彼女をして、益々胃の腑を空っぽにさせてゐた。で云はゞ、其處には氣樂な人達も澤山ゐるのだけれど、この大勢の人波の中に、彼女の境遇を察して彼女の手の中にそつと十スウを掴ませようといふ基督信者はたゞの一人だつてゐなかつたのだ！ さうだ、其處は餘りに大き過ぎた、餘りに美しかつた、彼女の頭は振り返つてばかりゐ、そして彼女の足は、このやうに廣漠な場所の一つの上の方に垂れ下がつた、灰色の空の測り知れぬこの天蓋の下で、さまよひ歩いてゐた。薄暮は巴里の夕暮の汚ない、さうした黄ろい色合ひを持つてゐた、それは直ぐにも死んでしまひたいと云ふ望みを與へる色調なのだ、路頭に迷ふ生活と云ふものは、それ程にいやらしいものなのだ。暮色は濃くなつた、遠方は泥のやうな色でぼんやりして來た。既に疲れてしまつたヂェルエズは、丁度職工等が歸るので一杯の中へ身を没してゐた。この時間には、帽子を冠つた夫人達や、新しい家に住んでるいゝ着物を着た紳士等は、工場々々の腐敗した空氣を吸つてまだ蒼白い顔をしてる男共や女共の行列を作つた民衆の中へと埋もれてしまつてゐた。プウルヴル・マヂヤンタやフォオブウル・ポアソニエエル街からはかうした群集の幾隊かを送り出して、彼等が登つて行くので息詰まるやうであつた。乗合馬車や辻馬車の耳も破れんばかりの車輪の音の中で、空っぽになつて一足飛びで歸つて來る酒樽運搬馬車や、無蓋馬車、荷馬車の間に、常に増してゐる職工服や従業短衣の人波が車道を覆

うてゐた。使丁等は彼等の負架を肩にして歸つて行つた。二人連れ立つた職工等は、並んで、顔は見合はずに、身振りをしながら、高調子に話して、大勝に歩いて行つた。他の、オーバーを着て鳥打帽を冠つた一人々々の連中は、鼻頭を垂れて、歩道の縁を歩いて行つた。又他の者は五六人の一團になつて、蒼い眼をし、兩手をポケットに突つ込んで、一語も交はさずにつゞいて行つた。或る者は彼等の火の消えたパイプを齒の間へくはへたまゝでゐた。數人の泥工は、四人で借り切つた辻馬車の中で、そしてその上で彼等の土捏桶を踊らせながら、窓から彼等の蒼白い顔を見せて通り過ぎた。ペンキ工等は彼等の繪の具壺をぶら下げ、一人の亞鉛工は長い折り梯子を手にして、人波を割つてゐた。又一人の噴水器屋は、遅くなつて、その箱を背負ひながら、彼の小さな喇叭で、「よき君ダゴベエル」の曲を、心を痛めさせる夕闇の奥で、悲しい調子で奏してゐた。あゝ！ 悲しい音楽、それは軍隊の足踏みを伴ひ、重く背負ひ込んで、疲れて足を曳きずる駄馬を忍ばせた！ 又しても一日の仕事の終りが來た！ 實際、働く毎日々々は長く、そしてそれは餘りに屢々再び遣つて來た。腹を充たす時もなく、そして食べたものをこなす暇もなく、晝間の仕事の時が來ると、再び貧乏の首枷をはめなければならなかつた。けれども元病のいゝ者共は口笛を吹き、足を踏み鳴らしながら、眞つ直ぐに駈けて行つて、夕食へ口を突つ込んだ。ヂェルエズは雑沓が流れて行くがまゝに任せ、右に左に眩で突かれたり、衝突したりするのも構はず、人波の中でもまれてゐた。男共は、疲勞で

體が二つに折れ重なり、腹が減つて駈け足をしてる時には、女に色眼なんか使つてゐる餘裕がないのだ。

忽ち、眼を舉げると、女洗濯屋は彼女の前に昔のパンクウル・ホテルを認めた。怪しげな珈琲店になつたので、警察で閉鎖させてしまつた小さな家は、開扉は廣告で覆はれ、軒燈は壊はされ、葡萄酒の滓で塗つた汚ない色は苔蒸して、雨に打たれて上の方から下の方迄ばら／＼になつて腐つて、棄てられたやうになつてゐた。がその廻りには何の異變もなかつた。紙屋に煙草屋は依然として其處にあつた。後ろの、幾多の低い建物の上には、六階建ての家々の漆喰の剝げた側面が、その毀損した大きい風見を高く上げて、やはり見えてゐた。たゞ、グラン・バルコンの舞踏場だけはもうなかつた。煌々たる燈火に輝いた十の窓のある大きなホールの中には砂糖工場が建つてゐた、そしてその絶えざる機械の音が聞えてゐた。とは云ふものゝ其處で、パンクウル・ホテルのこの陋屋の奥で、一切の呪はれたる生活は始まつたのだ。彼女は突つ立つたまゝの、二階の窓を眺めてゐた、其處には裂けた更紗の布片がかゝつてゐた、で彼女はランティエーと共に暮した彼女の若かつた時を、彼等の初めての喧嘩を、彼が彼女を捨てた厭はしい仕打ちを想ひ返した。何んのかんの云つたところで、彼女は若かつた、それがすべて、遠くから見ると、彼女には陽氣に思はれた。たつた二十歳で、ああ！、彼女は舗道へ捨てられたのだ。と思ふと、ホテルの外観は彼女を苦息しくさせた、彼女は

モンマルトルの側の並樹街へと再び登つて行つた。

ベンチの間の、砂利の山の上で、だん／＼濃くなつて来る夜の中を、いたづらの子供はまだ遊んでゐた。行列はつゞいてゐた、女工等は商店の飾窓を眺めて失つた時間を取り返さうとして、急いで、足並を揃へて、通つて行つた。一人の脊の高い女は、立ち止まつて、彼女を彼女の家から三軒ばかり離れた處迄連れ出した若者へ彼女の手を任せた。他の數人は、夜グラン・サロン・ド・ラ・フォーリイヤブウル・ノアルで落ち合ふ約束をし合つて、別れて行つた。幾群れかの中には、彼等の衣服を折り疊んで小腋に抱へ込み、歸路に就いてゐる行儀のいゝ職工等もあつた。一人の煙突工は、軼しなぐりをかけて、残りの壊れ物を一杯につけた馬車を引つ張つて、車の下に自分が押し潰つぶされてしまひさうな恰好で遣つて來た。けれども、より少くなつた群集の中を、帽子も冠らないで、火を焚き付けて來て置いて、食事の買物と急いで再び降つて行くかみさん連もあつた。彼女等は人々を押し除け、パン屋や肉屋へ飛び込んで、食料を手にする、愚圖々々せずさつさと又出て行つた。走り使ひに遣られた八歳位の小娘共もあつた、彼女等はその胸の邊に、美しい黄ろい人形のやうな、彼女等の脊丈程もある四斤の大きなパンを確り持つて、店々に沿うて去つて行つた、そして彼女等は綺麗な繪の前へ立つと、彼女等の大パンに片頬を當て、五分間は我を忘れて立ち止まるのであつた。次いで、人波は盡きた、群れ／＼は疎らになり、職工階級は歸つてしまつた。と、瓦斯の焰の中で、

済ました一日の仕事の後を、目醒めつゝある怠惰と遊興とのかすかな仕返しが、ちやうど今起り始めてゐたのである。

七〇八

あゝ！ さうだ、ヂェルエズは彼女の一日の仕事を終つてしまつた！ 彼女は彼女を通りすがりに突つこくつて行つた、労働者共のあの民衆全體よりもより疲れてゐた。彼女は其處へ寝込んで、そして死んでしまふより仕方がなかつた、仕事はもう彼女を要求してゐなかつたから、そして彼女は（誰の番だい？ 私か、私やもう疲れ切つちやつた！）と云つてやりたい位、彼女の生存に疲れ果てゝゐた。すべての者が食事をしてゐた、この時間には。もう確かに何もかもおしまひであつた。太陽は彼の蠟燭を消してしまひ、夜は長さうだつた。あゝア！ 勝手氣儘に寝ころんでしまつて二度と再び起き上らない事だ、自分の道具は永久に納めてしまつたのだ、そして永劫横になつてゐる事を考へてゐたいもんだ！ 二十年間精根を使ひ果たした後の、それが果報なのだ！ そしてヂェルエズは、彼女の胃の腑を捻り殺すやうな痙攣に逢つて、我ならずも祝ひ日の事ども、彼女の前生に於ける大饗宴の夜の事を懐ひ出した。わけて、寒いあの四旬齋忌の半ばの或る木曜日の事、彼女は大浮かれだつた。その頃には、彼女は非常におとなしかつた、ブロンドでそして生き／＼としてゐた。ヌウヅ街の、彼女の洗濯場は、彼女の脚の缺點があるに拘らず、彼女を女王と呼んでゐた。その時の事、みんなはアーチで飾つた馬車に乗り込んで、立派な人達の中をわけて、並樹街々に出か

けた、往來の人達は盛んに彼女に横眼を使つた。數人の紳士は本當の女王を眺めでもするやうに、鼻眼鏡を掛け出した。それから、晩には、途方もない大騒ぎをして、そして夜の明ける迄も舞踏をしたものだ。女王、さうだ女王だつた！ 王冠と飾帶とをしてゐた、二十四時間の間、時計が文字板を二度廻轉する間だ！ と、飢餓の拷問で重壓されて、彼女は自分の失墜した榮冠を溝の中に捜してもするやうに、地べたを見つめてゐた。

彼女は改めて眼を擧げた。彼女は自分が取り壊はされた敷軒の屠殺場の前にゐるのを見出した。腸を出してゐる側面は、暗い、悪臭に充ちた、まだ動物の血で濕氣つばい中庭々々を見せてゐた。そして、彼女が再び並樹街を降つて行くと、大きな灰色の壁をした、その上の方には扇形をした陰氣な兩翼を並べて、規則正しく窓々を覗かせてゐる、ラリポアジェエルの病院が同じく眼に入つた。圍壁の中の、一つの門は、四隣を脅威してた、一つの隙間もない、堅牢な檜で出來た死者の門は、墓碑のやうな嚴肅さと沈黙とを持つてゐた。で、それから逃れる爲めに、彼女は更に突進して行き、鐵道の橋の處まで降りて行つた。釘付けにした強い薄鐵板の高い欄干は彼女に眺望を遮つてゐた。彼女はたゞ巴里の煌々たる地平線の方に、停車場の廣場になつてゐる角、石炭の埃で黒くなつてゐる、何かの建物の廣い屋根しか見分けられなかつた。彼女はこの明るい廣い場所から聞えてくる、機關車の笛、避線へ變る貨車のリズムミカルな動搖と云つたやうな、眼には見えないこの巨大な一切

の活動の音を聞いてゐた。次いで、列車が通過した、巴里から出て、次第に大きくなつて来るその喘ぎと車輪の音との急喘を以て到着する處だつた。で彼女はこの列車の白い屋蓋しか見られなかつた、あわたゞしい湯氣は橋の欄干から食み出すと消えて行つた。然し橋は震へ、彼女自身はこの全速力の出發の動搖の中に踏みとどまつてゐた。彼女は振り返つた、見えなくなつた機關車の跡を追ひでもするやうに、その呻き聲は今死んで行つた。この方面には、右に左に高い家々が、切つ立つたやうに、秩序なく建つて、煤煙で一樣に黄ろく汚れた、塗つてない壁や、巨人のやうな廣告をペンキ塗りにした壁の、側面を見せてゐる、一路の奥の方に、彼女は田舎が、自由な空がある事を思つて見た。あゝ！ 若しも彼女が貧窮と苦痛とのこれ等の家々の外そとに、遙か彼方へと去つてしまふ爲めに、かうして出發出来たんだつたら！ 多分は彼女は生活を遣り直すことが出来るかも知れないのだ。次いで、彼女は振り返つて薄鐵板に張り付けた廣告を無感覺に讀んでゐた。其處にはあらゆる色の廣告があつた。一つの小さい、綺麗な青色をした廣告は、失くなつた一匹の牝猫の爲めに五十フランの報酬を遣ると書いてあつた。大切にされる動物もあればあるもんだ！

チェルズエズは再びのろ／＼歩き出した。暗く煙つたやうな霧の中で、瓦斯燈は點されて行つた。そして次第々々に溺れて行つて暗くなつたこれ等の長い並樹路は、再びぱつと明るく照らし出されて、地平線の盡きる暗らがり迄もと、なほも長くなつて夜を割つて見せてゐた。大きな辻風は吹き

過ぎた、廣くなつた四邊は廣大なそして月のない空の下で小さな火焰の帯を列ねてゐた。丁度並樹街街の一端から他端まで、酒場々々や、踊り場等が、一齊に、最初の獻杯と最初の亂舞との喧囂のうち陽氣に照らし出される時だつた。二週間目の大勘定日は鋪道を大浮かれて飲み食ひしようとする人間共のごつた返して一杯にした。空中には酒宴の氣分が漂つてゐた、素敵な遊樂の、けれどまだおとなしい、ほんのり顔を染める位の、それ以上何んでもない。方々の飲食店の奥ではみんながかつ込んでゐた。何處の明るい硝子窓からも、笑ひながら苦もなく嘸み込んで、口一杯に頬張り込んで、食事をしてゐる人々が見られた。酒場々々では、酔漢がもう陣取つて、我鳴つたり身振りをしたりしてゐた。そして鋪道の上の不斷の足音の中で、金切り聲や胴間聲の、恐ろしい騒音が高まつて行つた。(おい／＼！ お前も引つかけに來たのか？ ……やア、大將！ 一杯おごらうか？ ……おや！ ポオリイヌがあるぜ！ ほんとに！ へん、笑はせるねえ！) 入口の戸をばた／＼させるたんびに酒の臭いと喇叭の音とを外部へ放つてゐた。大彌撒の爲めの寺院のやうに輝いたコロンプ爺さんのアソンモアルの前にはかうした連中が珠數つなかりになつてゐた。そして、神かけて！ 本當にお祭だと云ひ得たらう、なぜなれば家の中ちや唱歌隊の歌ひ手のやうな顔付をして、頬を膨らまし、太鼓腹を叩いて呑氣な仲間が歌つてゐたから。彼等は聖なる勘定日を祝つてゐた、全く！ ほんとに嘖すべき聖日、それは極樂へ財布を抵當にすべき日なのだ。たゞ、小さな歳入生活者等の

みは、彼等の妻を連れて散歩に出て、この夜の陽気さを見て、頭を振りながら、今晚は、巴里ではとてつもない大勢の酔つ拂ひ共が出来る事だらうと繰り返してゐた。そして夜は、この喧囂の上の方で、死んだやうに凍つて、非常に暗く、たゞ天の四邊迄も達するかと思はれる並木街々の燈の焰が輝いてゐた。

アソンモアルの前に釘付けにされて、ヂェルゼエズは思に耽つた。若しも彼女が二スウ持つてゐたらば、きつと一杯引つかけに入つたらうに。多分一杯の酒は彼女の飢ゑを一時堰止めてくれたらう。あゝ！ 彼女は嘗て幾度も飲んだ！ 酒は何れにしても彼女にいゝものに思はれた。そして、遠くの方から、彼女は自分の不幸は其處から來た事を感じながら、酔漢製造機に見入つてゐた。だが戦慄はうになつたら、ブランドーで命を終る事を夢想しながら、醉漢製造機に見入つてゐた。だが戦慄は彼女の頭の中を通り過ぎた、彼女は夜が眞つ暗なのを見た。さア、時は來てゐた。それは若しも彼女がみんなの歡喜の間にあつてひとり死んでしまはうと思はなかつたなら、元氣を出してしなを作つて見せる時なのだ。他人が鱈腹食べてゐる處を幾ら見てゐたからつて、明かに自分の腹の足しにはなりはしない。彼女は再び歩をゆるめて、自分の廻りを見た。樹々の下により濃くなつた一つの影を曳いてゐた。人通りは少くなつてゐた、急いでゐる人々は、すん／＼並木街を横切つて行つた。そして、近所の車道から來る陽気さを殺してゐる、薄暗いそして寂しいこの廣い鋪道の上で、數人

の女は、突つ立つて、待つてゐた。彼女等は長い間不動のまま、ちつと我慢して、瘦せ細つた小さなすゞかけの木のやうに硬張つてゐた。次いで、徐かに、彼女等は動き出し、彼女等の破れ靴を氷つた土の上に曳きすり、十歩許り行つてそして又大地に糊付けになつて、立すどまつた。一人の女は非常に大きな體に、蟲のやうな脚と腰をして、黒い絹の襪襦を着て、張り裂けさうな、そしてころ／＼轉がりさうな恰好をして、頭には黄ろい薄絹を冠つてゐた。外の一人の女は、脊が高く、干乾らびて、帽子も冠らず、女中の前掛をしてゐた。その外なほ、白粉を塗りこくつた婆さん共、非常に汚ない、實に汚ない、痛ましい、屑屋だつて拾つて行きさうもないやうな若い女共もゐた。ヂェルゼエズは、けれども、知らなかつた、彼女等のやうにして、一生懸命習得しようとした。小娘のやうな或る感激が、彼女の喉を絞めつけた。彼女は自分が恥しい事をしてゐたからつて、感じはしなかつた、彼女は或る穢はしい夢を見ながら行動してゐた。十五分間許り、彼女は棒立ちになつてゐた。男共は過ぎ去つた、頭も振り向けずに。で、彼女は勇氣を振り起して、兩手をポケットに入れて口笛を吹きながら行く、一人の男に構はず近寄り、そして喉を縊られるやうな聲をして啼いた。

——もし／＼、旦那……

男は彼女の顔を横から見て、そして更に高く口笛を吹きながら行つてしまつた。

ヂェルゼエズは大膽になつた。そして彼女はこの客を漁ることの辛酸の中で我を忘れ、腹は脹ぐられるが如く、常に逃げて行つてしまふ彼女の食事のあとを夢中になつて追つかけて廻つた。長い事、彼女は時間も道も覺えずに、歩いた。彼女の廻りでは、押し黙つた、そして黒い女共が、樹々の下で、檻の中の動物のやうな規則正しい往還で、彼女等の歩行を限つて、うろついてゐた。彼女等は幽霊のやうなふら／＼した足取りで、暗がりから出て行つた。彼女等は瓦斯が急にぱつと輝いてゐる處を通つた、と其處では彼女等の灰白な顔がはつきりさらされた。で彼女等は再び闇に吸ひ込まれて、彼女等の短裳の白い布片をひらめかしながら、暗い寒い舗道の中へ消えて行くのであつた。中には引き留められるまゝに立ち停る男共もあつた、彼等は冗談を云つて話しかけ、そしてからかひながら再び去つて行つた。又悪心深く、顔をかくして、一人の女の十歩許り後ろへ來ると、遠ざかつてしまふ男共もあつた。其處では大きな囁き合ひ、聲を殺した云ひ合ひ、激しい争ひが行はれた、そしてそれが忽ちにして大きな沈黙に返つた。でヂェルゼエズは、奥へ行けば行く程、場末の並樹街々の一端から他端迄、かうして女共が突つ立つてゐて、夜に紛れて女の哨兵線が張つてあるのを見た。常に、二十歩毎に一人、又一人と彼女はそれを見出してゐた。さうした女は、果てしがなく列んで、巴里全體が警固されてゐるやうであつた。彼女は、侮蔑を感じて、憤激し、河岸を變へて、今度はクリギヤンクウルの中央道からシャペルの大通り迄行つて見た。

——もし／＼、旦那……

然し男共は行つてしまつた。彼女はその血なまぐさい臭ひのする屠殺場から出かけた。彼女は鎖されてそしてひつ傾がった、昔のパンクウル・ホテルに一瞥を與へた。彼女はラリボアジェエル病院の前を通つた、側面に沿うて、蒼白いそして靜かな光で、臨終の有明のやうに明りのともつてゐる、輝く窓々を機械的に數へもした。彼女はその汽笛の絶望的な叫び聲で空氣を怒鳴り付けて引き裂きながら走つて行く、列車の動揺の中を、鐵道の橋を横切つた。おゝ！ 何んだつて夜はかうも悲しい物ばかりを見せるのだ！ 次いで、彼女は踵を返した、彼女の眼は同じ家々を、並樹路のこの一端にいつも似た隘路を見させられた、そしてそれを十たびも二十たびも繰り返した、たゆみなく、たつた一分間ベンチに休息する事もせず。いや、何人も彼女を欲してゐなかつた。彼女の汚辱はこの侮蔑によつて益々大きくされたやうに思はれた。彼女はなほも病院の方へ、再び屠殺場の方へと登つて行つた。それが屠殺した血の流れる中庭から、死がすべての者の敷布の中で人々を硬張らせてゐる所の灰白い病室への、彼女の最後の逍遙だつたのだ。彼女の人生は其處にこびりついてゐた。

——もし／＼、旦那……

と、急に、彼女は自分の影法師を地べたに認めた。彼女が瓦斯燈に近寄つた時には、ぼんやりし

た影は收縮してそしてはつきりして来た、大きな、短い、まん丸い變手古な影だ。かうして腹も、喉も、腰も、流れて一しよくたになつて映つてゐた。彼女は片脚をひどく傾げてゐた、影法師は歩きたびに跛を引いて見せた。

ほんとに操り人形のやうだつた！ それから、彼女が瓦斯燈から遠ざかると、この操り人形は成長し、巨人のやうになつて、その鼻を樹や家に打つ付けて壊はしはしないかと思はれる程お辭儀をしたがら、並樹街一杯になつて行つた。畜生！ 何んておどけたそして恐ろしい恰好だ！ 曾て彼女はこのやうによく自分の不恰好さが呑み込めた事がなかつた。で、彼女は瓦斯燈の處へ來るのを待つて、自分の影法師の亂舞に眼を遣りながら、それを見つめずにはゐられなかつた。あゝ！ 彼女は自分の側を歩いてる結構な夜鷹を其處へ連れてゐた！ 何んてさまだ！ これちや男共を直ぐに牽き付ける筈だよ。で彼女は聲を落して、もう敢て通行人の背中の處で蚊の泣くやうな聲でしか云はなかつた、

——もしく、旦那……

けれども、夜はもう非常にふけてゐた。この方面ぢや、旨く行かなかつた。飲食店では戸を鎖し、酒場々々の瓦斯は赤くなつて、其處からは醉漢の呂律の廻らなくなつた聲が漏れて來てゐた。冗談は喧嘩に、なぐりあひにと變つて行つてゐた。一人の脊の高い顔色憔悴した男は猛り出した、(叩き

つ潰ぶすぞ、手前の骨の勘定でもして置きやがれ！) 一人の娘は踊り場の門口で、相手を意地むさ野郎だの病み豚だのと罵りながら、彼女の情人と掴み合ひをしてゐた、一方男の方は外に術もなく、(手前の姉妹を見ろ！)と繰り返してゐた。酔つ拂つた者は外へ出て、果たし合ひを、何か兇猛な事をしたくてたまらないと云つた風で風に吹かれて見てゐた、でだんく少くなつた通行人の顔には蒼白いそして痙攣したやうな色がたゞよつてゐた。格闘は始まつた、一人の酔ひどれは手足を空中に泳がせて、なぐり飛ばされた、と彼の仲間は、遣つ付けてしまつたものと思ひ込んで、その大きな靴をかたく云はせて逃げて行つた。だみ聲張り上げて汚ない唄を歌つて行く幾群かどあつた、と大きな沈黙に歸つて、それが時々かすかに聞える醉漢等のしやつくりや轉ける音で中斷された。二週間目の遊樂はいつもかうして終りを告げるのであつた、酒は六時からと云ふものかう迄も流されて、舗道々々にかくも溢れるのだつた。おゝ！ 結構な行列だ、舗道の眞つたど中へ擴げられた狐の尻尾だ、遅くなつたそして上品な人達は、それに衝き當るまいとしたら、大膽に歩かなければならなかつた！ 全く！ 四邊のきたなさつたらなかつた！ 外國人が、朝の掃除前に來てそれを見たら、彼はどんな考へを持つて歸る事だらう。だが、この時間が、醉等の天下だつた、彼等は歐羅巴なんか糞でも喰らへだつた。神かけて！ ナイフはポケットから出、小さな祝宴は血の中に終りを告げてゐた。女共は急ぎ足に通リ、男共は狼のやうな眼をしてうろついてゐた、夜が更ける

に従つて、恐ろしい事共が多く起つた。

ヂェルエエズは常に歩いてゐた。跛を曳きながら、絶えず歩く事をのみ考へて、登り返したり降り返したりして。睡む氣は屢々彼女を襲うた、彼女は自分の跛の片脚で揺られてゐるやうな心持で、眠りこけた。次いで、彼女は飛び上つて自分の廻りを見廻した、と死んだやうになつて、知らず識らずに百歩許り歩いてゐた事が分つた。立つたまゝ眠るやうになつた彼女の足は、その穴の明いた古る靴の中で大きくなつてしまつてゐた。彼女はもう自分の體が分らなかつた、それ程彼女は疲れ果て、空つぽになつてしまつた。彼女の心を占領した最後の明確な考へは、彼女の淫賣娘は、この同じ瞬間に、多分は牡蠣を食べてゐるのだと云ふ事であつた。次いで、一切が曖昧になつてしまつた。彼女は眼を開いたまゝでゐた、だが考へる爲めには彼女には餘りに大きな努力を要してゐた。彼女の存在の寂滅に歸せんとしてゐる間にあつて、彼女のうちにこびり付いてゐたただ一つの感覺は、飛び切り寒い、彼女が曾て感受した事がないやうな、鋭利な、そして致命的な寒さの感覺だけだつた。實際全く、死人だつて地の中でかうも寒くはなかつたらう。彼女は重たげに頭をもたげた、彼女は顔に氷の鞭打を受けた。それは煙つたい空からとうとう落ちて來た雪だつた、軽い旋風もたらす細かい、濃密な雪だつた。三日このかた、人々はそれを豫期してゐた。彼女はわるい時に出つくわしたもんだ。

で、この最初の吹雪で、眼を醒ましてしまつたヂェルエエズは、足を早めて歩いた。男共は駈け出し、既に兩肩を白くして、急いで歸つて行つた。そして、彼女はそのうちの一人がのろ／＼と樹の下を遣つて來るのを見たので、近寄つて行つて、又云つた、

——もし／＼、旦那……

男は立ち止つてしまつた。然し彼は聞いてゐる様子ではなかつた。彼は手を差し出して、低い聲で呟いた。

——どうぞ、御慈悲にお助けを……

彼等は顔を見合つた。あゝ！ 神様！ 彼等は其處で落ち合つたのだ、乞食のブルエ爺さんと、辻君のクウボオのかみさんとが！ 彼等は面と向ひ合つて開いた口が塞がらなかつた。この時間に、彼等は手を握り合つたのだ。宵のうち中、老職工はうろついてゐた、が誰も敢て立ち止つてはくれなかつた。そして彼が引き止めた最初の人は、彼女のやうな半死半生の飢ゑた女だつた。天なる神様！ これが哀れでないでせうか？ 五十年間働きました、そして今は乞食です！ 彼女の方はグウト・ドル街での一番働き手の洗濯女の一人と云はれてゐた、が今や泥溝の縁で野垂れ死にしようとしてゐる！ 彼等は矢張り顔を見合せてゐた。それから、一と言も言葉を交はさないで、彼等は彼等を鞭打つてゐる雪の下を、銘々は銘々の方角へ別れて行つた。

本當の吹雪になつて來た。この邊の高臺では、かうして廣々と開けた場所の眞ん中では、粉雪は旋風に煽られて、天の四邊から一時に吹き送られて來るやうだつた。十歩先きは見えなかつた、一切がこの飛翔する埃の中に溺れてしまつてゐた。四邊の建物は姿を消してしまつた、並樹街は死んだやうになつた、まるで吹雪が遣つて來て最後の醉漢のしやつくりの上に、その白い敷布の沈黙をかぶせてしまつたやうであつた。ヂェルゼエズは、難澁しながら、常に歩いてゐた、眼は見えなくなり、方向は失つてしまつて。彼女は自分が何處にゐるかを知らぬ爲めに樹々に觸つて見た。彼女が前進するに従つて、瓦斯燈にはたゞ蒼白い空氣を放なつてゐるばかりで、消された炬火のやうだつた。次いで、彼女が十字街を横切ると、かうした微光そのものも失くなつた。彼女は灰白い旋風の重圍に陥つて、くるくゝ廻らされて、彼女を導いてくれる何物をも見分けられなくなつてしまつた。彼女の下は、茫漠と白くなつて、土は逃げ去つてしまつた。灰色の圍壁は彼女を閉ぢめてしまつた。そして、ためらひながら、頭を廻らして、彼女が立ち停つた時に、彼女はこの氷のゴールの後ろに、並樹路のひろがり、限りもない瓦斯燈の列、眠りこけた巴里の暗い、そして寂しいこの無限さの一切がある事を思つて見た。

彼女は場末の並樹街とマヂェンタ及びオルナノの並樹街との落合ふ地點に立つてゐた、夢のやうにして地上に寢込んでしまはうとしてゐた時、彼女はふと足音を聞きつけた。彼女は駈け寄つた、

だが雪は彼女の兩眼をふさいでしまつた。そしてそれが右に左に互ひ違ひに歩いてゐるやうに彼女は彼を捕まへる事が出來ないうちに、足音は遠ざかつて行つた。とう／＼彼女は一人の男の廣い兩肩を認めた、薄暗いそして跳つてゐる一點は、霧の奥へ突き進んで行つた。あゝ！ 彼女の方では彼を欲してゐたのだ、彼を放すのではなかつた！ で彼女は更にひどく駈けた、彼女は彼に追ひつき、彼の職工着を掴んだ。

——もし／＼、もし／＼、旦那……

男は振り返つた。それはグウヂェーであつた。

とう／＼彼女はグユウル・ドルを其處で引つかけたのだ、今度は！ 然しかくも最後迄苦めらるゝと云ふは、彼女は一たい前世で何をして來たと云ふんだ？ それは最後の打撃だつた、鍛冶工の足許に身を投げ、彼からは、蒼白い顔をして袖に取り付くパリエルの白首と同一に見下げ果てられると云ふは。そしてそれは瓦斯燈の下で起つた出來事なのだ、彼女はまるで本當のカリカチュアーのやうな、雪の上でふざけ散らして歩いてゐると云つたやうな自分の怪しげな影を見て取つた、酔つ拂つた女と云はれても仕様がなかつた。神かけて！ 一とかけのパンも食はず、體の中には一滴の酒もなくてゐて、それで酔つ拂つた女と取られる！ それも彼女のせゐだつた、ぢやなぜ彼女は平常飲んだくれてゐたんだ？ 勿論、グウヂェーは彼女は飲んだもの、そして穢はしい樂をしてゐるものと信じた。

グウヂェーは、けれども、彼女を見つめてゐた、その間雪は彼の美しい黄ろい髯の中へ雛菊の花を散らしてゐた。それから、彼女は頭を垂れて退いて行つたので、彼は彼女を引き止めた。

——おいでよ、彼は云つた。

そして彼は先に進んだ。彼女は彼につどいた。彼等が沈黙の街を横切つて、音もなく壁に沿うて去つて行つた。可哀さうなグウヂェーのかみさんは十月の月に、ひどいレウマチスで、死んでしまつた。グウヂェーは陰気にそして一人で、ヌウヴ街の小さな家につどいて住んでゐた。この日は、負傷した一人の仲間を看病してゐて遅くなつたのだつた。彼は戸を開けてランプを點けると、卑下して階段の板の上に残つてゐるヂェルエズの方を振り返つた。彼は非常に低く云つた、まるで彼の母親がまだそれを聞いてゐるかのやうに。

——お入り。

最初の部屋なる、グウヂェーのかみさんの部屋は、彼女が残して行つたまゝの状態に敬虔に保存されてゐた。窓に近い、一つの椅子の上に、年取つたレース女工を待つてゐるやうな大きな脇掛椅子と並んで、レースの框は置かれてあつた。ベッドはしつらへられて、彼女が墓を脱け出で、宵には彼女の息子と一緒に過ごす爲めに遣つて來でもするものゝ如く、其處で寝られるやうになつてゐた。部屋には何んとなく心を籠めたものがあつた、正直と善良との臭ひがしてゐた。

——お入り、より高く鍛冶工は繰り返した。

彼女は恐れながら、敬虔なる場所へ逃げ込みでもする小娘のやうな風をして、入つた。彼はと云へば、かうして彼の死んだ母の家へ一人の女を導き入れるので、眞つ蒼になつてしまつてぶる／＼震へてゐた。彼等は足音を殺して、まるで聞き付けられる恥辱を避けでもするものゝやうにして、部屋を横切つた。次いで彼はヂェルエズを彼の部屋の中へ押し進めると、戸を鎖してしまつた。其處で彼はやつと落着いた。それは彼女の知つてゐる狭い物置だつた、白い幕を装へ付けた鐵の小さなベッドのある、寢部屋だつた。壁には、たゞ、切り抜いた繪が未だに陳列されてゐて、天井に迄もとどいてゐた。ヂェルエズは、この純潔さの中へは、敢て進み入らないで、ランプから遠のいて、身を退いてゐた。その時、一言もなく、憤怒に捉はれて、彼は彼女を取り押へて、彼の兩腕の間で押しつぶしてしまはうとした。彼女は氣が遠くなつてゐた、彼女は呟いた、

——おゝ！ 神様！……おゝ！ 神様！……

煖爐はコークスの埃で覆はれて、まだ燃えてゐた、そしてシチウの残りは、歸つて來るつもりで、鍛冶工が煖めたまゝで置いて行つたので、煖爐の灰皿の前で煙つてゐた。ヂェルエズは、非常の暖かさで知覺を失つたのを恢復して、小土鍋の中のものをおふ爲めに四つん這ひになつてしまひさうだつた。彼女よりかもつとひどかつた、その彼女の胃の腑は破裂しさうだつた、で彼女に溜息と

共に、體を屈めた。然しグウヂューは分つてゐた。彼はシチウを卓子の上に置き、パンを切つて、彼女に杯を差した。

——有難う！ 有難う！ 彼女は云つた。おゝ！ 何んてお前さんは親切だらう！ 有難う！

彼女は吃つて云つた、彼女はもう言葉を正確に發することが出来なかつた。彼女はフォークを握んだ時、それを再び落してしまつた位ひどく震へてゐた。彼女を絞め付けてゐる飢餓は彼女をして老衰病者のやうに頭を揺らせてゐた。彼女は指で掴まなきやならなかつた。口へ突つ込んだ最初の馬鈴薯で、彼女はわつと泣き出してしまつた。大粒の涙は彼女の兩頬を傳うて流れ、彼女のパンの上へ落ちた。彼女は依然食べてゐた、彼女は自分の涙で濡れた彼女のパンをがっ／＼食ひ食つてゐた、ひどい息使ひをして、腮を痙攣させながら。グウヂューは、息切れがしないようにと、彼女に無理に酒を飲ませた。と、彼女のコップは彼女の齒に當つてかち／＼音を立てた。

——お前さんもつとパンを遣らうか？ 彼は中聲で訊いた。

彼女は泣いてゐた、彼女はいえと云はなかつた、はいと云つた、彼女はもう分別がなかつた。ああ！ 神様！ 野垂れ死（野垂れ死）をしようとしてゐる時、食ひ物に有り付くとは何んていゝ、そして悲しい事だらう！

で彼の方は、彼女の前に突つ立つて、考へ深く彼女を見つめた。今や、彼は彼女を、照返しのみ

明るい光線の下で、よく見る事が出来た。何んて彼女は歳を取つて寒れ果てた事だ！ 暖氣は彼女の髪の毛の上や着物の上の雪を溶かしてゐた、彼女は小川のやうに滴を流してゐた。彼女の揺れてゐる可哀さうな頭は丸つきり灰色になつてゐた、風が吹き散らした捲き毛は灰色をしてゐた、そして肩の間に埋まり込んだ猪首をして、それを見ると泣き出したくなる程醜く、そして不恰好に肥つて、彼女は縮こまつてゐた。で彼は彼等の戀を想ひ返した、その時分には彼女はすつかり桃色をしてゐて、彼女のアイロンを叩き立てながら、彼女の首へ實に美しい輪を拵へてゐる赤兒のやうな皺を寄せたのであつた。彼はその頃には、彼女を見てゐるのが嬉しくて、幾時間でも彼女を偷み視してゐたのであつた。あとでは、彼女の方から鍛冶場へ来るやうになつた、そして其處で彼等は、彼が彼の鐵の上を打ち、そして彼女は彼の鐵槌の踊る中に居残つてゐる間中、非常な享樂を味つてゐた。その時、彼は幾たび彼の枕を嚙んで悶えた事だつたらう、夜、このやうにして彼の部屋に彼女を引き留めて置きたいと願つて！ おゝ！ 若しも彼が彼女を抱いたならば、彼は彼女を抱きつぶしてしまつたかも知れなかつた、それ程彼は彼女を欲してゐたのだ！ そしてその頃には、彼女の心は彼に行つてゐた、彼は今彼女を自分のものにする事が出来たのだつた。彼女は彼女のパンを食べ終つた、彼女は小鍋の底に落ちつゝあつた自分の涙をそのまゝその底へてすりすりつけてゐた、物を云はないその大粒の涙は、矢張り彼女の食物の中へ落ちてゐた。

ヂェルゴエズは起ち上つた。彼女はもう食事は済ましてしまつたのだ。彼女は頭を垂れて、彼が果して彼女を要求してゐるのがどうかと分らないで、迷つて、暫くはとどまつた。次いで、彼の眼の中が焼け付くやうに燃えてゐるのを見て取つて、彼女は彼女の袖付短衣に手をかけて、最初の鈕をはづした。とグウヂェーは跪づいてしまつて、彼女の手を取り、やさしく云つた、

——己はお前さんを愛してゐるんだ、ヂェルゴエズのおかみさん、おゝ！ 己はお前さんを今も愛してるよ、そりやどんな事があつたからつて、己はお前さんにそれを誓ふ！

——そんな事を云つちやいけないよ、グウヂェーさん！ 彼女は叫んだ、このやうにして自分の足許にゐる彼を見て狂氣の如くになつて。いえ、そんな事を云つちやいけないよ、お前さんは私を餘りに苦しくさせる！

そして彼が自分は自分の生涯に於て二つの戀をする事は出来ないのだと繰り返してゐるので、彼女は益々深くその身を苦しめた

——いえ、いえ、私やもうそんな事は思つてない、私や餘りに恥しい事をしてる……神様を愛するが爲めに！ 起きて下さい。土の上で生きてるのが、それが私の境遇なんだ。

彼は再び起ち上つた、彼は體中身慄ひしてゐた、そして呟くやうな聲で云つた、

——お前さんは己に接吻を許してくれるだらうか？

彼女は、驚愕と感激とで自失して、物も云へなかつた。彼女は頭を振つてうなづいた。神かけて！ 彼女は彼の心次第だつた、彼は彼女を自分の好き勝手にする事が出来た。然し彼はたゞ唇を差し延べただけだつた。

——己達の間ぢやこれで澤山だ、ヂェルゴエズのおかみさん、彼は囁いた。これが己達の全部の友情だよね？

彼は彼女の額を、彼女の灰色の髪の毛を接吻した。彼は彼の母が死んでからこの方は、何人をも接吻しなかつた。彼の仲よしの友達のヂェルゴエズだけが、彼には生きて残されたのだ。で、彼は彼女をそれ程迄に敬虔な態度を持って接吻すると、退いて彼のベッドの上に横に倒れ伏して、喉は歎歎の聲で絞め付けられさうだつた。そしてヂェルゴエズは其處にそれ以上とどまれなかつた。人はかうした境遇の下に愛人と再び相逢ふことは餘りに悲しく、そして餘りに呪はしいものであつた。彼女は彼に叫んだ、

——私やお前さんを愛してる、グウヂェーさん、私はどんなにお前さん愛してゐたが……おゝ！ そんな事が出来る事だらうか、私や分つてる……左様なら、左様なら、もしかそんな事したら私達や二人ながら息が詰まつて死んでしまふかもしれない。

そして彼女は走りながらグウヂェーのかみさんの部屋を横切つた、彼女は再び舗道の上に自らを

見出した。彼女が我に返つた時には、グウト・ドル街へ来てベルを鳴らしてゐた、ボッシュは紐を引いた。貸家は眞つ暗だつた。彼女は自分の墓の中へ入りでもするやうに感じながら、その中へ入つて行つた。夜のこの時間には、玄關は欠伸をし、そして荒涼としてゐて、大きく開いた怪獸の口のやうだつた。昔彼女はマッチ箱のやうな部屋の澤山あるこの屋臺骨やたいぼねの一隅に、野心を懐いたこともあつたのか！ 彼女の耳は丁度栓をされてしまつたやうになつてゐた、彼女はこの時代には四壁の後ろで呻いてゐる絶望の音楽は耳へは入らなかつたのだ！ 彼女は其處へ足を踏み入れたその日から降り阪に身を處してゐたのだつた。さうだ、このやうな大きな労働者許りがゐる瓦樂多家いづかの中に、互にかうして住んでゐたならほんとに不幸を齎すやうになる筈だつた。彼等は貧乏のコレラ菌にだつて其處では侵されもしたらう。その晩には、すべての者が死んでもゐるやうだつた。彼女はたゞボッシュの軀聲を左手に聞いたただけだつた。その間ランティエーとギルヂニイは、左手で、目を瞑つて、眠らないでそして暖まつてゐる猫のやうにして、喉をごろ／＼鳴らしてゐた。中庭へ出ると、彼女は本當の墓場の眞ん中にあるやうな思ひがした。雪は地上に蒼白い石壘を作つてゐた。高い各側面は、廢墟のやうに、一つの明りもなく、鈍い灰色をして高まつてゐた。又一つの嘆息の聲もなかつた、寒さと飢ゑとで硬張つて一村中が埋葬されてしまひでもしたやうだつた。彼女は黒い溝を跨がなければならなかつた、染物屋から出てその溝を流れる泥水は眞つ白な雪の中で水蒸氣を出した。それは彼

女の心持に似た色のついた水だつた。曾てはその流れは、柔かい青や柔かい桃色の美しい水だつたのに！

それから、七階へ登つて行きながら、暗がりの中で、彼女は笑ふのを禁じ得なかつた。尾籠な笑ひだつた、それは彼女を病氣にしまひさうな笑ひだつた。彼女は昔のその理想を想ひ起した。平和に働いて、いつもパンを食つて、眠る爲めに少しばかり綺麗な巢を持つて、彼女の子供等をよく育て、なぐられないで、自分のベッドで死ぬ。——今にして思へば喜劇だつた、さうして彼女はどんなにそれを實現したらう！ 彼女はもう動かなかつた、彼女はもう食ふ事が出来なかつた、彼女は汚物の上で寝てゐた、彼女の娘は夜怪しげな場所に出没してゐた、彼女はその夫に始終叩かれてゐた。彼女は舗道の上で死ぬ事しか残つてゐなかつた、そしてそれも、若しも彼女が自分の家へ歸り着くや、窓から身を投げる勇氣さへあつたら、今直ぐにでも出来た。彼女が三萬フランの年收と恩寵とを天に向つて要求した女だとは思はないだらうか？ あゝ！ 實際、かうした生活にあつては、謙遜は無駄だ、人間が乾干しになつてしまふだけの事だ。餌も巢もあつたもんぢやありやしない、それが共通の運命なのだ。で彼女の邪惡な笑ひを益々高めてゐたと云ふは、それは二十年アイロンをかけて暮らした後には、田舎へ引つ込まうと云ふ彼女の美しい希望を想ひ出してゐたからだつた。彼女はベエル・ラシエズに芝生のある一隅の土地を欲してゐた。

彼女が廊下に出た時には、狂女のやうだつた。彼女の可哀さうな頭の中は渦を巻いてゐた。心の底の、彼女の大きな憂悶は鍛冶工に永久の左様ならを云つて來た事であつた。それで彼等の間はおしまひになつたのだ、彼とは再び決して相見る事はないであらう。次いで、階上で、すべての他の不幸に關する考へが起つて來て、彼女の頭の鉢を割つてしまひさうだつた。通りすがりに、彼女はビヂャル等の處へ鼻を突つ込んだ、彼女はラリイの死姿に目をつけた、倒れたのを満足さうに、永遠のねむりについてゐたのであつた。あゝ全く！ 子供の方が大人よりは仕合せだつた！ で、バヅウヂユ爺さんの戸口から光線の縞が流れ出したので、彼女は子供と同じ旅路に發たうと云ふ變つた氣持に囚はれて、彼の處へ眞つ直ぐに入つて行つた。

バヅウヂユ爺さんは、その晩、突拍子もなく景氣がよかつた。彼は飲んだくれてしまつて、この嵐にも拘らず、床の上に打つ倒れて躰をかいてゐた。そしてそれも勿論彼にいゝ夢を見させる妨げとはならなかつた、彼は眠りながら、腹で笑つてゐるやうな風だつたのである。蠟燭は、點けつばなしで、彼の襤褸着物や、隅の方が平らべつたくなつてゐる黒い彼の帽子や、夜着の端のやうにして、自分の膝の上へ引つ張つてゐる彼のマントとを照してゐた。

ヂェルエエズは、彼の姿を見て取ると忽ち高い嘆息の聲を發したので彼は眼を醒ましてしまつた。

——冗談ぢやねえ！ 戸を閉めてくれ！ べら棒に寒いぢやねえか！……え！ お前さんか！……

……何んだつてんだい？ お前さん何か用なのかい？

その時、ヂェルエエズは腕を差し出して、もう自分が呟いてる事が分らなくなつて、激して彼に哀願し出した。

——おゝ！ 私を連れてつとくれ、私やもう澤山だ、私や行つてしまひたい……私を怨んでお呉れでない。私にやもう分らなくなつてしまつた、あゝ神様！ 用意が出来ないうちは、人間つて決して分らないもんだ……おゝ！ さうだ、みんないつかは満足して其處へ行くんだ！……私を連れてつとくれ、私を連れてつとくれ、私やお前さんに有難うを云ふだらうよ！

そして彼女は彼女を眞つ蒼にさせる一つの願ひで體中を揺り動かして、跪びてしまつた。曾て彼女はこのやうに一人の男の足下に轉び廻はつた事がなかつた。歪んだその口と埋葬の埃で垢だらけた皮膚をした、バヅウヂユ爺さんのしやつ面が、彼女には美しくそして太陽のやうに光輝を放つて見えた。けれども、爺さんは、よく目を醒まし切らないで、何か悪るさの狂言だと思ひ込んだ。

——もしく、彼は呟いた。そんな事をおれにしちやいけねえ！

——私を連れてつとくれ、更に熱心にヂェルエエズは繰り返した。お前さん覚えてるだらう、いつかの晩、私や境の仕切りを叩いたらう。それから、私や本氣ぢやなかつたんだつて云つた、何故つて私やまだその時にや馬鹿過ぎたんだ……まア、お聞き！ お前さんの手をおくれ、私やもう恐く

ないんだ！ 私を連れてつてねかしておくれ、私がこれ程興奮してるのがお前さんにもお分りだらう……おー！ 私やその望みしか持つてない、おー！ 私や屹度お前さんが好きになるよ！

バツウヂユは、相變らず色男振つて、自分にこれ程甘つたれた様子をしてる女を押し倒したりなんかしちやならないと考へた。彼女は取り亂してゐた、が、どつちにしたつて美しい處が澤山残つてゐた、わけて興奮してゐる際には。

——お前さんの云ふ事ア全く本當だ、彼は合點だと云つた様子で云つた。おれや又今日、三人送り出してやつた、若しあの女共が財布の紐をゆるめることが出来たとすると、おれに餘つ程酒手を寄越したことだらうよ……たゞ、私の小母ちゃん、物事アさう旨くは行かねえのさ……

——私を連れてつとくれ、私を連れてつとくれ、相變らずヂェルエズは叫んでゐた。私や行つてしまひたいんだ……

——成る程な！ だがその前に一寸した手術が要るんだ……ねえお前さん、ぐう／＼つて奴が！
そして彼は喉へ力を入れて見せた、丁度自分の言葉を嚙み込みでもするやうにして。次いで、旨い冗談口を考へついで、彼は嘲笑した。

ヂェルエズは徐かに再び起ち上つた。彼は彼女に對して、それ以上には何んにも出来なかつたと云ふのか？ 彼女は自分の部屋へ歸つた、ぼんやりして、そして彼女の藁床の上に身を投げて、食

事をした事を後悔してゐた。あー！ いや、全く、貧乏つてもものはそれ程早速には人を殺さないものだった。

十三

その晩、クウボオは飲んだ。翌日、ヂェルエズは鐵道の機關手になつてゐる彼女の息子のエテ・イエンヌから、十フラン受け取つた。子供は家が裕でない事を知つてゐて、時折五フラン十フランと彼女に仕送りをしてゐた。彼女は羹汁を拵へてたつた一人でそれを食べた、やくざなクウボオはその翌日になつても、歸つて來なかつた。月曜も留守、火曜日もなほ留守、まる一週間は過ぎた。ああ！ 糞でも喰らへだ！ 若しか何處かの女が彼を掴まんで行つたといふなら、それこそもつつけの幸ひだった。だが、丁度日曜になると、ヂェルエズは一つの封書を受取つたので、初めは怖れを懐いた、若しかひよつと警察からの書面だつたかも知れなかつたから。次いで、彼女は安心した、それはたゞ單に彼女の豚奴がセント・アヌで死にかゝつてる事を彼女に知らせてあるだけだつた。書面には非常に丁寧に認めてあつた。唯どつちにしたつて一つ事だつた。さうだ、ほんとに何處かの女がクウボオを拾ひ上げたのだつた、そしてこの酔ひどれの最後の仲よしの女友達なるこの女は、ソフキ・ツウルヌ・ド・ルイユ(原名を隠せ)と名を呼んでゐた。

要するに、ヂェルゴエズは吃驚りもしなかつた。彼は道を知つてゐた、彼はひとりきりだつて勿論養育院から歸つて來られるんだ。其處では幾度となく彼を癒してやつた、彼等は今一度彼を自分の足の上に据ゑ直してやらうと云ふ悪い洒落をしてゐるんだ。彼女は八日の間クウボオが、毬のやうになつて、メ・ポットと相棒で、ベルギールの酒場々々をうろつき廻つてゐる處を見たと言ふ話を、その朝聞かなかつたとしても云ふ事か！ すつかりその通りだつた、支拂ひをしてゐたのはメ・ポットであつた。彼は先刻御承知の旨い仕事で稼いでどつさり貯め込んで彼のおかみさんの臍繰り金を掻つ攫つて行つたに違ひなかつた。あゝ！ 彼等は其處で、あらゆる種類の病氣にかゝり得るやうな、相當な額を飲んでたのだ！ もつといふ事はクウボオが痲痛でも起してくれればいゝのだつた。でヂェルゴエズはこの二人の我利々々亡者が彼女を連れて行つてたつた一杯だつておどつてやらうと思ひもしなかつた事を考へて、わけて腹を立てた。そんな事は見た事もない！ 一週間も飲みつゞけてゐて、女共とたつた一度もふざけないなんて事は！ ひとりきりで飲んだりなんかすりや、滅入つてしまふ、そりやさうだ！

けれども、月曜日に、ヂェルゴエズは豌豆の残りに小罎一本で、一寸したい、食事をしたので、散歩したら腹こなしになるだらうと云ふ口實を作つた。箆筒の上にある、養育院からの手紙は、彼女をうんざりさせた。雪は溶けてしまつた、そよ／＼と快い空氣の中で底冷えのする、灰色なそして

穩かな、いゝ氣候だつた。彼女は正午に出掛けた、なぜつて道のりは遠かつた。巴里を横切つて行かなければならなかつた、そして彼女の片足はいつも後れ勝ちだつた。おまけに、街々の人混みをこねるのは一と汗だつた。だが人混みは彼女を樂ませてゐた、彼女はゆつくり着いた。彼女は自分の名を名告つた時、身震ひのするやうな話を聞かされた。クウボオはボン・ヌウフで河の中から救ひ上げられたらしいのだ。彼は一人の鬚の生えた男が彼の行く手を塞げてゐるのを見てゐるやうな氣がして、欄干の上から身投げをしたのだつた。大變な一足飛びだ、さうぢやないか？ そしてクウボオがどうしてボン・ヌウフの上なんかに來てゐたかつて事に關しては、彼自身すらが説明出來ない事柄だつた。

兎角して、一人の守衛はヂェルゴエズを案内した。彼女は階段を登つて行つた、その時彼女は骨を刺すやうな怒鳴り聲を聞いた。

——え？ 遺つてるよ、音楽を！ 守衛は云つた。

——まア誰です？ 彼女は訊いた。

——お前さんの亭主ぢやないか！ あの男は一昨日からあゝして怒鳴つてる。さうして踊つてる、まア行つて御覽よ。

あゝ！ 全く實際！ 何んて有様だ！ 彼女は釘付けにされたやうに立ち止つた。分房は上の方

から下の方まで毛蒲團が張つてあつた。床の上には、二つの靴拭席が、重ねてあつた。そして、一方の隅には、一枚の毛蒲團と一つの長枕があつた、それつきり何んにもなかつた。その中で、クウポオは怒鳴つたり踊つたりしてゐた。ぼろ／＼になつた職工服を着て手足で空中を打つてゐる處は、本當にクルテイルの假裝舞踏だつた。が面白可笑しくでもない假裝舞踏だ、おゝ！ いや、その恐ろしい亂舞は體中の毛をよ立たせるやうな假裝舞踏なのだ。彼は今にも死なうとしてゐる人間のやうな行相をしてゐた。あきれた有様だ！ 何んと云ふ一人ぼつちの騎士だ！ 彼は窓を目がけて進み、其處から引き返して退却し、兩腕を差し出し、手を振つて、まるでそれで他人の目には見えない幻の姿を追ひ遣つたり自分の手を挫いてしまはうとしてゐるやうだつた。酒場の踊りでは、かうした眞似をしてゐる道化役者共に出逢ふもんだ。たゞ、彼等はそれを悪く眞似をしてゐるだけであつて、本式に遣つたなら、それがどんなに卓越した技巧を現はすかを判別しようとしたら、酔ひどれ共のこのリゴドン(舞の意)の跳ねくり方こそ見ものなのだ。歌も亦飛び切りだ、絶えない罵聲は、謝肉祭(カルナバル)の如く、大きく開き切つた口からは、噎れた兩管大喇叭のやうな同じ調子を何時間でも放つてゐた。クウポオはと云へば、前足を踏みつぶされた動物のやうな叫び聲をしてゐた。で、オーケストラの前に、見物人諸君は相手の婦人を見つけておくがいゝ！

——あゝア！ まアどうしたつてんだらう？……まアどうしたつてんだらう？……デュルゼエズ

は、恐怖に提へられて繰り返してゐた。

白いエープロンをかけた、プロンドのそして桃色の顔をした大きな一人の助手は、靜かに坐つて、ノートを取つてゐた。症状は珍しかつた、助手は病人を離れなかつた。

——一寸さうして、下さい、よかつたら、彼は女洗濯屋に云つた。が、ぢつとして、下さい……話しかけて御覽なさい、患者はあなたを知らないでせうから。

クウポオは、本當に、自分の女房を見分けられさへしないらしかつた。彼女は入つて行つてもよく彼が見られなかつた、それ程彼はぢつとしてゐなかつた。彼女は彼を下から覗いた時、仰天させられてしまつた。眼は充血し、唇は厚皮が一杯に出來た、このやうな顔を彼がしてゐると云ふ事がまア神かけてあり得ようか？ 彼女の方こそ彼を確かと見覚えられない位だつた。先づ第一に、彼は餘りにいろ／＼なしかめ顔をしてゐた、なぜと云ふ譯もなく、顎は忽ちにしてそつくり返り、鼻は狎がくさめしたやうになり、頬はこけて、本當に獸の面を見るやうであつた。彼は非常に熱い膚をしてゐた、彼の廻りの空氣は湯氣を立てゝゐた。そして彼の皮は漆を塗つたやうに、重い汗の玉がころ／＼落ちて流れてゐた。憤怒したシカール(舞臺用語、中を歩く意)のやうな彼のダンスで、どつち道彼が氣樂で遣つてゐるのでない事は分つた、頭は重たげに、手足は關節など痛々しさに。

デュルゼエズは助手に再び近づいた、彼は椅子の背を指端でたゞきながら調子をとつてゐた。

——もし、あなた、今度は、むづかしいんですか？

助手はそれには答へないで頭を振った。

——もし、あの人は一人つきりで喋舌つてるんですか？ ……え？ あなたにお分りですか、なんて云つてるんです？

——自分の見てゐるものゝ事です、若い男は呟いた。お黙りなさい、私に聞かせて置いて下さい。クウボオは断續する聲で喋舌つてゐた。けれども、冗談口を叩きたいといったやうな焰が彼の眼に輝いて来た。彼は床の上を、右を左と見廻し、そして轉廻し、丁度、一人つきりで話をしながら、ブンセンヌの森でぶら／＼歩きでもしてゐるやうであつた。

——あゝ！ さうだよ、いゝね、素敵だ……掘立て小屋があらア、本當に市場だな。さうして音楽はちつとばかり旨えぞ！ なんて祭だ！ 彼奴達や壺を壊はしてやがる、彼處の中で……やア綺麗だぞ！ 明りが點いて来た。赤い風船玉が上つた、やア飛ぶぞ、舞ふぞ！ おゝ！ おゝ！ 樹の中にランプが點いたぞ！ ……實にいゝねえ！ 方々で小便を垂れてやがる、噴水だ、瀧だ、水が歌つてやがる、おゝ！ 合唱隊の子供のやうな聲だ……吃驚りするぜ！ 瀧だよ！

そして彼は、水の甘い快い歌をもつとよく聞き入りでもするやうに、體を眞つ直ぐにした。彼は強く空氣を吸つた、そして噴水の生々した飛沫を飲んででもゐるらしかつた。だが、次第次第に、

彼の顔は再び苦痛の色を現して来た。その時、彼は體を屈めて、譯の分らぬ脅迫のしこなしをして、分房の壁に沿うて急ぎ足に逃げ出した。

——又掃除人足共が、糞ツ！ ……己を怪んでやがる……靜にしろ、穀つぶし共の塊りめ！ さうだ、手前達やおれを馬鹿にしてけつかる。手前達が飲み上げてさうしてそこん處で手前達の取巻きと一所に我鳴り立てるなアおれをおひやらかす爲めなんだ……叩きつぶしてやるぞ、おれが行つて、手前達の掘立て小屋の中を！ ……糞べら棒！ おれに構はねえで置かねえつてのか！

彼は拳固を固めた。次いで、彼は噎れた叫び聲を放ち、丸くなつて走つた。そして彼は吃つて云つた、齒は恐怖でかち／＼音を立てながら、

——おれに自殺させようつてんだ。いや、おれや飛び込まねえぞ！ ……こんな水位、おれや屁とも思はねえんだ。いや、おれや飛び込まねえぞ！

瀧は、彼が近寄ると逃げ出し、彼が退くと押し寄せて来るのだつた。そして、忽ち、彼は呆然として自分の廻りを眺め廻し、やう／＼聞き分けられる位の聲で呟いた、

——そんな事つてあるもんか、おれに手品師共を向けて寄越すなんて！

——私や行きます、あなた、左様なら！ チェルゴエズは助手に云つた。あんまりひどいんですもの、私や又遣つて來ます。

彼女は眞つ蒼だった。クウボオはつゞいて窓から蒲團へ、蒲團から窓へと、一人ぼつちの騎士をきめ込んでゐた。汗をかいて、骨が折れるのも構はずに、同じ間を置いて叩き立てながら。その時、彼女は逃げ出した。けれど彼女は階段で空しく轉び廻つた。彼女は下へ降りて迄も自分の夫のあきれた亂舞の音を耳にした。あゝ！ 實際全く！ 外に出て、彼女は初めて呼吸が出来た！

その晩、グウト・ドル街の貸家中ではクウボオの奇病の話をしてた。パンパンを今では糞味噌に輕蔑し切つてゐたボッシュ夫婦は、けれども彼女に彼等の門番部屋ですぐり酒を出して、こま／＼した話を聞いた。ロリュウのかみさんが遣つて来た、ボアソンのかみさんも来た。彼等は仕切りなしに註釋を加へた。ボッシュはサン・マルタン街で眞つ裸になつてしまつた或る指物師を知つてゐた、そしてその男はボルカを踊りながら死んでしまつた。彼はアブサントを飲んだのであつた。かみさん達は腹の皮を擦つて笑つた、それは、たとひ悲しい話ではあつても、要するに彼女等には、面白可笑しく思はれた。それから、みんながよく呑み込めないらしいので、ヂェルゼエズは彼等を押して退けて、場所を明けるように叫んだ。そして、門番部屋の眞ん中で、外の者達が見てゐる間中、彼女は恐ろしいしかめ顔をして、絶叫したり、飛び跳ねたり、自分の手を引つて抜いたりしながら、クウボオの眞似をして見せた。さうだ、誓つて！ その通りであつた！ その時、外の者はみんな面喰らはされたと云つた。ある事だらうか！ そんなことをしてゐたら、誰だつて三時間とつゞくもんぢやありや

しない。全くさ！ 彼女は彼を自分の言葉以上だと誓言した、クウボオはその前日から、三十六時間もつゞけ通してやつてゐたのだと云つた。それこそ、若しも彼女の云ふのを信じなかつたら行つて見て来るがよい。だがロリュウのかみさんは、フン、有り難いことだ！ と云ひ放つた。彼女はセイント・アヌへは既に行つたことがあつたのだ。彼女は亭主のロリュウが其處へ足を向ける事すら止め立てした事だらう。その店がだん／＼衰運に傾き、そして葬式の時のやうな顔付をしてゐるボルヂニイに至つては、人生はいつも陽氣なものぢやないのだ、あゝ！ ほんとに全く、さうだ！ と呟いて自ら満足した。すぐり酒は乾された、ヂェルゼエズはみんなに左様ならを云つた。彼女がもう喋舌らなくなつた時、彼女は直ぐに氣狂のやうな頭になつて、眼は大きく開いた。勿論彼女は自分の夫がワルツを舞つてゐる最中の處を眼に見てゐたのだ。その翌日、起きると、彼女は彼處へはもう行くまいと心に誓つた。なんの爲めになるんだ！ 彼女は自分の順番が遣つて来て、正氣を失つてしまふ事を欲しなかつた。けれども、十分間毎に、彼女は再び沈思に陥り、まるで魂が抜け出したやうだつた。だからつゞいて彼女が脚を丸くしてゐたとしたなら、それこそ不思議な位だつた。十二時が鳴つた時、彼女はもうそれ以上ちつと我慢してゐられなかつた、彼女は道の遠い事なんか眼中になかつた、それ程其處へ行つて見たいと云ふ希望と恐怖とが彼女の頭を支配し出した。

あゝ！ 彼女は消息を態々訊ねる必要がなかつた。階段の下から、彼女はクウボオの歌を聞いた。

丁度同じ調子、丁度同じダンスだ。彼女は自分は一寸の間降りて来て又登つて行くのであるやうな気がしてゐた。前日の守衛は、廊下を煎薬の壺を運んで来て、彼女に行き逢ふと、見識り越しに眼を瞬いて挨拶をした。

——ちや、相變らず！ 彼女は云つた。

——おゝ！ 相變らずだよ！ 彼は立ち止らずに答へた。

彼女は入つた、でも彼女は戸の隅の處にちつとしてゐた、なぜなればクウポオの處には人がゐた。プロンドで桃色の顔をした助手は、勳章をつけた、禿頭のそして險相な一人の老紳士に彼の椅子を譲つて、突つ立つてゐた。それは屹度院長だ、彼は錐のやうに酷薄な、そして刺すやうな眼付をしてゐた。頓死の患者を扱ふ商賣人は、みんなかうした眼付をしてゐるものなのだ。

チエルゼエズは、この老紳士を見る爲めに來たのぢやなかつた、で彼女は彼の禿頭の後ろから背延びをして、クウポオを食るやうに見てゐた。この憤激してゐる狂人は前日よりよりひどく踊つたり怒鳴つたりしてゐた。彼女は昔、四旬齋の中日の舞踏會に、洗濯場の屈強な若者共が一と晩中踊り狂ふのを見たことがあつた。だが決して、構へて決して、彼女は一人の男がこのやうに長い間快樂を取り得ようとは思つても見られなかつた事だらう。彼女が快樂を取ると云つたからつて、それは言葉の便宜だ、なぜなればまるで火藥庫をくん嘆みでもしたやうに、我ならずも鯉の瀧登りのやうな

眞似をしたからつて快樂であらう筈はないのだ。クウポオは、汗でぐつしより濡れて、益々湯氣を立ててゐた、それつきりのことだつた。彼の口は叫び立てるので、より大きくなつたやうだつた。お！ 妊娠してるかみさん連などは外にとどまるがよかつた。彼は床の上へ彼の小さな道の出來たのが見られた位、蒲團から窓迄の間を夥しく歩いてゐた。靴拭席は彼の破れ靴で穴を明けられてゐた。いや、全く、いゝ見づらではなかつた、でチエルゼエズは、震へながら、なぜ自分は歸つてなんか來たのか自問して見た。前の晩に、彼女がボッシュ夫婦のところ、この有様を誇張して見せたのを呪はしいとでも云ふのか！ 神かけて！ 彼女は實際の半分も十分には眞似が出來なかつたのだ！ 今や、彼女はクウポオが其處でどんな事を遣つてゐるかをよりよく見てゐた、彼女は空に向つて大きく眼を見開いてゐるのを、決してもう忘れる事が出來なかつたらう。けれども、彼女は助手と院長との間に交はされた話を耳にした。助手は彼女には意味の通じない言葉で、夜分の巨細な症候を報告した。夜中、彼女の夫は話をしたり旋回運動をやつてゐた、その話の意味はかう云ふ事柄であるらしかつた。次いで、禿頭の、餘り丁寧でない、相手の老紳士は、とう／＼彼女の來てゐるのを見て取つた様子だつた。そして、助手が彼に彼女が患者の妻だと云つた時に、警察官のやうな意地の悪い態度で彼女に質問し出した。

——この男の父親と云ふのは酒を飲んだかね？

——左様で御座います、あなた、一寸ばかり、世間並みにです……父親と云ふは飲み過ぎをした
或る日の事、屋根から轉けて死んでしまひました。

——母親の方は飲んだか？

——まア！ あなた、世間並みに、御承知の通り、一杯此處で、又一杯彼處で、と云つた工合に
……おゝ！ 家族はみな當り前の考で御座います！ ……大變若くて、癲癩で死んだ弟が、一人御
座いました。

院長は彼女をその刺すやうな眼で見入つた。彼は又云つた、亂暴な口調で、

——お前さんも飲むね、お前さんも？

ヂェルエズは吃つた、言譯しようとして、何か誓ひの言葉を口にしようとして胸に手を置いた。

——お前さん飲むね！ 氣を付けなさい、飲酒の結果がどうなるかを見るがいゝ……いつかは吃
度、お前さんもかうして死ぬんだ。

その時、彼女は壁に釘付けにされたやうになつてしまつた。院長は背中を向けてしまつた。彼は
フロックコートを着てゐながら靴拭席の埃の吸ひ付くことなんか氣にも掛けないで、蹲まり込んだ。
彼は通りすがりののを待つてゝ、視線を送りながら、クウボオの震へ方を長い間研究した。その日に
は、今度は脚が跳り出して、震へは手から足先へと降つてしまつてゐた。誰か糸を引つ張つてゝ

手足を跳らせ、からだは木で出来でもしたやうに硬張つて、本物の操り人形のやうだつた。病勢は
だん／＼進んで行つた。皮膚の下には音楽があるとでも云ひたげだつた。それが毎三四秒置きに出
て来て、暫くは演奏してゐた。次いでそれが止まりそして又始まる工合は、丁度冬風邪を引いた野
良犬共が、何處かの門の下で小さな戦慄に身を揺られてゐるやうだつた。腹や兩肩は將に沸騰せん
としてゐる湯のやうな戦慄を起してゐた。くすぐられた時の娘のやうにして、悶え苦しんでこの世
を去るとは、それにしても馬鹿氣切つた寂滅であつた！

クウボオは、けれども、はつきり聞き取れない聲で不平を訴へてゐた。彼は前日より餘計苦しん
でゐるらしかつた。彼の切れ／＼な愁訴は如何なる變事が起るかも知れないといふ事を推知させた。
幾千本と云ふピンは彼を刺してゐた。彼は皮膚の上至る處に何か重たいものを荷つてゐた。冷たい
そして濡れた何かの動物は彼の腿の上を這つて、その肉の中へ牙を突つ込んでゐた。次いで外の動
物共が彼の肩に獅噛み付いて来て、彼の背中をその鉤爪で引つ搔きでもするやうであつた。

——喉が渴く、おゝ！ 喉が渴く！ 彼は絶えず唸つた。

助手は棚からレモン水の壺を取つてそれを彼に與へた。彼は壺を兩手で掴んで、液體の半分は自
分の上へこぼしてしまひながら、一と息にぐつと飲み干さうと思つた。然し彼はひどい嫌惡の表情
をして、直ぐに喉から吐き出して、叫んだ。

——糞べら棒！　こりやブランデイだ！

その時、助手は醫師の合圖によつて、水差しを手放さないで、彼に水を吞ませようとした。今度は、彼は唸りながら、火でもくんのむやうにして、ぐつと飲み干した。

——こりやブランデイだ、畜生！　こりやブランデイだ！

前日から、彼が飲むものは一切ブランデイだつた。それが彼の渴きを倍加させた、そして彼はもう飲む事が出来なかつた。それはみんな彼を焼けたゞらせるやうに感じさせた。ポタージュは運ばれた、けれどそれは彼を毒殺するのだと思はせるに違ひなかつた、それにはギトリオルの臭ひがしてゐたから。パンは酸く腐つてゐると言つた。彼の廻りには毒しかなかつたと思つた。分房は硫黄の臭氣を放つてゐたので彼は自分に臭氣を嗅がせる爲めにマッチを擦る人間共を呪うてゐた。

院長は再び起ち上つてクウボオの云ふ處を傾聴した、彼は今度は眞つ晝間に又妖怪を見てゐるのだつた。彼はこの室の壁上に、船の帆位の大きさの蜘蛛の巣を見てゐるのだと信じてゐるのではなかつたらうか！　忽ちこの蜘蛛の巣が一張の網と變じて、その編み目が獨りでに縮んだり、伸びたりし出した、何といふ奇妙な玩具なのか！　數知れぬ多くの黒色の球がこの編目の中をぐるぐる運り始めた、奇術師のあつかふのにそつくりの球で、初めの内は球突戯の球位の大きさをだつたが、やがて、砲弾位になつた、而もこの球が膨らんだり、縮んだりしてゐた、それがたゞ單に彼を惱ま

さう爲めばかりに思はれた。忽ち、彼は叫び出した、

——おゝ！　鼠共だ、鼠がある、こんな時間に。

それは毬共が鼠になつたのだつた。この穢はしい動物共はだん／＼殖えて行つて、網の中をもぐつたり、靴拭席の上へ飛び降りては、其處から消えて行つた。其處には又一疋の猿がゐた、この動物は壁から出て來り、又壁の中へ入つて行つたりして、その都度、彼は鼻を引つ搔かれはしないかと思つて身を退いた位、彼の近く迄押し寄せて來た。急に、それが又變化した。四方の壁は跳り出した、彼は、恐怖と憤怒で喉を絞められさうな聲を出して、繰り返した、

——そら來た、おゝい大變だ！　出してくれ、己や逃げ出すんだ！……大變だ！　惡黨！　大變だ！

張り倒せ！……さうだ、鐘をつけ、烏共の寄りたかり奴！　おれが巡查を呼ぶ邪魔をしてオルガンを鳴らしやがれ！……彼奴達や壁の後ろへ何か機械を備へ付けやがつた、あの廢物共奴！おれにやよく聞える、機械が唸と云つてる、彼奴達やこちとらを飛び上らせようてんだ……火事だ！糞べら棒！火事だ。火事だと云つてるぢやねえか！　やア彼處が燃えてる。おゝ！　明るくなつた、明るくなつた！空中が燃えてる、赤い火だ、青い火だ、黄ろい火だ……おれに燃え付く！助けて！　火事だ！彼の叫聲は噎れた殘喘の中に消えて行つた。彼はもう次第もない言葉しか吐かなかつた、口には泡を溜め、脛は唾液で濡れてゐた。院長は指で鼻を擦つた、患者の重病の場合に、いつも遣つて慣

れ切つてゐる動作に違ひなかつた。彼は助手の方へ振り返つて、中音で訊いた、

七四八

——で體温は、相變らず四十度だ、ね？

——さうです、先生。

院長はしかめ顔をした。彼はなほ二分間、ちつとクウボオを見つめたまゝであつた。それから、彼は肩を揺すつて、云ひ足した、

——同じ手當でよろしい、ソップ、牛乳、鹽酸レモナード、水藥にして規那鹽エックス……患者の側を離れないでくれ給へ、さうしていつでも私を呼んでくれ。

彼は出て行つた、ヂェルエズは病人はもう望みがないのかどうかを訊く爲めに、彼につゞいた。だが彼は實に不愛相に廊下を歩いて行つたので、彼女は敢て彼を呼び留める事が出来なかつた。彼女は戻つて自分の夫を見舞ふのを躊躇しながら、暫くは其處に根が生えたやうに突つ立つてゐた。其處にさうしてゐる事すら彼女には既に可成りに辛らいやうに思はれた。彼女は彼がなほレモン水がブランドイの臭ひがすると叫んでゐるのを聞いたので、取るものも取りあへず、逃げ出した。往來へ出ると、馬の駈け足やら馬車の音やらが、彼女をしてセイント・アラス中が彼女を追躡してゐるやうな想ひをさせた。そしてあの院長は、彼女を脅迫してゐた！ 實際、彼女は既に病氣に取つつかれたやうな氣持だつた。

勿論、グウト・ドル街では、ボッシュ夫婦や外の連中が彼女を待つてゐた。門の處へ彼女の姿が見えるや否や、みんなは彼女を、門番部屋へ呼び込んだ。ほんとに！ クウボオは相變らず保つてゐるかね？ あきれ返つちまふ！ さうだよ、相變らず保つてゐるよ。ボッシュは茫然自失してゐる様子だつた。彼はクウボオが晩までに死ななかつたら一纏賭けると云つてゐたのだつた。どうしたんだつて！

彼はまだ生きてゐるつて！ で、居合せた者は、みんな膝を叩きながら、呆れ返つた。そんな状態であの男は頑張つてゐるなんて！ ロリュウのかみさんは時間を勘定して見た。三十六時間に二十四時間、六十時間だ。素敵な野郎だ！ 六十時間も既に彼は柱戯と怒號の遊戯をしてゐるんだ！ そんな辛抱強い力業ちからわざを見た事がない。だが一纏賭けた手前、苦しさうに笑つてゐたボッシュは、疑はしい様子をしてヂェルエズに、彼女はほんとに確かに事實を誇張して話してゐるのぢやないのかと訊いた。おゝ！ いや、彼は餘りに強く飛び廻つてゐた、そして自分ではさうしようと思つてゐるんぢやないのだ。その時、ボッシュは、益々執拗になつて、みんなに見せる爲めに、彼のしてゐる眞似を少しばかり又やつて見せてくれと彼女に頼んだ。さうだ、さうだ、少しでいゝからも一度！ みんなの願ひだ！ 居合せたものは彼女に、彼女はほんとに素直だからと云つた、なぜつて丁度前日見なかつた二人の隣人も、その光景を見ようと云ふのでわざ／＼降りて来て、其處に居たのだ。門番は皆に整列するやうにと叫んだ、で人々は好奇心で震へながら、眩で押し合つて、門番部屋い眞ん中

を廣くした。けれども、ヂェルエズは頭を垂れてしまった。實際、彼女は自分が病氣になる事を心配してゐた。さうは云ふものゝ、頼まれてみると、ためらつてゐるのではないといふ證あかしを立てようと思つて、彼女は二三度一寸飛ぶ眞似をし出した。だが彼女は氣分が變になつて、後ろへ退つてしまつた。名譽にかけて、彼女には出来ないのだ！ 失望の吐き聲は起つた。これは残念なことだ、彼女の眞似は眞に迫つてゐたのだつたに。が、どうしても彼女に出来ないといふなら、それつきりの話だ！ で、ギルヂニイは彼女の店へ歸つて行つたので、みんなはもうクウボオの事は忘れて、今度は誰に遠慮もなくなつて、ボアソン夫婦の事を盛んに話し出した。その前の日、執達吏共が遣つて來た。で、巡査は彼の地位を失はうとしてゐた。ランティエーはと云へば、彼は直ぐ側のレストオラの娘を付け廻してゐる、派手好きな女で、女屑肉屋を自營するのだと云つてた。ほんとに！ その陽氣さつたらなかつた、彼等は既に店の中に女屑肉屋が坐り込んでゐるのを見たやうな騒ぎだつた、糖菓の後へ、今度は少しばかり腹へこたへるものが並ぶ譯だ。ボアソンのあの鼻下長は、どつちへころんでも、いゝ頭を持つてたもんだ。意地悪るでなければ出来ない商賣をしてゐる男が、自分の家ぢやあのやうな不調法を演じてゐるなんて、何んて悪魔だらう？ 然しヂェルエズの姿を見て、みんな急に黙つてしまつた、もう顧られなくなつてゐた彼女は、手や足を震はせながら、門番部屋の奥で一人きりでクウボオの眞似を遣り出してゐた。ブラヴァー！ 其處々々、それこそみんなが所

望してた處なんだ。彼女は夢から脱け出したやうな様子をして、きよとんとしてしまつた。次いで彼女は棒のやうになつて逃げ出した。ほんとに皆さんおやすみなさい！ 彼女は自分の部屋へ眠る爲めに登つて行つた。

その翌日、ボッシュ夫婦は彼女が、前の二日と同じやうにして、午頃出掛けて行くのを見た。彼等は彼女に御機嫌よう行つていらつしやいを云つた。その日には、セエント・アヌでは、廊下迄もクウボオの怒鳴り聲と靴音が鳴り響いてゐた。彼女は階段の手すりに掴まるかつかまらないに、彼の唸つてゐるのを聞いた、

——屁つぴり蟲共がやつて來やがつた！……少しこつちへ進みやがれ、どやし付けてやるから！……あゝ！ おれをとつちめようてんだな、あゝ！ 屁つぴり蟲共！……おれの方が手前達みんなよりかも偉いんだぞ！ 失しやがれ、糞べら棒！

暫くは、彼女は入口の前で息を吐いた。彼は今敵軍と戦つてゐるんだ！ 彼女が入つて行くと、敵軍は益々増大したり又怯んだりしてゐた。クウボオはシャラントンの瘋癲院から逃亡して來た氣狂のやうに、怒り狂つてゐた！ 彼は分房の眞ん中で、もんどり打つたり、空中を叩いたりしながら手を至る處に、自分の上へ、壁へ、床へと遣りながら、狂奔してゐた。そして彼は窓を開かうとしたり、體を隠したり、防いだり、呼んだり、答へたり、一人つきりで、この魔術師共の深更の會合

をしようとしてゐる、その潮のやうな人間にうなされてゐる男の獅子奮迅の様子をしてゐた。で、ヂェルゴエズは、彼は屋根の上にあるつもりで、一生懸命鉛板を投げてゐるんだなとうなづいた。彼は口笛を吹き、爐の中で鋸を動かし、跪びいて、それを焼きつけるつもりになつて、靴拭席の縁を拇指で撫で出した。さうだ、彼の稼業が、死なうとする時になつて、彼に戻つて來たのだ。そして、彼がそのやうにひどく怒鳴り立てたり、屋根の上で體を丸くしたとしても、それは自分の仕事を本氣に遣らうとしてゐる彼をごろつき共が妨害してゐるからだつた。近所中の屋根の上に、彼を苦しめてゐる無頼漢共がゐた。そして、このやぐざ野郎共は彼の手足に鼠の幾群れかを放つてゐたのだ。あゝ！穢はしい動物共、それが相變らず眼についてゐたのだ！彼は力かぎり地上をその足で擦りながら、空しく鼠共を押しつぶしてゐた、新ら手の行列はつゞいてやつて來た、屋根はそれでもつて眞つ黒だつた。それは蜘蛛共がゐなかつた事か！彼は其處へ這ひ込んで、大きな蜘蛛共を自分の腿へ押し付けてひねり殺す爲めに彼のズボンをあら／＼しく締め付けてゐた。呆れ返つた次第だ！彼は何時迄たつたからつて彼の仕事を終る時がないだらう、みんな彼を殺さうとしてゐるのだ。彼の雇主は彼をマザスの監獄へ遣らうとしてゐた。その時、道を急いでると、彼は腹の中に蒸汽機關が出來たやうに思つた。口を大きく開いて、彼は湯氣を吐き出した、それは濃い湯氣で、分房に一杯になつて窓から出て行つた。で、屈まつて、相變らず湯氣を吐きながら、彼は湯氣の條が展開

して行つて、空に上り、其處で太陽を隠してしまつてゐる外の方をと見入つた。

——おや！彼は叫んだ。クリギヤンクウル通りの一隊だ、熊の假裝なんかして、見榮を切つてやがる……

彼は窓の前に蹲まり込んでしまつた、その様子がまるで屋根の高い處から、街路の行列を目送してゐるやうなであつた。

——騎馬行列が來るぞ、獅子や豹がしかめつ面をして……犬や猫の着物を着た小僧共もゐる……脊の高いクレマンズがゐるぞ、羽の一杯ある鬘を冠つてゐる。あゝ！あきれたもんだ！とんぼ返りをしてゐる、あの女は自分の持つてゐるものをみんな見せて……おい／＼、私の牝鹿や、おれ達に氣をもませるな……え！あきれた野郎共だ、手前達や女を放さねえつてのか！……撃つな、畜生！撃つちやいけねえ……

彼の噎れた、恐怖した聲は高まつて行き、そして彼は盛んに體を低くしては、おまはりや赤いズボン共(群)が下にゐて、男共が彼を鐵砲で狙つてゐると繰り返した。壁の中には、彼は自分の胸の上に向けてゐるピストルの銃身を見た。人々は彼の娘を再び捕へようとしてゐた。

——撃つちやいけねえ、糞ツ！撃つな……

次いで、家々は崩解し出した、彼は崩れて行く四隣の物音の眞似をし出した、とみんな姿をかき

消した、みんな逃げて行つてしまつた。が彼が息を吐いてゐる間もあらせず、遠つた様々の光景が、異常な變動性を以て通過して行つた。喋舌りたいと云ふ狂的な欲望が、彼の口を言葉で一杯にしてゐたので、彼は喉をもごく／＼させるだけで、順序次第もなく、それを口にしてゐた。彼は相變らず聲を張り上げてゐた。

——おや、お前か、や今日は！……冗談ぢやねえ！ お前の髪の毛をおれに食はせるない。そして彼は手で自分の顔の前を拂つて、毛を遠ざける爲めに吹いた。助手は彼に質問した。

——まアお前さん、誰を見てるんだね？

——おれの女房さ、きまつてるぢやねえか！

彼はヂェルエズには背中を向けて、壁を眺めてゐた。

彼女はぞつととしてしまつた、で彼女は自分の姿が見えはしないかと思つて、同様に壁の上を驗べて見た。彼は、矢張り喋舌りつゞけてゐた。

——ねえ、おれを垂らし込んだぢやいけねえ……おれや引つ付かれるのが嫌^なえだ……おや／＼！

お前綺麗になつて来たな、素敵な着物を着てゐるぜ。何處からそりや稼いで来たんだ、牝牛！ 手前引つ張りをして来やがったな、駱駝阿魔！ 一寸待て、おれが懲らしてやるから！……へん？ 手前は手前の旦那をスカートの後ろへ隠くしてやがるな。その男と何をしやがったつてんだ？ さア

お辭儀をして見せやがれ、おれが見てやるから……糞べら棒！ やつぱりあの男だ！

恐ろしい一と飛ばで、彼は頭を壁へ打つ付けに行つた。だが毛蒲團の張つたのが打撃を弱めてしまつた。で、たゞ跳ね飛ばされて、彼の體が靴拭席の上へでんぐり返つた音が聞えたばかりだつた。

——ぢやお前さん、誰を見てるんだね？ 助手は繰返した

——帽子屋だ！ 帽子屋だ！ クウボオは唸つてゐた。

で、助手がヂェルエズに問ふと、彼女は答へることが出来ないで口籠つてゐた、なぜなれば、この馬の有様は、彼女の心の中に彼女の前生の一切のだからしなさを感^じさせてゐたから。亞鉛工は拳を固めてゐた。

——おれ達二人の處決する時たぞ、兄弟！ おれは手前を遣つ付つちまはなけりやならね！ ああ！ さア来い、そのやくざ阿魔と腕をつないで、大勢の前でおれの面へ泥を塗りに遣つて来やがれ。よし来た！ 手前の息の根を止めてやるぞ、さうよ、さうよ、おれがしてやる！ しかも手袋なんかはめねえんだぞ！……虚勢を張るねえ……これでも喰らへ。そらどうだ！ どうだ！ どうだ！ 彼は空中に拳固を送つてゐた。その時、狂暴に彼は心を奪はれてしまつた。退く時に壁に突き當つたので、彼は後からなぐられたのだと思ひ込んだのだつた。彼は振り返つて、夢中になつて張り布へ喰つてかゝつた。彼は跳ね返り、一方の隅から他方へと飛び、腹を、臀を、肩を打つて、ころ

んだり、起き上つたりしてゐた。彼の骨は柔かくなり、肉は濕つた麻屑のやうな音をさせてゐるのだつた。そして彼はこの驚くべき遊戯に兇猛な脅迫やら、喉が裂けるやうな野蠻な叫び聲やらを伴つてゐた。けれども、奮闘は彼に取つて悪變化を來たしたに違ひなかつた、彼の息使ひは短くなり、その眼窩からは兩眼を飛び出させてゐた。そして彼は次第々々に子供のやうな怯懦な心に捕はれて行く様子だつた。

——人殺し！ 人殺し！……失しやがれ、二人共、おゝ！ 畜生奴等、二人でふさけてやがる。やア眞つ逆様に倒れやがつた、あの阿魔は！……彼奴アまるるに違えねえ、鬼が付いたんだ……ああ！ 悪黨、女を殺してしまやがつた！ 彼奴ア、ナイフで女の脚を切つたんだ。も一つの脚は倒れてる、腹は二つに裂けてる、血で一杯だ……おゝ！ 畜生、おゝ！ 畜生、おゝ！ 畜生……

そして、汗で浴したやうになつて、頭の毛は額の上に逆立ち、恐怖して、丁度呪はしい光景を押し遣りでもするやうにして、兩腕を激しく動かしながら、彼は後ずさりしながら逃げ出した。彼は心を劈くやうな泣き言を吐き出すやうに二た言云ふと、彼の踵が絡らまつたので、靴拭席の上に仰のけに引つくり返つてしまつた。

もし／＼、もし／＼、死んでしまひました！ チェルエエズは兩手を合せて云つた。

助手は進み出て、クウポオを靴拭席の中から引きすり出した。いや、彼は死んではゐなかつた。

彼等は早速靴を脱がせた。と彼の素足は先の方が動いてゐた。そしてそれは左の方から他方へと間を置いて、忙しない、そして規則立つた小さなダンスで、ひとりで踊つてゐたのだつた。

丁度、院長は入つて來た。彼は、一人は瘦せた、一人は肥つた、彼のやうに勳章をさげた二人の同僚を連れて來た。三人共前屈みになつて、何んにも云はずに、患者を體中見てゐた。それから、早や口に、中音で、彼等は話し合つた。彼等は患者を腿から肩迄着物を剝いだ、チェルエエズはぞつとしながら、裸で並べられたこの胴體を見てゐた。全く！ それで完全だつた、震へは腕から降つて行つたり脚から登つて來たりしたのだつた、胴體それ自身が、この時には、活動に入つてゐた！ 本當にこの道化者は腹でも亦ふさけてゐた。それは脇腹に沿うた微笑だつた、お腹の窒息だ、そしてそれは笑ひを殺してゐるやうな様子だつた。と一切が運轉し出した、文句はなかつた！ すべての筋肉は舞踏を始め出したかと思ふやうに震へ、皮膚は太鼓の皮のやうに震へ、頭の毛は「今日」はをし合つてワルツを踊り出した。要するに、それは日が出て、すべての踊り子共が手をつないで踵を踏みならず時の、最後の駈け足とでも云つていゝ大動亂に違ひなかつた。

——眠つてるのだ、院長は呟いた。

そして彼は他の二人に患者の顔を注意させた。クウポオは、眼瞼を閉ぢて、彼の體中を引きつつてる小刻みな神経の振動をさせてゐた。彼はかうして押し潰されて、突き出した腦をし、夢魔を宿し

てゐる死者の變形したやうな顔をして、なほ更に恐ろしい形相となつてゐた。然し醫士等は、足を覗いて見て、深奥な興味を持つてゐるらしい様子で行つてその上へ鼻を突き出した。足は依然踊つてゐた。クウポオは空しく眠りこけてゐるのに、足共は踊つてゐるのだ！ おゝ！ クウポオ親方は斬をかいてゐたのに、そんな事に頓着なく、彼の足は急ぎもせずゆつくりもしないで、彼等の仕事をつゞけてゐた。本當にからくり仕掛けの足共だ、勝手に樂みを見付けてやつてる足共だつた。けれども、ヂェルゼエズは、彼女の夫の胴體に手を置いてゐる醫師等を見て、自分も亦それをさすつてやりたくなつた。彼女はそおつと近寄つて、彼の片一方の肩に手をかけた。そして彼女はその手を一分間さうしてゐた。神かけて！ その中には何が起つてゐると云ふのだ？ かうしてゐると肉の底迄も踊つてゐ、骨自身も跳ねてゐるに違ひなかつた。戦慄や波動が遠くの方からやつて來て、皮膚の下を川のやうになつて流れて行つた。彼女が少し壓して見ると、骨髓が痛いと呼ぶやうな氣がした。小さな波が、渦卷の表面のやうに、笑顔を作つてるのが片眼を開いただけでも見られた。然し、内部では非常に荒れ狂つてゐるに違ひなかつた。何んてあきれた働きだ！ 土龍とらごもの働きだ！ それはアソンモアルのギトリオル酒がその中で鶴嘴の打撃を與へてゐるのだつた。體全體はそれで潰つてゐた、そして呪ひあれ！ この働きはクウポオを、屋體骨中の萬遍のない、又絶え間もない震動で、搗き砕いたり、持ち運んだりして、その仕事を完成しなければ止まなかつたのだ。

醫士等は去つてしまつた。一時間の終りには、ヂェルゼエズは、助手と共に居残つて、低い聲で繰り返した。

——もしく、もしく、死んだのですか……

だが足を見つめてゐた助手は、頭を振つて否と云つた。裸の足は、ベッドから出て、相變らず踊つてゐた。それはあんまり綺麗ではなかつた、そして長い爪も生やしてゐた。數時間はなほ過ぎた。忽ち、その足は硬張つて、動かなくなつてしまつた。その時、助手はヂェルゼエズの方へ向き直つて、云つた。

——これでおしまひです。

死だけが足の動きをとどめ得たのだつた。

ヂェルゼエズはグウト・ドル街へ歸つて見ると、ボッシュ夫婦の處では近所の細君等が一團になつて景氣のいゝ聲で喋舌り立てゝゐた。彼女はこの頃中のやうに、みんなが彼女の消息を聞かうと思つて自分を待つてゐるのだと思つた。

——お陀佛になつたよ、彼女は戸を押しながら、疲憊した、そしてきよとんとした顔付をして、靜かに云つた。

然しみんなは彼女の云ふ事などに耳を傾けてゐなかつた。貸家中が上の空だつた。おゝ！ 飛びつ

切りの話だ！ ポアソンは彼の女房をランティエーと一所の處をとつちめてしまつたのだつた、みんな正確ないきさつは知らなかつた、めい／＼が自分勝手にその話をしてるのだつたから。要するに、彼は相手の二人が彼を待ち設けなかつた時に、彼等の背後に現はれたのだつた。かくてみんなはそれに註釋を加へ、かみさん連は唇を尖らしながら互にそれを繰り返してゐた。さうした有様は、勿論、ポアソンの癩癩玉を破裂させた。本當に虎のやうだつた！ 無口な、巡査の棒は背中へ背負つてしまつて歩いてゐるやうなこの男は、猛り出して躍りかゝつた。次いで、なんにももう聞えなくなつてしまつた。ランティエーは亭主に向つて事件を説明したに違ひない。どつち道、それ以上には進まなかつたらしかつた。でボッシュは直ぐ側のレストオランの娘が、屑肉屋を始める爲めに、店を確かに引き受ける事になつたと告げ知らせた。帽子屋のあの策士は屑肉を崇拜し出した。

けれども、ヂェルゼエズは、ロリュウのかみさんにルラのかみさんが遣つて來たのを見て、だらしたく繰り返した、

——お陀佛になつてしまつた……あゝあゝ！ 四日の間震へたり怒鳴つたりして……

その時、二人の姉妹はそれでも彼女等のハンケチを引きずり出さない譯には行かなかつた。彼女等の兄弟は多くの缺點を持つてゐた、が畢竟は彼女等の兄弟なのだ。ボッシュは肩を聳かして、みんなの者に聞える位十分高い聲で云つた、

——馬鹿々々しい！ 高が酔つ拂ひぢやねえか！

その日から、ヂェルゼエズはちよい／＼正氣を失ふので、貸家中の好奇の一つは彼女がクウポオの眞似をするのを見る事だつた。もう彼女に遣つて見せてくれと頼む必要はなかつた、彼女は足や手を震はせ、無意識な小さな叫び聲を放ちながら、無料で芝居をやつて見せた。勿論彼女はセエント・アヌで自分の夫を餘りに長い間見てゐるうちに、そんな癖が傳染してしまつたのだつた。だが彼女は幸福ではなかつた、彼女は彼のやうにそれで死んでしまひはしなかつた。それは檻から逃げ出して來た猿のやうなしかめ顔をする事に限られてゐた、で街々では、悪童共が彼女にキヤベツの心を投げ付けた。

ヂェルゼエズはかうした状態を幾月も持續した。彼女は更に低く跛を曳き、最下等の侮辱を受け、ひもじいので毎日少しづゝ死んで行つた。彼女は四スウの錢でも手にしようもんなら、直ぐに行つて飲んで壁を叩き出した。彼女は近所中の汚ない用事を仰せ付かつてゐた。或る夕の如きは、何か汚ないものを彼女が食はなかつたら賭けをしよう云ふ騒ぎだつた。所が彼女は六スウを貰ふ爲めにそれを食つてしまつた。マレスコオ氏は彼女を七階の部屋から追ひ拂ふことにきめた。が、ブルユ爺さんが梯子段の下、彼の穴の中で死んでたのを見付け出したので、家主は彼女をこの凹みへなら置いてやつてもいゝと云ふ事になつた。今では、彼女はブルユ爺さんの巢の中に住んでゐた。そ

の中で、古藁の上で、彼女は空腹をかゝへて、骨々を氷らせ、口をかち／＼させてゐた。大地は彼女を要求してなかつた、明かに。彼女は阿呆になつてしまつて、鼻けりを付ける爲めに、たつた七階から中庭のペーヴメントの上へ身を投げようとすら考へてはゐなかつた。死は彼女が營んでゐる呪ふべき生活の中に彼女をかうして終局迄曳きすつて置いて、少しづつ、切れ／＼にして、掴まんでゐるに違ひなかつた。かくて彼女がどう云ふ工合にして死んでしまつたかは誰も決して正確には知らなかつた。みんなは何んのかんのと云つた。だが實際は彼女は貧乏に、腐つた彼女の人生の諸の汚穢と疲労とに、別れを告げたのであつた。彼女はロリュウ夫婦の言葉に従へば、溶けて往生したのであつた。或る朝、廊下へ出ると悪臭がするので、二日この方彼女を見なかつた事を近所の者は思ひ出した。で行つて見ると、彼女はもうその巢の中で、海老色になつてしまつてゐた。

丁度、バツウヂユ爺さんは、彼女を荷造りしてやるにいゝやうな、貧乏人用の棺桶を腋の下へ抱へ込んでやつて來た。彼はその日には、まだいゝ加減酔つてゐたが、どつちにしても元氣なもので、そして河原鵜のやうに陽氣だつた。彼は自分の受持のお得意が出來たのを知つた時には、彼の小さな仕事の支度をしながら、悟りすました考を口に出した。

——みんな行くんだ……何も押し合ふ事アねえ、みんな行つたからつて場所はいくらでもあるんだ……だもの急ぐ奴ア馬鹿だ、なぜつてそんなに早く着けるもんか……おれが、おれや出來るだけ

喜ばせてやりやいゝんだ。或る者は行きたいと云ふ、外の奴等は行きたくねえと吐かす。まア一寸待つたり、見てみねえ……行きたくねえと吐かした女が其處にあつた、次ぎにや行きてえとおつしやつた。ぢや、その御仁を待たせたからつて……結句、其處へ落ちつくのさ、さうして、實際さ！その女アさうなつちまつたぢやねえか！　さまア見やがれ！

で、彼はヂェルエズをその大きい黒い手で掴んだ時には、或る愛情に捕はれてしまつた、彼は自分自分に對してあのやうに長い間岡惚れをしてゐたこの女を徐かに持ち上げた。次いで、彼女を早桶の底へと慈父のやうな注意で以て横へると、彼は二つする吃逆しゃくりの間に、吃りながら云つた、

——ねえ……よく聴いといで……おれだよ、おかみさん達の慰め主、ビビ・ラ・ヂエター(四輪車)だよ……なア、お前は仕合せ者さ。ねんねをしなよ、私の別嬪さん！

——了——

大正十二年四月二十日印刷
大正十二年四月廿五日發行

(定價參圓)

◀ 居 酒 屋 ▶

翻譯者
發行者

木村
佐藤
義亮

幹

發行所

新 潮

社

東京市牛込區矢來町三番地

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

『居酒屋』の續篇——ゾラ作 宇高伸一氏譯

ナ 世界文藝全集 (7)

四六判六百卅頁
總洋布天金特製
定價貳圓五拾錢
郵送料金拾貳錢

『ナナ』! 『ナナ』! 曾て永井荷風氏の抄譯出でて忽ち發賣を禁止せられ次いて本間久氏の全譯また同じき厄に會ひ、此の稀世の大名著は到底我讀書界に復活するの機なかる可きを想はしめしが、時運際會、こゝに其の一句を略することなき全譯を公にするを得るに至れり。

出版界稀有の盛況を看よ。
一舉に百七十版に達して暴風の如き賣行きを看よ。

▼ナナ、この美しく痛ましい女の淫蕩を極めた生涯は、極めて大膽に、極めて露骨に描かれてゐる。今はじめて此の名篇の完譯を得たことは我文壇の大なる喜びであらねばならぬ……(萬朝報評)
▼今迄完譯のなかつた此書が今度移植された事は喜ばしい事と思ふ。一部の人から誹淫の書と言はれる作ではあるが、作者の寫實的筆致は、殆んど其の頂點に達してゐる。……(大阪毎日新聞評)
▼男女の内慾描寫の大膽は、眞に驚く可きものである。姦通もある、同性の愛もある。不倫な戀もある。而も一卷を通じて女性の豐滿なる肉の魅力を強調し、嘆美せるものとも見る可く、誠に稀有の傑作と云ふことを得よう。……(國民新聞評)

世界文藝全集

◀約一百卷の定豫——空前の大叢書▶

(1) □ ボヴリイ夫人 中村屋 湖氏譯	(2) □ ギルヘルム・マイステル 中島 清氏譯	(3) □ 神々の死 米川正夫氏譯	(4) □ 赤い部屋 ストリンドベルヒ著 阿部次郎氏共譯 江馬修氏譯	(5) □ 神々の復活 (冊二) 米川正夫氏譯	(6) □ ナ 宇高伸一氏譯	(7) □ 赤と黒 (冊二) 佐々木孝丸氏譯	(8) □ ショウウ一幕物全集 市川又彦氏譯
--------------------------------	------------------------------------	-----------------------------	--	--------------------------------------	--------------------------	-------------------------------------	----------------------------------

總洋布天金最上製 ◊ 一冊六頁百内外
一冊貳圓五拾錢 ◊ 送料一冊貳拾錢

2679

アルツイバアセフ著 長岡義夫氏譯

全二冊完了

■ 全 最後の線 ■

總洋布天金特製
一冊壹圓八拾錢
送料一冊拾錢宛

本書は露文より直接移植せる全譯にして、四六型最上製の美本也。尙ほ、本書と同時に出版たる他書肆の同譯本に比して、定價は三分の一の低廉也。

「サアニン」に於て、勇敢に生の力を謳歌したアルツイバアセフは、「最後の線」に於て、大膽に、死の思想を鼓吹してゐる。彼の虚無哲學が茲に完成されたと云はるゝ此の作は、實に彼の代表作である。その特色たる性慾描寫も亦、此の一篇に於て、最も猛烈、奔放を極め、所謂肉の詩人たるアルツイバアセフの全面目は、遺憾なく發揮しつくされてゐる。數人の青年と數人の少女とが、性の亂舞と肉の狂歡とに若き命を抛つて、相次いで最後の線、即ち死の破局に陥るの徑路が、深刻云ふばかりなき筆に活寫されて、濃彩の中に一脈の凄氣を醸するところ、まことに、世界近代文學中の一異彩たるを失はない。(全二冊、完了を告げた)

■ 全 譯 サアニン (第十一版) アルツイバアセフ作 中島 清氏譯
上製六百五十頁 定價貳圓 郵送料拾錢

500

15



終